

活 動 報 告



国際シンポジウム (神奈川大学人文学研究所主催)

表象としての<日本>:近代ヨーロッパの場合

— 神奈川大学・ヴェネツィア大学 学術交流の現場から —

世界へ、そして未来へ
KU 神奈川大学

横浜キャンパス 23号館206号室

2009年

10月3日

日(土) 10:00~16:55

参加自由

無料

使用言語 日本語

近世・近代の日本および日本人は、どのようにイメージ化されてヨーロッパに伝えられ、どんな反応を引き起こしたのか。日本とイタリアの研究者が、その諸相をめぐって論じ合う。

1. 研究発表の部

10:00	開会の辞: 中島 三千男 (神奈川大学学長)
10:10	アルド・トッリーニ (ヴェネツィア大学東アジア学科・教授)
11:00	「16, 17世紀に西洋人から見た日本人」
11:10	伊坂 青司 (本学国際文化交流学科・教授)
12:00	「ケンペル『日本誌』の<日本>表象—精神文化を中心にして」
昼食	
13:00	ローザ・カーロリ (ヴェネツィア大学東アジア学科・准教授)
13:50	「1921年の皇太子裕仁のイタリア訪問—相互イメージ・表象」
14:00	日高 昭二 (本学国際文化交流学科・教授)
14:50	「越境する表象—近代日本とイタリア」

2. パネル・ディスカッションの部

15:15	出席者 アルド・トッリーニ
14:45	伊坂 青司
	ローザ・カーロリ
	日高 昭二
	司 会 鳥越 輝昭 (本学国際文化交流学科・教授、人文学研究所所長)
16:45	閉会の辞: 鳥越 輝昭



神奈川大学 横浜キャンパス
横浜市神奈川区六角橋3-27-1

- 東急東横線白楽駅下車 徒歩13分
- 渋谷駅から急行利用・菊名駅にて各駅停車乗り換え 約30分
- 横浜駅から各駅停車利用 約5分
- 横浜市営バス (横浜駅西口バスターミナルより)
- 東横36系統/菅田町または緑草庫行 神奈川大学入口下車 徒歩3分
- 東横82系統/八反橋または神大寺入口行 神奈川大学入口下車 徒歩3分

問い合わせ: 神奈川大学人文学研究所 電話: 045-481-5661 (内線: 4224)

URL: <http://human.kanagawa-u.ac.jp/kenkyu/>

2009 年 10 月 3 日 (土)

神奈川大学人文学研究所主催 国際シンポジウム

「表象としての〈日本〉：近代ヨーロッパの場合 —神奈川大学・ヴェネツィア大学学術交流の現場から—」

研究発表概要 (発表順)

「16, 17 世紀に西洋人から見た日本人」

Aldo Tollini (アルド・トッリーニ, ヴェネツィア大学東アジア学科・教授)

16-17 世紀に, 宣教師によって, 年間書簡が日本からヴァチカンに送られ, キリスト教の布教の状況のみならず, 日本人の様子や *cantagues* (気質) などが描かれた。ヨーロッパで, それに基づいて, 16 世紀から 18 世紀の間に, 日本に関する興味がわき, 日本の表象を記述する本がたくさん出され, 日本の情緒が広く知られるようになった。

1582 年に天正遣欧使節に際して, 西洋人が初めて三人の日本人に会うことができたときの詳しい報告も残っている。

そのような資料に基づいて, 西洋人の目で見えた最初の日本人の描写について紹介したいと思う。

Aldo Tollini

専門: 日本古典語, 日本仏教

代表的研究業績 3 点:

- ・ *La concezione poetica di Fujiwara no Teika*, (a cura di Aldo Tollini) (アルド・トッリーニ編『藤原定家の詩の概念』), Libreria Editrice Cafoscarina, Venezia, 2006.
- ・ “Le descrizioni del Buddhismo nei primi

scritti dei missionari cristiani nel Giappone del XVI secolo” (「16 世紀日本に滞在したキリスト教宣教師初期文書にみられる仏教の記述」), *Quaderni di Asiatica Venetiana*, numero speciale “Identità e Alterità: Tra Oriente e Occidente e tra Oriente e Altri Orienti”, Dipartimento di Studi sull’Asia Orientale, Università “Ca’ Foscari” di Venezia, Quaderno n.1/2005, Venezia, 2007, pp. 101-126.

- ・ *Antologia del Buddhismo giapponese* (アルド・トッリーニ編訳『日本仏教文選』), Einaudi, Torino, 2009.

「ケンペル『日本誌』の〈日本〉表象—精神文化を中心にして」

伊坂 青司 (Isaka Seishi 本学国際文化交流学科・教授)

ドイツの冒険的博物学者ケンペル (Engelbert Kämpfer 1651~1716 年) によってもたらされた日本情報が, 18 世紀のヨーロッパにどのような〈日本〉表象を形成することになったのか, 彼の『日本誌』を素材に, とりわけ日本の精神文化を中心に報告したい。

ケンペルは来日するに先だって, 哲学・言語・歴史・薬学などを広く修得し, 博物学にも関心を

示している。博物学は地球上の鉱物・植物・動物そして人類諸民族の特性などを総合的な研究対象にし、ケンペルは博物学的手法によって日本情報を記述している。彼は「風土」といった自然条件から日本民族の文化的特徴を浮かび上がらせ、日本民族に固有の精神文化を神道のうちに見ようとしている。そのようなケンペルの日本文化理解のうちに、キリスト教とは異質なルネサンスの新プラトン主義の影響を垣間見ることができる。

ケンペルによる日本の鎖国政策への肯定的評価にもかかわらず、近代西欧における啓蒙主義の席卷によって、近代化に遅れた鎖国日本という表象が作られてゆく。しかし、民族文化についての彼の多極主義的な視点は、現代の文化グローバリゼーションのなかで、見直されるべき意義を有している。

伊坂 青司

専門：哲学、生命倫理、文化比較論

代表的研究業績3点：

- ・『ヘーゲルとドイツ・ロマン主義』（御茶の水書房、2000）
- ・『ドイツ・ロマン主義研究』（編著、御茶の水書房、2007）
- ・『表象としての日本』（共著、御茶の水書房、2009）

「1921年の皇太子裕仁のイタリア訪問—相互イメージ・表象」

Rosa Caroli（ローザ・カーロリ、ヴェネツィア大学東アジア学科准教授）

1921年（大正10年）3月3日の朝早く、軍艦香取は旗艦鹿島に護衛され、ヨーロッパに向けて横浜港を出発しました。その船には特別な船客、皇太子裕仁殿下が乗っていましたが、それは日本の歴史上まったく新しい事件でした。それ以前には、在位中の天皇にせよ、皇太子にせよ、この「神聖なる地」の国境を越えたことはなかったのです。

従って、日本の皇位継承権を持つ皇太子がヨーロッパ五カ国、イギリス、フランス、ベルギー、

オランダ、そしてイタリアを訪問したのは、異例の「行啓」だったということになります。

本発表では、皇太子のイタリアにおける旅程、イタリア王国とヴァチカンの最も権威ある人々からの歓迎、およびイタリアの新聞による皇太子に関する情報や印象などについて述べます。

Rosa Caroli:

専門：近代日本社会史

代表的研究業績3点：

- ・ *Storia del Giappone*（日本の歴史）、Laterza, Roma 2004, 339 pp.
- ・ *Il mito dell'omogeneità giapponese: storia di Okinawa*（日本の単一民族の神話—沖縄の歴史）Franco Angeli, Milano 1999, 352 pp.
- ・ 「琉球・沖縄におけるアイデンティティの光と影」『国際日本学』第4号、法政大学国際日本学研究所、2007年（57-76頁）

「越境する表象—近代日本とイタリア」

日高 昭二（Hidaka Shoji 本学国際文化交流学科・教授）

イタリアの文化が、近代の日本にもたらしたものととは何か、次の三つを軸にして考える。第一は、有島生馬の小説『蝙蝠の如く』（1911年）が示したイタリア／日本へのまなざし、第二は、明治末から大正初期にかけて輸入・上映されたイタリア映画（とくに『アントニーとクレオパトラ』1914年および『カピリア』1916年）の衝撃、第三は、小山内薫によるダヌンチオの翻案劇『緑の朝』（1918年）をめぐる演劇界の反応である。これらを通して、文化が「国境」を越えるとき何が起こるのか、ささやかな視点を据えてみたい。

日高 昭二

専門：近代日本文学

代表的研究業績3点：

- ・『文学テキストの領分—都市・資本・映像』（白地社、1995）

- ・『近代つくりかえ忠臣蔵』（岩波書店、2002）
- ・『菊池寛を読む』（岩波書店、2003）

（司会者）鳥越 輝昭（Torigoe Teruaki 本学国際文化交流学科・教授）

専門：比較文学，比較文化史

代表的研究業績3点：

- ・『ヴェネツィアの光と影—ヨーロッパ意識史のころみ』（大修館書店、1994）
- ・『ヴェネツィア詩文繚乱—文学者を魅了した都市』（三和書籍、2003）
- ・F・バウマー『近現代ヨーロッパの思想—その全体像』（訳書、大修館書店、1992）

「16, 17 世紀に西洋人から見た日本人」

Aldo Tollini

司会：Tollini 先生は日本の古典語、日本の仏教の専門家でいらっしゃいます。お手元の資料には今日の発表の概要が載っております。そして概要の下には多くの研究業績の中から代表的な3点を上げております。ご覧頂きますと、藤原定家の詩の概念、16世紀頃に日本に滞在したキリスト教宣教師の初期の文書に見られる仏教を抜っておられます。日本仏教の原典について編纂・翻訳されたものも出版されている先生です。

学生さんはご存じないかもしれませんが、16, 17世紀頃の日本ではキリスト教が大変盛んでして、最高で70万人位の信者がいました。当時の日本の人口が1200万位のうちの70万人の信者です。人口が10倍になった今は、カトリックが50万位、プロテスタントは60万位という状態で、今日Tollini先生が発表される時期が日本のキリスト教のピークであって、その頃日本で布教した宣教師が日本について色々とヨーロッパに報告をしております。先生はその報告をイタリア語、ラテン語、ポルトガル語の原典にすべて当たられて、今日のご発表下さるという訳で、なかなか聞けない話だと思います。ご清聴よろしく申し上げます。

Tollini：皆さん、おはようございます。ヴェネツィア大学東アジア学科のTolliniと申します。神奈川大学にお招き頂いて本当に嬉しく、有り難く思っております。ヴェネツィア大学と神奈川大学との交流がますます発展する事を願っています。

私に与えられた題は「表象としての日本」という幅の広い題です。外国人として出来る貢献は、

外から日本を見た印象であると思いますから、それについて述べたいです。しかし外国人の目で見えた日本というテーマはまだ幅が広く、絞る必要があると思います、ヨーロッパ人から見た日本人、時期はヨーロッパと日本の出会った16, 17世紀の時代を選びました。その時期のヨーロッパ側の記録は豊富に残っていて、今の日本人もきっと関心を持つだろうと思います。こうした資料は少なくとも4種類に分けられます。

まずはキリスト教関係の資料で、日本で活躍していた宣教師の資料で、例えば宣教師の年間報告等の西洋言語で書かれた物です。それから天正使節(1582年～1594年)に関係あるヨーロッパ人が書いた本。

次は俗人側の資料。商売等の目的で航海した人の記録と以上の記録や報告に基づいてヨーロッパで書かれた記述、それ以外の日本人を直接見て書かれた資料といった物があります。

現在ヨーロッパの図書館や国民図書館に保存されている資料は、特にイタリアは信じられない程その数が多く、研究の余地が沢山あります。日本人を描写した記録も多く、どう選べば良いか迷う程です。しかし、よく見れば日本人の表象について書かれた描写は数多い訳ではないので、それを使う事にしました。ここでは先に述べた4種類の代表的な資料を選んでイタリア語、ポルトガル語、スペイン語から日本語に訳しました。

1. 「イタリアで見た日本人天正使節」(1586年)。これは日本人使節の到着からリスボン出発に至るまでの記録です。彼ら日本人の使者は4人いて、ローマ教皇を訪れました。一般のローマ

人は日本人を見た事がありませんでしたから、皆に4人の容貌と作法を描写し伝える為に、こういう記録を書いたという事です。「使者にお会い出来ずご覧にならなかった方々が多いだろうから、彼らの日本の習慣、作法についてお知りになりたいだろうと思ったので、その他の細かい事は控えて少し説明申し上げればお喜びになるだろう。まず彼らの年齢について言えば、ローマに到着した時は皆18歳前後であった。身長は普通の日本人が余り高くないように、私達の間よりやや低い。顔色についてはその国が大変寒いので日本人は白人と言われているが、長い旅の辛苦等のせいか色が付いて、どちらかと言えば薄緑色に近い。目は小さく、視力が鋭敏である。鼻の先は平べったく、顔は痩せ衰えているでもなく、丸くも無い。一般の外観はとても素朴で品格が高く見えます。体質は健康的だが、何度も繰り返された大変な風土の変化や食べ物の変化、途切れない旅の強烈な疲れの為に、4人とも時々病気になった事がある。食習慣は自身の道徳や節制、日本人の習慣の為、淡白で質素である。ワインを全く口にせず、いつも水だけ飲む。その水は日本の習慣通りに、かなり温かくして食事の終わりに一度だけ飲む。この使節団の実際についても一言追加すると、日本人の一般的な習慣として、食べ物を必ず皿に少し残す。その理由は食欲に執着することを下品とし、逆に自制出来る事が上品だと見なされているからだ。食べ方も私達と随分違い、床に座り個別に自分の前に小さな食卓を備え、料理が変わる度にその食卓も変わる。しかし、使節らが私達の椅子に座りテーブルで食事を取る事に慣れてくると、こちらの食べ方が彼らの食べ方よりも楽だと分かった様子を見せた。言語の習得について言えば、皆少しポルトガル語が出来、ラテン語、スペイン語もかなり良く出来る者がいた。しかし必ず通訳を介し、自分の言葉しか使わない。イタリア語は僅か勉強したうえ、幾ばくか分かる。ラテン語も勉強しているが、今の旅の多忙や他の色々な用事でたいてい文法のところで留まっている。しかし私達の文字を大変上手に書く。日本の国民に共通しているように、時間が経つと、彼らが非常に賢いと分かる。科学の分野だけでなく、

どの学問でも早く学び、同じ様に音楽も短期間に多種の楽器、特にチェンバロを上手に弾く事が出来た。賢明である以上に、年齢の若さを越えた思慮分別や慎重さも明らかに示していた。従って、彼らの行動や発言の中に幼稚なものは一切なく、常に成熟していて、慎重な大人の厳粛さを示していた。また召使に向かっても必ず礼儀正しく、軽率な事もなければ下品な事ももちろん無かった。この厳粛さの為、一度も驚いた態度を見せなかったが、賞賛の価値のあるものに対しては言葉上手に褒める事を怠らなかった。会話ではそれぞれの方々と疎かにする事なく、行儀よく、正当な敬意を表した。これも彼らを高く評価する理由であることが認められた。友人の間の礼儀は言いようがない程、我等とは違いがあるが、彼らは宮廷で育ったかのように短期間で我らの儀式を的確に覚えて態度に表した。

彼らの道徳と信心は、明らかに正しく出来たキリスト教信者の精神的な働きの成果の報いである事が分かる。それゆえ神聖を汚す行動からは遥かに遠く、敬神の行いに、そしてそのさまざまな具体的な行いに大いに心が向かった。その敬神の行いが、若い年齢や大変な旅の多忙と困難によって、それから皇子や偉い人から受けた敬意や行為とによって逸らされない事は特に尊敬すべきである。昼間の祈りに加え、毎朝定期的に祈祷を捧げ、夕方には良心の糾明を行った。それは、いかなる用事があっても、例えば旅や他の妨げがあってもかならず皆行った。毎日のミサ聖祭に参列した時には、真剣に崇敬や感謝の気持ちを表した。告解には8日毎に赴き、時にはそれより短い期間のこともあった。このような秘跡は告解を聴く司祭によるので、司祭の都合が悪くて延ばすという事がなければ、必ず毎日曜日に聖体の秘跡に参列した。この時には前もって精を出して準備をしていた。そのために特別の祈りをし、皆一緒に戒律を守っていた。毎金曜日は習慣的に断食を守り、毎日の夕飯も普段から小食にし、夕食というよりも断食と言っても過言ではなかった。

精神上の事について言えば、キリスト教の道徳、例えば謙遜したり、自分をへりくだったり、俗世を軽蔑したり、自分の靈魂を大事にしたり、

その他の高尚な感情については、神様が彼らに豊富にお恵みになったので、彼らは聖職者のようにも、宗教的な最上級を狙う人のようにも見えた。時に彼らは精神的な問題についてお互いに話し合ったり、他の人に質問したりして、それを見て周りの人は大変喜んだ。

最後に彼らの信心について、多くの例の中で1つだけ取り上げたい。使者の1人は聖人の幾つかの聖遺物を持ち帰る為に頼んだが、直ちには貰わず数日後に延期し、その間に適切に受け取る為にお祈りを捧げ、特別の告解を受けた。これは彼らが神聖な事柄について崇拜し、自分が聖物を受け取るに値しないと思っている事を明らかに示している。

彼らはヨーロッパのキリスト教的な社会について、悪事の存在を疑う事がない程、大変に高く評価していた。確かに私達は高い評価の妨げになる悪口が彼らの耳に入らないように非常に慎重な態度を取った。彼らを何時も修道院に宿泊させる必要があると判断し、悪事を目にさせないように絶対に1人で行動させなかった。悪事を目にした場合も、彼らに邪悪の疑いが生じないように方便として嘘をついて彼らをごまかし、悪い事を良い事に塗り替えた。これは日本でキリスト教信者になった人々の妨害になる心配があったため、この使節にこのような配慮をする事になった。

この気遣い、特にわが主の助けのおかげで物事は無事進んだ。彼らは信じられない程の喜びや満足感を覚え、有り余るほど豊かで光彩をはなっているローマを目にした事だけでなく、スペインやイタリアの数多くの君公、グレゴリウス13世とシクストゥス5世から受けた好意、愛情、優しさはさぞ印象に残ったに違いない。特にグレゴリウス13世とシクストゥス5世という愛情や敬意に満ちたキリスト教の代表者から労わりや慈愛を恵まれたという事を、彼らは大きく評価した。

彼らは賢明で聡明な人々であるので、ローマやイタリアの各地で受けた歓迎や驚嘆に対する謝意を、日本に戻った際に異教徒にもキリスト教にも評価高く伝えるであろう。それによって聖なる神様は賛美され、ローマのシクストゥス5世も高く賞賛されるようになる。我らが望むように、もし

神様が彼らが無事に自国に戻されたなら、きっとそうなり、あの国民の為にもなると思う。」

次に、日本で見た日本人についてです。

1. 宣教師から見た日本人。「インドからの多様な特別の報告」(1958)の中にある「聖ザビエルの手紙から」。

「今まで発見した民族のなかで、われらが話を交わした人は一番良かった」

「異教徒の中にこれ以上良い人々は見つからない。概して丁寧に話し合い、善良で悪意を抱かない、名誉を最も高く評価する人々である。一般の人々は貧乏だが、貴族の中でもその他の階級の中でも貧困は恥辱にならない。」

「彼らは控え目で丁寧にお互い尊敬し合うが、大いに武器を当てにする。身分の高い人々も低い人も14歳から常に剣や短剣を差す。彼らは侮辱、軽蔑の言葉を受けても、下劣な人々と違って平気である。」

「食事は控え目にするが、お酒を飲む時はかなり度を超える。」

「日本人はとても親切で愛情が深く、知識を熱望している」、とあります。

次はジョアン・ロドリゲスの「日本教会の歴史」です。「日本人は白人だが、北の人々のように全く白くはない。顔立ちは良く、顔は少し丸く、中国広東より、内陸の中国人に良く似ている。二心、三心を持つという人もいるが、これは間違っている。一心とは口に出し表に示す心で、真の心ではなく偽りの心である。二心は自分の胸にあるもので、友達の為の心である。三心は自分の一番深い所にある、自分の為だけのもので、誰にも開かない心の事である。以上の3つから、その場のその事情に合わせて話したり行動したりする。中国人は商売で自分の利益を得る為に二心を使い慣れているが、日本人はこのような二心を契約や取り引きに使わないので、とても信頼出来る。もっとも、危険な出来事、特に戦に関わる事については慎重な態度を取る。例えば誰かを殺したい時や上手く追放させる為に、客を騙しながら見せ掛けの行為や陽気な風を装うが、急に首をはねる事がある。」

続いてアレッサンドロ・ヴァリニャーノ「日本

の事の概要」(1583年)です。「こちらの人々は皆白人でとても綺麗好きだ。庶民も労働者も宮廷で育てられたように見える位である。お互いに丁寧で信じられない程礼儀正しい。この事について、他の極東の民族のみならず、我らのヨーロッパの人々にも勝る。

大変有能で賢い民族だ。子供はとても頭が良く、我らの科学や学問を良く学び、容易くヨーロッパの子供よりも素早く我々の言葉の読み書きを身に付ける。我々の国みたいに卑しい人も無作法で無能ではなく、大抵皆親切で行儀が良い。

「世界でもっとも神経過敏で面目を大事にする人間だと思う。罵倒の言葉だけでなく、ただ怒った感じで言われた言葉にも堪えられない。従って一番低い労働者にさえも丁寧な言葉でしか話しかけられない。さもないと傷つけられる。そればかりか、彼らはその時にやっている仕事を儲けを全く考えないまま、怒って止めてしまうか、さらにひどい態度を取る場合もある。

「日本人は信じられない程忍耐強く、逆境を良く我慢する。大変有力な領主や大名が全ての財産や領土を失い貧困に悩むのがしばしば見られるが、何も失っていないかのように全く平気な態度を見せる。同じ様に、情熱に対してとても自制心があり、自分の中で強く感じてでも外に見せない。例えば、怒りを抑えながら、外には愉快的顔を見せる。」

次は宣教師でない人から見た日本人です。例えば商人ですね。フランチェスコ・カルレッティ、フィレンツェの商人で「私の世界一周の論拠」(1580年代)です。「概してこの国の人々は器用で大胆で、それから見せ掛けが上手で、しばしば冷酷に、色々な理由で、剣で十字架の形で身を切り自殺する。男の残酷さに劣らず、女も自分の子供に対して同じ事をやる。悩み事を取り除く為に、特に貧乏である場合、胎内にいる子供、又は生まれたばかりの子供も殺す。

多くは王様または主の命令に応じて自殺する。主人にそういう風に言われたら、女も同じ様な事をやる。主人はその気になったら、女を殺しても誰にもその理由を聞かれない。君主は家来に対し

て、武士は召使や奴隷に対して同じ権力を持っている。

女性はとても美しく、かなり白い。目が小さくて、彼らの間では大きい目より美しいと見なされている。歯はわざとインクのような塗料で黒く塗っていて、それで口が奇妙に見える。同じ事は特に身分の高い男も15、16歳になるとやる。女性には結婚の年齢になると同じ事をやる。髪は真っ黒く、金髪より美しいと思われている。我々は象牙のように白い歯と金の髪を好むのと真逆である。」

2. エンゲルベルト・ケンペル「日本の歴史とシャム王国の描写」(1690年～1692年)。

「まず、日本人は中国人と大いに違う事を明らかに証明出来る。その違いは、社会習慣、生活様式、食べ方、飲み方、寝方、着方、頭の剃り方、挨拶の仕方、座り方等にある。

第2に、両国人の性向も著しく違う。中国人は平和的で慎重深く、冷静で、思索的な生活を好むが、詐欺や高利貸しの傾向が強い。日本人は逆に、好戦的で、反乱や放蕩の傾向があり、疑り深く野心的で、いつも大規模な企画の考案に熱心だ。

「概して日本人の庶民は醜い外見をし、背は低く遅しく足が太い。黄褐色で鼻が平べったく、頬が厚い。しかし、昔ながらの貴族の子孫や帝国の皇子や君主は、外観や表情が幾分壮麗で、ヨーロッパ人に近い。

「日本の東の方の住民は頭が大きく顔の肉は厚い事で良く知られている。」

3. 以上の資料を使ってヨーロッパで流れた情報。

(1)「日本列島の描写と日本人の掟や習慣」(1585年)。

「概して日本人は好戦的で、面目をととても大事にする民族だ。名誉を神様にし、名誉を高く保つ為に、その国の君主は沢山の戦争を起こす事に熱烈である。古代ローマ人の栄光を真似し、名誉挽回の為に自分を殺した例が少なくない。親戚はお互いに尊敬しながら、愛し合っていて、友人たちには忠実である。皆、悪習慣、特に不倫と窃盗を

避ける。

「日本人は道徳を好む。一番好んで練習するのは武道である。階級が高いか低いかを問わず、皆14歳から剣を差し、受けた侮辱の報復の為に勇敢に剣を使う。それなのに、適当にされた批判は落ち着いて受ける。

「これに反して、彼らは誇り高い。自信があり過ぎるために、外国の国々を全く評価しない。ヨーロッパから来た人々を軽蔑し、卑劣と見なしている。米で出来たワインのような飲み物を遠慮なく沢山飲んで酔うが、質素な食べ方で生活している。」

(2) ジョヴァンニ・ピエトロ・マッフェイ「東インドの歴史」(1589年)。

「背が高く体が整っているのが自慢である。多くは寿命が長く、勢いが良く、徴兵年齢は60歳迄である。顎鬚は少なく、髪型は色々である。子供はクリップで額を剃り、庶民百姓は頭を半分位剃り、身分の高い人は頭をほとんど全部剃り、首筋にだけ髪の毛を少し残す。その髪の毛を人に触られる事を大変な侮辱とする。空腹、渇き、暑さ、寒さ、寝ずの番、疲労等を素晴らしく我慢出来る。

「大体においてこの国の人々は賢明で礼儀深い。知恵に恵まれている。知恵、従順さ、記憶力において、アジアの国々だけでなく西洋の国々にも勝るという事は、子供を見れば良く分かる。子供は礼儀正しい習慣と高い思考力を身に付けていて、粗野な態度を示さない。彼らは我らの子供よりも素早くラテン語や技術を習得する。貧困は恥辱でも不名誉でもない。貧困に曝された人は慎重に物を使い、貧乏なのに清潔で整然とした生活を送る。無礼、窃盗、けしからぬ無駄な誓い、賭博の類を憎み、名誉や栄光を熱望する。

(3) ジャン・アルベール・メンデルスロ「ベルシャからの東インドまでの有名で驚くべき航海」(1727年)。

「日本人はとても良い友人だ。何故なら、彼らは助けやの保護の為に約束を願う人がいれば必ず応じ、必ずその約束を守る。例えば自分の家族を被害に曝してでも、子供と女房が困窮していても、助けを求める人を命懸けで助ける。従って、告発して共犯者を拷問に掛けさせる犯罪者が見ら

れない。逆に、告発して共犯者を死なせるより、自分が拷問を受けて死ぬ例が多く見られる。

「日本人はどちらかというと、白いというより褐色である。強く逞しく、労働や季節の苦しみを非常によく我慢出来る民族である。空腹、渇き、暑さ、寒さに我慢強く、冬も夏も同じ服を着る。」

次は(4) フランソワ・カロン「17世紀半ば頃の日本とシャムの強大な王国の描写」です。

「日本人は訪ねて来る人に対して扱いが良く、丁寧だ。客に煙草や茶を出し、親しい友人の場合はワインも振る舞う。まず客を座らせ、漆のお椀を客の前に置いて、客が帰る前に椀の中身を味わわないと我慢出来ない。客を楽しませる為に歌を歌ったり友人が持っている弦楽器を弾いたり、色々な方法で歓迎して、客との会話を大事にする。」

以上のような多様な記録を見れば、西洋人の目から見た日本人の外観と性格のまとめが出来るでしょう。資料の種類によってかなり差があるので、なかなかまとまりにくいですが、まずイタリアでの天正使節の描写は大変評価が高いと言えるでしょう。もちろん僅か4人の身分の高い若者に限った事なので一般化は出来ませんが、その当時のイタリア人に深い印象を残したと思います。資料の種類を問わずほぼ統一している日本人についての判断は、次のようにまとめが出来ると思います。

A. 外観 ①人種は白人とほとんど変わりが無い。②背が低く、逞しい。③目が小さく、鼻が低く平べったい。④顎鬚が少なく、たいてい毛深くない。

B. 性格 ①聡明で機転が利き、習得が早い。②貧乏でも恥辱にならない。③名誉や面目を大事にする。④無礼が嫌いで、礼儀正しく、言葉遣いに敏感である。⑤窃盗、無駄な誓いを憎む。⑥食べ物に質素だが、酒を良く飲む。⑦好戦的で冷酷である。⑧見せ掛けが上手である。⑨苦しみや疲労に大変我慢強い。

これは16、17世紀の西洋人から見た日本人で、今の日本人とは大分違う所もあると思いますが、

参考になればと思います。以上です。

司会：今のお話に関して質問のある方がいれば1人か2人程どうぞ。

質問者：素晴らしい発表をありがとうございました。神奈川大学の国際文化交流学部のラットクリフです。当時のヨーロッパの目は日本人を人類学的にどう見ていたのかという点について、天正使節の事が書いてある資料の中で「この人達は白人です」とはっきりと言い切っている。これはどういう意味で白人と言っているのか、その点について教えて頂きたい。

Tollini：色んな資料を見ると、日本人は白人だと大体言っているんです。白人であるけれども西洋人とは少し顔色の様子が違う、と出てくる訳ですね。当時、どういう人種の分け方をしていたか分からないんですけれども、当時のヨーロッパの人達はアフリカや南アメリカ、アジアに渡って色々な人種に合っています。アジア人でも、日本人と中国人と東南アジアの人では随分違うと思うんですけど、その中で日本人は一応白人と見なされているんですね。当時の人も結構迷っていたんじゃないですか。

質問者：白人と言う事は必ずしも肌の色の問題だけではなくて、別な意味を持っているという印象でした。肌の色に多少違いはありながら、やはりこの人達は我々と同じ様な白人であると認めているという事には、宗教的な意味とか政治的にどう扱うかという問題に関わりそうだと思うのですが、いかがでしょうか。

Tollini：そうですね。どちらかと言えば白人と言っていたのは肌の色だけではなくて、多分そういう事もあったかもしれません。

文化レベルにも関わると思いますね。西洋人としては、日本の文化は自分の文化と大体同じレベルだと思っていました。中国文化に比べても、日本の文化はアジアの中で一番評価されていたのでしよう。もちろんアフリカ等の他の国々とは比較にならない位で、その点でも親しみを感じたのではないかな。もちろん随分違う文化だと認めているんですけれども、白人と同じレベルの文化を持つ民族だという事で、日本人は白人だと言ったので

はないでしょうか。

司会：午後3時からのパネルディスカッションでもご質問を受けたいと思います。Tollini 先生、ありがとうございました。それでは3分程休憩を入れて、10分から次の伊坂先生のお話に致します。

ケンペル『日本誌』の＜日本＞表象～精神文化を中心に～

伊坂青司

司会：資料にありますように、伊坂先生のご専門はドイツ哲学、ドイツ思想史と文化比較論で、代表的な業績も3つだけ挙げてあります。ケンペルはドイツの正しい発音では「ケンプファー」と言うそうで、この人の書いた本は『日本誌』として日本では知られています。ご存知のように、この本は日本についての貴重な情報源として諸外国で長く使われていました。シーボルトもペリーもこの本を読んで来たり、20世紀の英国女王エリザベス2世もこれを読んでいたと言われています。伊坂先生にはこの本を中心にご報告頂きますが、思想史がご専門ですので当時の思想状況とも関連付けながらお話頂けると思います。

伊坂：伊坂でございます。先程トッリーニ先生が16、17世紀のヨーロッパにおける日本表象のお話をされましたが、私はその後の17世紀末から18世紀のヨーロッパにおける日本のイメージ、表象について話をしたいと思います。

当時の日本は鎖国の時代で、日本の情報は海外にほとんど伝わらない時代であったと思われるんですけども、実はケンペルを通してかなり正確に情報が伝わっていたことが分かっています。鎖国というのは、これまでは否定的に見られてきたんですが、最近は江戸学の研究が進んで、江戸時代の文化が極めて豊かに発展していたことが分かっていますし、出島という狭い窓口を通じてではありますが、そうした日本のことがヨーロッパに情報として伝わっていました。

お手元のレジュメに従って報告していきます。ケンペルはドイツ人ですが、「ケンペル」という表記で一般的に通っています。ただし、ドイツ語

の発音では「ケンプファー」と言いまして、最近では現地の発音に対応する形で「ケンプファー」と表記するケースも出てきています。年代的には1651年誕生、1716年没ということで、日本では江戸時代です。実際、彼が日本に滞在したのは元禄3年から5年で、まさに天下泰平の世の時代でした。

彼が生前に出版した日本に関する書物は『廻国奇観』で、これはラテン語で書かれています。もう一つは通称『日本誌』と言われているもので、彼の死後、最初は英語版として出版され、その後オランダ語、フランス語、ドイツ語に訳され、ヨーロッパで広く読まれたケンペルの書物です。『日本誌』は、18世紀のヨーロッパに日本表象が形成されていく上で、非常に重要なテキストとなりました。先ほどのトッリーニ先生のご発表では、主に天正使節団や宣教師による日本イメージが強かったのですが、ケンペルの場合は博物学の素養がかなりあったものですから、出来るだけ客観的な記述をしようという傾向が強く、その記述によって日本の情報がかなり正確にヨーロッパに伝えられることになったわけです。

ケンペルはドイツのレムゴーという小さな村で生まれたんですが、非常に学問好きで、また冒険好きでした。若い頃からオランダや北ドイツのいくつかの都市を回り、勉強を重ねて行きます。例えばルーベックという港町では哲学や歴史学を学び、また、後にカントが教鞭をとることになるケーニヒスベルク大学では薬学を学びました。薬学は薬草の実用的な研究から始まって、それが植物学にも発展していき、博物学の重要な分野をなすことになります。日本でも江戸時代に本草学が

元になって、博物学として発展しました。博物学は当時はまだ黎明期でしたが、ケンペルはいち早く博物学を学んでいます。

16世紀から17世紀半ばの時期は、大航海時代でした。大航海時代のヨーロッパは、アフリカ、アメリカ大陸、インドから東アジアの方にまで世界が広がって、未知の世界に非常に関心が向いていた時代です。地球上の鉱物、植物、動物、人間の諸民族の多様性に関心が向いていきました。ヨーロッパが世界の中心であるわけではなく、世界は多様で色んな民族が色んな文化を作っているという認識が広がって、もっと世界のことを知りたいというのが、博物学の関心であったわけです。当時の博物学者は実際に色んな土地を探検していたので、「探検的博物学者」と名称が付けられるほどでした。これは西村三郎さんが『文明のなかの博物学』の中で当時の博物学者の性格を表した表現ですが、ケンペルも冒険的あるいは探検的博物学者の中に分類できると思います。彼自身の言葉に「好奇の病に突き動かされて日本にまで来るようになった」とあるように、彼は博物学的な関心と未知の世界への冒険心によって日本に来ることになったのだと思います。

ケンペルが日本に来た頃のヨーロッパの時代背景は、大航海時代からヨーロッパ列強が台頭してくる17世紀後半の時代。スペインとポルトガルが先陣を切って東方貿易に乗り出し、特にポルトガルは日本の種子島に鉄砲を伝えましたし、スペインは日本を東方貿易の中心にしていました。しかしその後、日本は1636年頃から鎖国に入ります。江戸幕藩体制下でキリスト教禁止令が発せられ、日本人の海外渡航が禁じられ、海外交易からスペインが排除されて、ヨーロッパとの交易はオランダ一国に限定されます。もちろん中国、朝鮮とは長崎の出島を通して貿易関係が続きましたが、出島でヨーロッパとして独占的に貿易をすることができたのは、オランダ東インド会社だけでした。

去年、私は出島跡に行きましたが、当時の姿の復元が進んでいます。かつての出島周辺は現在では埋め立てられ、出島跡は海から少し隔たった街の一角になってしまっているんですね。しかし、

出島の土塁跡を発掘して、残っている当時の図面を使って家屋の3分の1ほどが復元されてきています。大変興味深い復元作業です。

この出島に、ケンペルは1690年（元禄3年）に來日します。ペルシャからシャムを経て日本に來ますが、彼はドイツ人であるにも関わらず、出島のオランダ商館付きの医師として1692年まで2年間滞在します。その間、出島から自由に出ることはできず、ほとんど閉じ込められた状態でしたが、しかし1年に1回だけ、貿易を許可されている感謝を示すための江戸参府に、東インド会社のカピタン（商館長）に随行して行くことができました。長崎の出島から船で瀬戸内海に入り、海路で大坂に向かいます。瀬戸内海では、最近有名になった「鞆の浦」にも彼は寄港しています。私も昨年、鞆の浦に行きましたけれども、ケンペルも見た鞆の浦の風景は非常に美しいものでした。

さて、将軍に謁見するために、彼等は大名行列のようにして、大坂からは陸路で、東海道の宿場町に泊まりながら江戸まで行きます。長崎奉行の面々も一緒に行きますので、当然監視付きですね。恐らく長崎奉行の偉い人達は籠に乗っていたと思います。ケンペルは江戸参府の行列を絵に描いていますが、馬に乗っている15番がカピタンで、カピタンの後に続いている16番がケンペル自身です。

大名行列のような形で行く道中で、彼は色んな観察をし、街道筋で観察したことを日記のように書いています。特に印象深いのは、お伊勢参りに行く人々との出会いです。当時、伊勢神宮は一生に一度はお参りしたい所として、お伊勢参りが非常に大きなブームになっていました。そういう日本の宗教的なことにも彼は非常に関心を持ちますが、同時に日本の自然、地理や風土にも関心を持っています。日本の草花、植物、日本人の様々な生活に触れて、記録をしていくことになります。直接自分で見聞きし体験した事を大切にしましたが、それだけでは限界がありますので、同時に色んな文書類や日本人の通詞（通訳）を通して、日本の文化や宗教についても情報を得ています。ケンペルに付いた通詞は今村源右衛門英生といつて大変有能だったらしく、日本の文化をケンペル

に出来るだけ正確に伝えて、それをケンペルが記録してヨーロッパに伝えることになります。

ケンペルは植物などを精密に描く博物学の訓練を受けていましたから、そういう図像もかなりの数を残しています。博物学的手法で日本の地理、植物、動物、日本人の民族特性を詳細に記述していて、これがヨーロッパにおける日本表象を刷新することになるんですね。それまでは、もっぱら宣教師を通して日本の情報が伝わっていて、日本のことはある程度までは伝わっていましたが、ケンペルの博物学的手法による客観的な記述によって、さらに正確に伝わったのだと思います。

彼は1693年にオランダに戻って、ライデン大学で医学博士号を取ります。その後、故郷ドイツのレムゴーに帰って、東方旅行の記録を整理し、それを出版したのが『廻国奇観』（1712年）というラテン語の書物だったんですね。しかしラテン語ということもあり、また非常に高価だったこともあって、一般の人達が簡単に入手できるものではなかったんです。この書物は東方旅行全体の報告ですが、日本に関する記述もかなり含まれており、彼の死後に出版されることになる『日本誌』の日本についての基本的な見方が書かれています。特に鎖国について、「もっともな理由のある日本の鎖国」というタイトルの記述が含まれています。

この『廻国奇観』における日本に関する記述の特徴ですが、地球主義とも言える極めて広い観点が示されています。引用しますと、「我々人間は皆一つの太陽を仰ぎ、全て一つの地球に住み、同じ空気を呼吸している」とあります。それから、風土の違いによって諸民族は文化的に色々な特性を持つという風土論的な発想が示されています。「地球のいろいろな部分は、川や海や山により、さらにまた全く異なる気候風土（Climat）によって自然の境界線が画され、互いに隔離され、これによってそれぞれの地域に全く才能の異なる民族が住みつくように形造られている」。風土の違いにより民族文化も区別されるということで、これはケンペル独自の視点だと思いますが、ここには、日本の自然・文化・歴史を見る場合の風土論的な視点が既に示されていると言えます。

そしてこの本の最大の特徴ですが、鎖国における日本の現実を極めてよく捉えていて、当時のヨーロッパでは一般に否定的に見られていた鎖国について、肯定的な評価がなされているということです。「小さい世界に閉じ籠もり、隣接諸国と交流せず、世界のどの国からも煩わされずに安穩に生活し、極めて明るい自制と悦楽に明け暮れている」。まさに元禄の天下泰平の世を表しています。そして「その国の位置やその他の条件が、このような隔離を許す状態であり、この国の国民が非常に強力かつ勇敢で、この隔離状態を守り通せるならば、それはたしかに納得できる国家の行き方であろう」とし、鎖国は条件さえ整ってれば国家の一つの在り方であるという評価をしているわけです。

さらに日本の自然と文化、制度についての記述が続きます。地理的な自然特性としては、「極東の島国で、堅牢な天然の要塞で囲まれ、難攻不落の地の利を占めている」。自然風土については、「何処も気候は温和であり、土地は豊饒であるものの平野は少なく、岩礁地帯や山岳が多い」。彼は北海道や東北に行ってはいませんので、厳しい気候の地方というよりも、九州から江戸にかけて彼が実際に見た日本の自然や風土が記述されています。日本人の生活については、「勤勉さと節度ある生活」をおくり、「勤勉な農民は汗水垂らして貧地までも耕し」、「森林の植物を採取し、山菜をも採取してこれを上手に調理して食料に供する方法を心得ている」とあります。毒のある魚を上手く調理して食べているとも記述していますが、これはフグのことでしょう。

国内の産業交易ですが、「全世界を箱庭にしたような国で、国内各州の位置と土地柄の相違によって、各種各様の物資を産出し、各州各島の産物がいずれも日本国全体の間に無相通じて利用されないものはない」。これは各藩の地場産業が非常に振興されていて、各藩の間での交易がありましたので、そういったことが念頭にあるかと思われます。

また、日本国民の性格として、「冷静な勇気を失わず、我が手で自らの命を絶つ事を敢えて辞さない」と言われているのは、いわゆる割腹自殺、

腹切りです。そして「教育の第一義として、死を恐れず勇敢に振る舞う事を教える」と続きます。

日本の制度については、「最高地上神である天照大神の直系の子孫である天皇」と、「俗界の皇帝である将軍」の権力が並列しているとしています。京都には天皇の内裏、江戸には幕府将軍の居城があるということで、教権と政府権力が二重権力として並び立っていたんですが、これはヨーロッパにもあることだったので、特に奇異に映らなかったようです。

日本の刑罰については、「幕府の掟に背いた者は死刑を持って処罰され、情状酌量し減刑する余地が全然無い」と言われています。掟に背いた者には死罪を持って臨むということで、これは幕藩体制の厳しい面としてヨーロッパに強調して紹介され、これによって日本の負のイメージが出来ていくことになるわけです。

鎖国については、もともとはドイツ語の *verschliessen* が「門戸を閉ざす」という意味で使われ、これが後に「鎖国」という訳語で通用することになります。「この国は完全に門戸を閉ざし (*verschlossen*)、常にそして永久に国の門戸を閉ざして、すべての外国人を精選しなければならなかった。このことが、この国の統治形態にも風土にも適っていたということであり、国民の幸福と幕府の安全のためにも等しく必要だったということである」というように記述されています。『廻国奇観』の中の「もっともな理由のある鎖国」という部分が、後にラテン語からドイツ語に訳されて、『日本の歴史と記述』に掲載されることになります。

一般に『日本誌』と言われているケンペルの書物は、実はケンペルの生前には出版されなかったんです。彼は膨大な資料を整理して、原稿の束に“*Heutiges Japan*”というタイトルを付けて、日本に関する書物の出版準備をしていました。しかし彼は出版を果たすことなく、死んでしまいます。死後、その情報を聞きつけたイギリス王立協会会長スローン卿がこの原稿の束を含むケンペルの遺品を買い取り、イギリス王立協会図書館に寄贈しました。スローン卿は、有能な若い研究者にその原稿を英語に翻訳させ、“*History of Japan*”として

出版します。これが『日本誌』として最初の本だったんですね。最初、英訳本として出て、そこからオランダ語訳、フランス語訳、そしてドイツ語訳が出てヨーロッパ全体に広がっていくことになります。

実はこの“*Heutiges Japan*”の手書きの原稿の束を、ケンペルは生前にもう一つ作っていたんです。その原稿が後に発見されて、ドームというドイツの経済学者がその原稿を元にして、ドイツ語版を“*Geschichte und Beschreibung von Japan*” (『日本の歴史と記述』1777~79年) というタイトルで出版します。この中に『廻国奇観』の「もっともな理由のある日本の鎖国」をラテン語からドイツ語訳して付録として入れて、最後にドームの「編者あとがき」が付きまします。ドームはこの「あとがき」のなかで、彼は啓蒙主義的な学者だったので、鎖国に対して厳しい評価をしています。この批判的論評が、『日本の歴史と記述』の普及とともに、日本に対するイメージを作っていくことにもなります。

『日本の歴史と記述』の中の日本と日本人についての記述を見ていきたいと思います。日本の地理的特徴として「日本 (*Nipon*) の国は自然の要害によってこぢんまりと諸外国の侵略から守られており、生活必需品は何でも入手でき、外国の力を借りなくても完全に自給自足できる」とあり、完全な自給自足の経済システムが国内で成り立っているという評価をしています。

日本人の特徴として「全体として（とくに日本本島の一般人は）短躯強壯」、つまり背が低く、がっしりしていて強壯である。「肌色は褐色を帯び……目が細く小さい」と言われています。ヨーロッパの人から見ると、目が小さいというのは、日本人の特徴に見えるようですね。ケンペルは日本人に共通するこうした特徴を挙げると共に、日本の地方によっても特徴が違うということも見ているんですね。例えば、肥前と肥後の人では顔立ちが違うという所まで見えています。

日本の宗教については、神道、仏道、儒道、切支丹道という四つの中で、特に記述を大きく割いているのが、神道です。儒道、仏道、切支丹道は外来の宗教であり、神道こそが日本固有の宗教で

あるとして、彼は非常に興味を持ったようです。『古事記』の中にあるイザナギノミコトとイザナミノミコトによる国産みと天照大神らを産む話。ケンペルは「アマテルオオカミ」と呼んでいます。が、この天照大神からの天皇の継承によって日本は父権制度が継承されているとしています。彼は天照大神を男神であり、そこから父権制度が確立していると言っているんですが、最近の研究では天照大神は女神である事が定説となっています。誤解があったのかもしれませんが、当時はこの定説がまだ無かったのかもしれませんが。

また、民衆の伊勢神宮参詣、つまりお伊勢参りについてもケンペルは非常に関心を持っていて、実際に伊勢神宮の絵も描いているんですね。彼は実際に伊勢神宮に行ったことがありませんので、何かの絵を見て彼なりの解釈で描いたと思います。この絵は興味深くて、天照大神の社、つまり内宮の本殿とそれに付属する建築が描かれています。荷物を担いだ飛脚のような人達や、刀を差した武士、町民、神官と一緒に描かれていて、伊勢神宮が閉ざされた神域としてではなく、開かれた所として描かれています。それから、松島の瑞巖寺にある五大堂を絵に描いていますが、彼はその五大堂を神道の社として描いていて、神道の影響の中で理解していたようです。

ケンペルの神道理解は、『古事記』を素材にしています。日本は最初混沌とした状態で、ケンペルの解釈では、その混沌が「気」の力によってだんだん形を成していったとしているんですね。「気」とは、ご存知の通り中国の朱子学概念ですが、彼は朱子学的な理解ではなくて、日本神道を理解するキーワードとして考えています。ここで少し長くなりますが、引用します。「混沌に気(Ki)が加わった。気とは精気、蒸気、霊気のことである。混沌のなかにこの気が通ったことにより、天神七代が出現した。... この気というのは、宇宙の精気(Anima Universi)ないし世界靈魂(Weltgeist)とでも名付くべきもので、死せるものすべてにとって、さまざまに迂回し衝突して濁る水のように不純なままに停滞する純粋な魂(Seelen)も、そのまま普遍的な世界靈魂(Weltgeist)へと向かってゆく。自我存在や個人の人格

も、水が海に混じり合うように、この世界靈魂のうちで止むのである」。ここで言われている Anima Universi というのはラテン語で、新プラトン主義哲学の中でよく使われる言葉で、ケンペルにもそのような哲学的素養があったんだと思います。Anima Universi を Weltgeist という「世界靈魂」とほぼ同じ意味でドイツ語訳しているんですね。個人の自我や人格は、最終的には宇宙に満ちている霊気、靈魂の中に溶け込んでいく、海に交じり合うように宇宙に帰っていくという理解をしています。これは日本民族固有の宗教についての解釈で、個人が神と契約するという考え方のキリスト教とはかなり異質だと思うんですね。

その神道に関心を示しているケンペルの宗教意識はどんなものだったのでしょうか。実はケンペルは少年時代に、伯父が魔女狩に遭い、宗教裁判にかけられて殺されているんですね。これがショックで、ヨーロッパのキリスト教に対する懐疑が、小さい頃から芽生えたんじゃないか。彼の家もキリスト教徒ですから、やはり彼の中にもキリスト教のベースはあります。しかし彼の中には宗教的寛容の精神があって、キリスト教だけが宗教ではない、アジアにはアジア、日本には日本の宗教があってよいという宗教の多様性、民族的な固有性を認めている。

これは私の仮説ですがけれども、彼が Weltgeist という言葉を使っていたということは、当時のルネッサンス時代の新プラトン主義の影響があるのではないかと。新プラトン主義とは、当時のイタリアで広がった思想で、宇宙靈魂が流出して世界の中に広がるという流出説を考え方の中心としていて、例えばイタリア・ルネッサンスのフィチーノは、「宇宙精気」(スピリトゥス・ムンディ)が地上に流出して広がり、様々な現象を起こしているという見方をしています。ブルーノもキリスト教の異端者とされてヨーロッパ各地を転々としていたのですが、彼の考え方も「宇宙靈魂」(アニマ・ムンディ)がその根源的な生命力によって地上に流出して広がっていくとしています。こういうヨーロッパの新しい宗教的な流れを、ケンペルがどこで受容したかということはまだ立証できていませんが、どこかで彼がそうした流れに触れたと

いうことは十分考えられます。

さて、ケンペルの日本情報はヨーロッパでどのような日本表象を作り、どういう影響を及ぼしたのでしょうか。18世紀半ばのヨーロッパというのは、それまでの30年戦争などの荒廃から回復して、また近代的な科学技術がヨーロッパの学問や生活の中にだんだんと普及し始めていました。こうしてヨーロッパに理性と自由の原理を掲げる啓蒙主義の流れが作られていきます。そしてその頃の思想家が、啓蒙主義的な発想でもって日本をヨーロッパに紹介するわけです。

例えばモンテスキューの『法の精神』（1748年）には、日本の刑罰についての記述が出てきます。日本の皇帝（将軍）の専制主義によって死刑が簡単に行われる、というように紹介しているんですね。モンテスキューは、ケンペルの書物でその他の日本情報も読んでいるはずですが、とにかく日本の刑罰は自由主義に反するという書き方になっています。あるいはデイドロ等の『百科全書』も、東洋の後進性の中に日本を位置付けていて、近代ヨーロッパの理性が全ての基準になっていました。

そのような時代の流れの中で、ドームも『日本の歴史と記述』の「編者あとがき」の中で、啓蒙主義的な視点でもって「近代化の遅れた日本」というように批判しています。例えば「日本の法律」は、「非人間的な残酷さで成文化」されているというように、まさにモンテスキューの記述と重なっています。また日本は鎖国によって外国と断絶しているから日本人は不幸で、「日本人は幸福でない」から「簡単に死を観念して命を断つ」のであり、日本人が特に勇気があって自らの命を断つわけではないというわけです。アジアに関して自由が欠如しているということで、「アジアの歴史からはあまり大きなものは期待できない」とされています。こうして「鎖国は一大不幸である。開国することこそが日本人にとっても、外国人にとっても緊要なことである」というように結論づけています。

ドーム編の『日本の歴史と記述』には、ケンペルの客観的な日本記述と同時に、こうした鎖国批判の記述によって、啓蒙主義的な風潮の中で前近

代的で時代に遅れた日本という表象が作られることになります。そこには、ヨーロッパの当時の新興国、つまりオランダに代わって覇権を取ろうとしていたイギリスやフランス、そしてドイツ等の勢力が台頭してくるという歴史的背景があります。日本との交易をオランダだけに独り占めさせるなどということから、日本に対する開国要求が強くなってくるわけです。

一方でこれとは別に、ケンペルを評価しようとする流れも出てきます。その代表は、ドイツの哲学者でケーニヒスベルク大学で教鞭をとっていたカントです。彼はこの大学で1757年から1797年までの実に40年間にわたり「自然地理学」の講義をしています。カントと言えば『純粹理性批判』が代表的な著作とされていますが、彼自身は「自然地理学」講義を一番気に入っていたらしく、世界の博物学的な情報を織り込み、世界の諸民族について様々に論じる講義は、学生だけではなく市民にも非常に人気があり、講義室は満員だったようです。その講義の中でカントは、日本については主にケンペルの『日本誌』を使って話をしていました。当時は日本についての情報は限られてはいましたが、ケーニヒスベルクは港町で世界の情報が集まり、ヨーロッパ有数の学術都市でした。カントも日本についての博物学的な情報を集めていて、ケンペルの記述も大いに利用しています。カントの『永久平和のために』（1795年）という書物では、ケンペルの鎖国論に依拠して、国家が独立し自律的に発展するためには日本の鎖国もまた「賢明な措置」であると評価し、当時のヨーロッパの覇権主義に対しては批判的な立場をとっています。このカントの影響を受けたフィヒテも、『封鎖商業国家論』（1804年）を出版して、この中で条件付きながら国家の封鎖状態を承認しています。このように当時のドイツの哲学者の中でも、ケンペルの鎖国論に対する評価が高くて、日本の鎖国を容認する議論がヨーロッパの中にも一方ではあったんです。

鎖国を巡る議論は現在でも進行中ですが、鎖国下の日本は国内で経済や文化が自律的に発展していたことが分かってきています。また国際交流という点で見ても、出島という限られた窓

口ではありながら、オランダを通してヨーロッパの学問が蘭学という形で日本の中に取り込まれていました。逆に日本の芸術作品、特に陶器や漆器などが日本からヨーロッパに輸出されて、ヨーロッパ人に非常に好まれました。こういった日本から輸出された物が、ジャポニズムの流行する背景になっているだろうと思うんですね。

ケンペルは日本文化の基礎に日本の風土を見ているのですが、ヨーロッパの風土論ではヘルダーの『人類歴史哲学考』が源流として考えられてきました。ただヘルダーの前にもカントの「自然地理学」が自然風土を考察していますし、さらに遡れば、ケンペルも「風土」という概念を使いますので、やはりケンペルも風土論の源流に位置づけられると思います。日本では和辻哲郎の『風土』が有名で、和辻は『風土』の中でヘルダーの風土論に注目しています。近年この和辻の風土論が再評価されており、「風土」という概念は文化論を展開するうえでも、重要な概念の1つとなっています。

現在、アメリカを中心としたグローバリゼーションが問い直されつつあり、逆に地域文化の復権が進みつつあります。食文化についても、いつまでもマクドナルドじゃないだろうと、日本の各地方の食が見直されつつあります。こういう動向を見ても、ケンペルには時代を先取りする目があつたんじゃないかなと思います。以上です。

司会：ありがとうございました。時間が押しておりますので、ご質問は午後3時からのパネルディスカッションの際に受けたいと思います。今から昼休みに入りまして1時から再開の予定です。ご清聴ありがとうございました。

1921 年の皇太子裕仁のイタリア訪問—相互イメージ・表象

Rosa Caroli

司会：次のご発表はローザ・カーロリ先生にお願いします。資料は概要集の 2 枚目、3 ページ目です。カーロリ先生のご専門は大きく言えば日本の近代社会史になると思いますが、沖縄学についてもご専門です。当然多くの業績をお持ちですが、主な 3 点だけご紹介しています。1 つは日本の歴史、通史です。2 番目は沖縄の歴史で、いわば表象としての沖縄ですね。3 つ目は日本語でお書きになったもの。

先の昭和天皇がまだ皇太子だった時にヨーロッパを周遊された事がありました。期間は半年位だったと思いますが、船に乗っている時間が長いので実質的にはもっと短い。このヨーロッパ周遊について日本側の事情を書いた本があります。例えば皇太子の実地教育の為に実施したとか、当時の日英同盟の関係からでしょう、英国との関係についてはかなり詳しく書かれた本がありますが、イタリアで皇太子の訪問がどう報道されたかについては、おそらく皆さんも初めてお聴きになる話だと思います。ご清聴お願いします。

Caroli：ヴェネツィア大学東アジア学科の Rosa Caroli です。よろしくお願いします。

今日は 1921 年の皇太子裕仁のイタリア訪問についてお話しします。

1921 年（大正 10 年）3 月 3 日の朝早く、軍艦香取は旗艦鹿島に護送されて、ヨーロッパに向けて横浜港を出発しました。その船に特別な船客、皇太子裕仁殿下をお乗せしていたことは、天皇制下の日本の歴史上まったく新しい事件でした。実際、それ以前には、在位中の天皇にせよ、皇太子にせよ、この神聖なる地の国境を越えたことはか

つてなかったのです。日本では、最初の神話的な天皇の祖先から 123 代目に当たる、大正天皇まで、太陽の女神天照大神に起源を持つ「神祖が建国されて以来〔中略〕皇統一系の貴い位の盛んである事は、天地とともに有り終わりが無い」とされていました。この言は、最古の年代記に述べられた神道の神話とも完璧に一致する、伊藤博文の『憲法義解』にある言葉です。裕仁殿下ご自身は、間接的であるにしても、ドイツのランケ派の影響のもとに歴史を勉強して教養を積み、むしろ神話を歴史と同一視することにためらいを見せていたように思われるにせよ、これが天皇家についての解釈でした。従って、日本の皇位継承権を持つ皇太子がヨーロッパ五カ国、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、そしてイタリアを訪問したのは、異例の「行啓」という事になります。

しかし、その旅程は、日本国内の複雑な政治状況のため、早めのご帰国が予想され得るという事を考慮したせいとか、細部までは確定していませんでした。その上、皇太子の長い不在を予定することは、皇后と皇室の他のメンバーには受け入れ難いものでした。なぜなら、皇室に近い環境における権力闘争が静まりそうもないという気配を見せ、むしろ悪化しつつあった時に当たっていたからです。1920 年（大正 9 年）の夏以来、元老たちは、皇后に意見を変えるよう再三迫ったのですが、皇后の賛同を得るのに成功したのは、ようやく翌年の初めになってからの事でした。

このようにして、2 月 8 日の午後、宮内省長官によって、皇太子が約 6 ヶ月続くヨーロッパ旅行のため、3 月 3 日に横浜を船で出発することが公表されました。皇太子の旅のルートについては、

ただ、インド洋を渡り、4月末ごろイギリスに到着し、そこで到着後、その後の詳しい旅程が決定されるというに留められました。従姉弟の閑院宮載仁親王に伴われた裕仁殿下のおびたしい随員の中には宮内省御用係の珍田捨巳伯爵もいたはずでした。

簡潔な公式表によって、ジョージ5世のイギリスとの関係に優先権が認められたことは明らかでした。その上、当時はアメリカ訪問の可能性も議論されたのですが、結局は中止されたという事実もあります。事実、ヨーロッパは、ベルサイユで示されたように日本の外交にとって重要な外交相手であったが、日本に外交上の平等を認める同盟を推進する西欧の第一の強国はイギリスであって、それが特権的地位を占めていたのです。従って、公には否定されていた訪問の目的は、条約の更新に最も好都合な政治的条件を作り上げることでした。

そして、3月3日に裕仁殿下は横浜港に着いて、ヨーロッパに向けて船に乗りました。そこではお祭り騒ぎの市民の群れに歓迎されました。また、「聖なる国」の未来の天皇が「蛮人の地」でヨーロッパ民衆主義の有害な要素に接触し得るといふ危険を心配する、熱烈な超国家主義者たちのグループによっても歓迎されたのです。これほど明らかではないのですが、同じように強かったのは、見かけもどこか弱々しくまだ経験も浅い若き皇太子が、ヨーロッパの首都で待っている多くの骨の折れる公式の任務遂行中に、緊張や困惑を覚えるのではないかと恐れる人々の心配でした。

実際、裕仁殿下が、近き未来に日本の摂政として、つまり天皇として、国の内外を問わず、その素質を示さなければならない最初の真の機会でもあったのです。この企画の公の意図は、ようやく学校教育を終えたばかりの未来の天皇の教育を完成させ、海外の多くの国々における支配的な条件について個人的に認識させる機会を与えるというものでした。それは、日本の将来とその国際関係に大きな影響を与えたでしょうし、天皇家と他の国の君主や人民との友情の絆を強めるために有益だったでしょう。ヨーロッパ人にとっても、賓客である皇太子との個人的な接触を通じて、日本に

についての最高の知識を得る機会だったでしょう。

3月3日の「東京朝日新聞」は、ご出発のニュースを伝えながら、ヨーロッパの主な旅程として、イギリス以外にフランス、ベルギー、イタリア、そして「他の諸国」と列挙しています。従って、公式の旅程はまだ決定されず、日本の船がイギリス沿岸に着く前にも、旅行中に何度も検討し直されました。

皇太子訪欧は：

イギリス (5月6日)
フランス (5月30日)
ベルギー (6月10日)
オランダ (5月15日)
フランス (6月21日)
イタリア (7月11日)

イタリア訪問については、裕仁殿下が7月11日にナポリを公式訪問、そこから翌日 御用列車でローマに向けて発ち、イタリア王の賓客としてクイリナーレ宮に滞在することが、6月21日になってようやく確定されました。イタリア王室長官によって作成された裕仁殿下の滞在プログラムが決定されたのは7月1日でした。首都ローマ訪問は約7日間続き、そのうち最初の3日は公式のもので、その後日本に向けて乗船するためナポリに戻ることでなりました。

イタリア王国の権威ある人々との合意が決定してから、ローマ法王謁見のための日程を決めることも可能になりました。それは、1861年から1929年にかけてのイタリア王国とヴァティカン（或いはローマ教皇庁）の間におきた政治的な問題である「ローマ問題」のため、イタリア公式訪問の最後に初めて行うことができたのです。

こうして6月27日に、皇太子がフランスにいる間に、パリの大司教ルドヴィーコ・エルネスト・デュボワ（Ludovico Ernesto Dubois）がヴァティカンに書簡を書きました。その中で、珍田伯爵とイタリア駐在武官である山本信次郎少将が、皇太子の名において、7月15日か16日頃に謁見を予定するよう要請し、勝手に日付を指定するこ

とを詫び、ともあれイタリア滞在が短いのでそうせざるを得なかったと述べています。さらに、山本少将は、裕仁殿下到着の手筈を整え、国家の秘書官に謁見を申し込むために、できるだけ早くローマ入りしたと述べています。実は、バチカン訪問をねじ込んだのは、カトリックを信仰していた山本信次郎だと言われています。山本がいつヴァチカンに赴いたかは知られていませんが、日本側から示唆した日付は、実際に裕仁殿下がヴァチカンを訪れた日だったのです。

皇太子のイタリア到着に先だって、イタリア王国の各県庁は、「日本臣民」によるテロリストの攻撃を恐れて、ナポリとローマに向かう疑わしい人物を監視するという目的で警戒態勢にありました。「危険さきわまりない」と定義され、偽の中国人パスポートを持った何人かの韓国人アジテーターが皇太子に対して犯罪を犯す意図を持っているように思われたので、特に、日本人、中国人、韓国人に注意が払われました。イタリア当局によって準備された査定以外に、日本大使館は日本の警察官を一人派遣し、彼はナポリの警察署長のもとに出頭し、所長はこの警察官に「適宜な配慮」を与えるようにという指令を受け取りました。日本の外交団側によって要求された調査と並行して、軍隊の隊員と公安警察の奉仕の手筈が整えられました。

『皇太子殿下御外遊記』を記録した二荒芳徳と澤田節蔵によると、ようやく、7月11日月曜日の朝、香取と鹿島がナポリ港に入港しました。この二隻を護衛するために、イタリアの二隻の駆逐艦が出ました。造船所に停泊し、イタリア海軍に歓迎され、落合謙太郎大使が「セミゴッドの乗客」を乗せた船に乗船しました。王の副官であって、イタリアにおける公式訪問の間中、皇太子に随伴したガイド・ビスカレッティ・ディ・ルッフィア（Guido Biscaretti di Ruffia）提督がそれに続きました。提督は、王国の民間および軍事当局の代表者たちによって構成されたイタリア代表団を率い、日本の皇太子に当時のイタリア王ヴァットリオ・エマヌエーレ三世（Vittorio Emanuele III）の挨拶を伝えました。

若きスポレート公で、王の甥であるアイモー

ネ・ディ・サヴォイアの訪問は、午後、皇太子がカプリへ行った後、カポディモンテ宮殿でエレナ・ダオスタ公爵夫人の許に赴いたのです。船上で一夜を過ごしたのち、皇太子は次の日閑院宮や他の臣下の人々と共に香取を去り、造船所に赴き、御用列車に席を占めました。日本軍の砲兵将官の制服につけた多くの勲章の中で、1916年皇太子即位の機会にヴァットリオ・エマヌエーレ三世から叙勲されたサンツィッシマ・アヌンツィアータ章が際立っていました。ナポリ中央駅に、市民や軍人の密集した人々の他に、落合大使やビスカレッティ・ディ・ルッフィア提督の歓迎を受けました。駅に少しとどまってから、御用列車は名誉の先導列車の後から首都ローマに向かいしました。

日本の未来の天皇をローマで迎えた歓迎のさまは非常におごそかなもので、正にロンドンやパリで受けた立派な歓迎ぶりと同じような印象を皇太子に与えたでしょうが、それについての皇太子の感想は知られていません。

テルミニ駅の周りには群衆がますます集まりつつあり、そこに上院議長トンマーゾ・ティットーニや多くの国会議員とともに、新首相イヴァノエ・ボノーミ、外務大臣ピエトロ・トマージ・デッラ・トッレッタおよび他の行政官たち、さらにローマ知事リッカルド・ゾッコレッティ、そしてアルマンド・ディアス將軍ほか、政治家、外交官、軍人たちが到着しました。国王ヴァットリオ・エマヌエーレ三世の従兄弟であるアオスタ公爵エマヌエーレ・フィリベルトや王室高官たちと共に到着しました。その中には、王の副官アルトゥーロ・チッタディーニ將軍、王宮長官ジョヴァンニ・パッティスタ・ボレア・ドルモ公爵、王室顧問官アレッサンドロ・マッティオーリ・バスクアリーニ伯爵が見られました。

裕仁殿下は日本国歌が演奏される中を駅に入った御用列車から降り、ヴァットリオ・エマヌエーレ三世と敬礼を交わし、公式の紹介のため、駅の貴賓室に赴かれました。その直後、二人は先頭の御用馬車に乗り、長い行列に伴われて、テルミニ広場を後にし、エゼドラ広場（現在の Repubblica

広場)に向かいました。そこでは、古代ローマ以来の習わしで、ローマ市に入った外国人王族の人に限られる慣習に従って、市長ジャンネット・ヴァッリと市の評議員や参事官たちが皇太子に市民からの歓迎を伝えるために待っていました。行列は、そこに少し留まってから、ナツィオナーレ通りに入り、混んだ行程を整備し、「ほぼ20色の様々な色」の制服を着た軍隊の配列する中を通過して、皇太子がローマ滞在中王によってもてなされるクイリナーレ宮殿に到着しました。公式の短い談話を終えてから、王と皇太子は、王宮前の広場を埋めたおびただしい数の人々に挨拶するためバルコニーに姿を現しました。

最初の公式任務の中には、パンテオンにあるヴァットリオ・エマヌエーレ二世とウンベルト一世の墓訪問があり、皇太子は二人の墓の上に二つの花輪を捧げました。そして、もう一つの花輪は、無名戦士の墓、つまり「祖国の祭壇」に捧げました。

その午後、ピンチョの丘、ボルゲーゼ公園、動物園を散策されたのです。そして夕方は、イタリア王がクイリナーレ宮殿で裕仁殿下とその臣下の名誉のために正餐で持て成し、イタリア国家と貴族の最も権威ある人々とローマにおける日本外交団の代表者たちが参加しました。

皇太子はヨーロッパ旅行中、オランダ以外、日本も加わった第一次世界大戦の連合国の国々を訪問しましたが、イタリアはヨーロッパ旅行の最後の旅程でした。イタリア訪問の前に、皇太子がイギリスの艦隊や造船所を賞賛し、フランスの大砲や飛行機を評価し、或いはベルギーで戦われた血なまぐさい戦いの追悼に赴く機会があったとすると、イタリアでの滞在中に、殿下の注目に値したのは古代の有名なモニュメントでした。イタリアで行われた戦いの場についての映像は、前線で戦闘中に撮影され映画で、7月16日の夕べ、クイリナーレ宮殿の非公式の食事の後で映写されました。やや軍事的な味わいのある唯一の機会は、7月13日の朝シエーナ広場で行われたもので、その時皇太子は、王に伴われ、軍事トーナメントに列席されました。

従って、イタリアにおける公式滞在は、永遠の

都ローマの考古学・美術上のルートに沿って進められました。7月13日に皇太子は、パラッツォ・デッレ・エスポジツィオーニで開催中のローマ・ビエンナーレ展、ボルゲーゼ美術館、ヴァッレ・ジュリアにある国立近代美術館に赴かれました。その日の夜は、王とダオスタ公爵の名誉のために準備された日本大使館での正餐で終わりました。翌日、皇太子はコロッセオ、パラティーノ、フォーロ・ロマーノ、サン・カッリストのカタコンベ、カラカッラ帝の浴場を訪問されました。そして、午後は、カンビドッリョで皇太子に敬意を表して準備された祝賀会で、コンセルヴァトーリ美術館の素晴らしい部屋と美術品、世界で最も古い公の古代コレクションがあるカピトリニ美術館と絵画館を訪れることができました。その夜、落合大使も参加した王宮での夕食が終わってから、国王は皇太子にいとまを告げました。

法王謁見は翌日に決定されていましたが、クイリナーレ宮殿に王の賓客としてあり、また、自分に当てられた使命を果たし続けながら、その後の皇太子のローマ滞在は非公式のものとして進められたのです。皇太子は、法王ベネディクトゥス15世のもとに赴く前に、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂、ラテランのサン・ジョヴァンニ聖堂、城壁外のサン・パオロ聖堂を訪れました。これらは、ヴァチカンのサン・ピエトロ大聖堂と共に、ローマの四つの総大司教の聖堂をなしています。

その日の午後、皇太子は、クイリナーレ宮殿に王の賓客として滞在しているにもかかわらず、日本大使館から、ヴァチカンに向かいました。これはさっき申しましたように、イタリア王国とヴァチカンの間におきた政治的な「ローマ問題」があって、皇太子が直接クイリナーレ宮殿からヴァチカンへ行くのは適切なことではなかったからです。皇太子の欧州訪問に随行して『皇太子殿下御外遊記』を記録した二荒芳徳と澤田節蔵によると、裕仁殿下は、イタリア王国とヴァチカンの間の友好的ではない関係を考えて、イタリア王国のメダルをつけたりイタリア王室の車で行ったりするのを控えたのです。

そして、皇太子は、多くの警官や護衛兵によって守られたコースを通して、ヴァティカンのアルコ・デッレ・カンパーネを通り、サン・ダマソの中庭に至り、そこで法王庁当局の代表者たちと近衛兵の分遣隊が敬礼を行いました。そこから、スイス衛兵に護衛された三番目のロτζィアにある法王の住まいに上がり、そこで法王から「君主の名誉ある、荘厳な謁見」を賜り、父天皇からの挨拶を伝えました。「鄭重な談話」の最後に、法王から、一つはサン・ピエトロ大聖堂を、もう一つはローマの田園風景を表す二つのモザイク作品を贈り物として受け取りました。

その後、皇太子は、ヴァティカン國務所の許にガスパツリ枢機卿を訪れ、彼自身が特に要請していたように、ヴァティカン駐在の外交団の様々なメンバーに紹介されました。それから、一団の神学を学ぶ日本人学生と会い、彼らは、皇太子のサン・ピエトロ大聖堂とサクラ・グロッタの見学に随伴したものとおもわれます。荘重な会見の機会に、勲章の交換が行われました。

法王庁の様々な高官たちには、日本の等級章が授けられ、ヴァティカンからも同様に、ヴァティカン皇太子随員のメンバーに15の勲章が授けられました。その後、大使館に戻った裕仁殿下はガスパツリ枢機卿の訪問を受け、枢機卿は皇太子に法王からの感謝の言葉を伝えました。

翌日、皇太子は、ヴァティカンの美術館や画廊の最も価値ある作品のいくつかを賞賛するため、改めてヴァティカンに赴かれました。その中には、システリーナ礼拝堂、ボルジア家の住居、絵画の間、ラファエッロの部屋があり、各部門の責任ある管理者たちに案内され、とりわけ最初の東京駐在ローマ法王使節であるフマゾーニ＝ピオンディ閣下に伴われました。

ローマ市の素晴らしい眺めが楽しめるサン・ピエトロ大聖堂の円屋根に上がられた皇太子は、螺旋状の石段の壁に他の君主や公使たちによる訪問を記念する多くの銘文と並んで、自分の名と閑院宮の名が彫り込まれているのをご覧になりました。

ローマ滞在最後の日は、皇太子は、ローマを訪れていたチェコスロヴァキアの新生共和国大統領

トマーシュ・マサリク (Tomas Garrigue Masaryk) と会う機会がありました。大統領は、日本の未来の天皇に拝謁できるよう日本大使館に申請書を提出していたのです。

7月17日の朝、裕仁殿下は、テルミニ駅からナポリに向けて発ち、ナポリ駅で、スボレート公爵、市長、そして他の軍事および民間の権威ある人々に迎えられました。午後は、市立水族館を見学され、ナポリ湾の優れた景色が見えるポシッリポを車で回られました。翌日、ポンペイの遺跡を訪れてから、皇太子はイタリア当局の人々と別れの挨拶を交わし、祖国に向かってナポリ港から出発されました。ご出発前に、ヴァティカンと電報のやりとりがありましたが、皇太子からはベネディクトゥス15世から受けた鄭重な謁見に対する公式の感謝の言葉であり、それに続いて、ガスパツリ枢機卿からの返信は、法王の名においてご訪問に満足の意を表され、今回の訪問客、皇族、そして日本全国民に対して祝賀の意を表すものでした。

皇太子は9月3日に横浜に戻って、横浜からお召し列車で東京に向かいました。東京駅までの沿線は人々であふれ、万歳の声が絶えることが無かったのです。

結局、イタリアはヨーロッパ旅行の最後の行程でした。その主要な目的は、将来の天皇の素質を試みることはもとより、第一次大戦で勝利する結果になった日本の国際的地位を強化すること、自らの軍事力を確認することでした。これは、皇太子とその随行者たちの旅行に軍艦を選んだことが示しているように思われます。それから、西洋諸国との友好の絆と相互理解を強化することでした。

彼らがイタリア王国やヴァティカンから受けた公式の名誉、ナポリやローマ滞在中に伴った市民の注目、そして、この出来事がイタリアの主要な日刊紙上に占めたスペースはこの訪問の重要性を示しています。いくつかの新聞は、この機会に、1585年に法王庁に送られた最初の日本使節団の時代以来の両国の関係史を回想したりもしています。これらは、皇太子の旅の秘めた宣伝目的をも満足させるものでした。事実、皇太子に捧げられた盛大な歓迎と未来の天皇としての完璧なパー

フォーマンズの反響は、かつてない企画の成功を強調する新聞によって、詳細に伝えられ、ヨーロッパから日本の読者に達しました。ヨーロッパ旅行の公式の報告書を書いた二荒芳徳と澤田節蔵は、皇太子が旅行中、カトリック教会の首長の他に、八国もの首長に会ったことを強調するのを忘れませんでした。

丁度六ヶ月かかった旅行は9月3日に終わり、香取、鹿島の両船は横浜に帰港しました。その二ヵ月後の11月4日、内閣総理大臣であった原敬が暗殺されました。そして、原敬の暗殺から数日経って、裕仁殿下は大正天皇の摂政として即位しました。結局、ヨーロッパ旅行と即位は、1919年1921年を含む、短いとはいえ複雑な時期に終わりを告げ、歴史的には、政府と元老の間の権力の均衡に決定的な転換をもたらした時期と見なされています。それは、皇室顧問に任命された西園寺公望の勢力の増大と、翌年2月に亡くなった山県有朋に結びついた派閥の失墜でした。実は日本の君主制の性質と外部世界との関係についての意見は様々でした。従って、西園寺の勢力の増大は、一時的にせよ、国際主義者の外交の勝利であると言えますが、それは1931年まで何度も外務大臣になった幣原喜重郎によって具体化され、次の10年間の初めまでは立憲君主制の支持者が勝利をおさめていました。この立憲君主制が、明治憲法の限られた解釈におけるものであったにせよ、です。

実際、日本の政治的、軍事的選択が来るべき年に劇的に運命を印し、イタリアとの再会が果たされます。しかしそれは、かつて1921年に、「両国は平和を得るために協力する」であろうと自信を持って言われた時に、裕仁殿下によって表現されたものとは全く異なる基盤の上で行われたのであります。以上です。

司会：ありがとうございました。ご質問があればパネルディスカッションの際に伺います。5分ほど休憩して次の日高先生の話に移りたいと思います。

越境する表象—近代日本とイタリア

日高昭二

司会：概要集の2枚目をご覧頂きますと、日高先生のご専門は近代日本文学とあります。もちろん小説も扱われますが、映画、演劇にも詳しい方です。代表的な研究業績は100以上あるはずですが、そこから3点だけ書き出してあります。

今日はイタリアに関係するお話でして、主に3つの話題を取り上げて下さるそうです。第1は小説で、有島生馬の『蝙蝠の如く』という小説。この人は東京外語のイタリア語科を出て画家になったという珍しい人です。

第2の話題は映画です。私の世代は1950年代から60年代のイタリア映画を良く見たのですが、それ以前にも影響があったという話です。

第3にダヌンツィオの芝居を取り上げられるそうですが、確か『カリギュラ』という映画の脚本もダヌンツィオではなかったかと思います。大変興味深いお話しになると思います。ご静聴よろしくお願いします。

日高：前のお三方のご発表は、このシンポジウムの本来の趣旨である「ヨーロッパにおける〈日本〉の表象」というテーマにかかわるものでしたが、私はそれとは逆に「日本におけるヨーロッパ」ということになります。せっかくイタリアの方がお見えですので、この際は近代日本とイタリアの関係について何か話ができないかと考えたのです。と言いましても、私は、イタリアについては知らないことだらけですけど、まあ知らないことは知る人に聞けば良いという精神で、分からないことはヴェネツィア大学のお二人からお聞きすることにして、あえてイタリアと日本のお話を

することにしました。

さて、「近代日本とイタリア」というテーマですが、司会の鳥越先生からご紹介のあったように、私がこれから話す内容は三つあります。第一は有島生馬（のち生馬）の小説「蝙蝠の如く」をめぐる、第二はイタリア映画の日本に与えた衝撃について、第三はダヌンツィオの戯曲「春曙夢」の小山内薫による翻案についてです。

I 有島生馬「蝙蝠の如く」をめぐる

この小説は、題名でも知られるように、蝙蝠のようにどこからともなく飛び出してきて、どこへともなく飛び去る数奇な一人の男の物語です。雑誌『白樺』の1911年（明治44）1月から翌年12月まで連載され、1913年（大正2）に第一創作集『蝙蝠の如く』として洛陽堂から刊行されています。いうまでもなく『白樺』は志賀直哉や有島武郎や武者小路実篤らに代表される文学雑誌です。その有島武郎の弟が生馬で、彼は絵の勉強でナポリに滞在していて、のち兄の武郎がアメリカから出向いて落ち合ってもいます。この「蝙蝠の如く」は、やがて主人公のモデルになった男（増井清次郎とされている）が日本にやってきますが、そのことを題材にした短編を「日本篇」とし、前者をあらためて「伊太利篇」と言い換えて『蝙蝠の如く』（1942年4月、愛宕書房）として再刊されます。なお、日本にきたモデルについては、武郎・生馬の弟である里見淳が「T・B・V」（『文藝春秋』1937・5）という短編に書いてもいます。

ここで、小説のあらすじを言っておきましょう。主人公は虎ヶ谷熊吉といい、少年のときに角兵衛獅子の親方に身売りされ、門司港から船に乗

せられてアメリカに連れて行かれます。いわば世界を越境する芸人ということになりますが、そうした存在は明治の初頭から知られていて、アメリカでは遊園地などで曲芸を見せたりしていました。熊吉もまたそうした一人で、サーカスで働いたり、犬芸一座に雇われたりしたのち、ブラジルのリオデジャネイロでイタリアの曲馬団に加わり、それが縁でスペインを経てイタリアにまで渡ることになったのです。

そのイタリアのローマにいた頃、酷い虐待を受けているところを、ある公爵夫人に拾われます。そして、彼女の援助でイタリア語をはじめ、文学や絵画を学び、いざ学校に進学するとき本人の戸籍が必要になって、日本の大使館を通じて調べてもらったところ、彼の出生地が神戸で名前も岩井良次であったことが判明します。そうして、現在は画家になっている彼が、「私」と出会って写生旅行に出掛けるところからこの小説は始まっています。ローマの中央駅からフラスカーチ駅に行き、そこから馬車でロッカ・ヂ・バーバという有名な避暑地に着きますが、日本人が来たと噂になります。村人は、この二人の日本人を見て「何んて醜い」と言ったりするのですが、なかで一人だけ「夫人なでもない（ノンネ・タント）」と言う女性が現れる。それで彼らは少し救われ、以後「ノンネ・タント」と呼ばれることになります。それというのも、岩井良次がイタリア語を話せることが分かったからで、それによって彼らは、「なんて醜い」日本人から「夫人なでもない」日本人へと印象が変わったのです。

その村へ、良次の絵の先生がローマから訪ねてきて、「私」と絵画の論争をします。絵画の中心は何と言ってもイタリア・ルネッサンスに尽きると主張する先生と、しかし時代はすでにフランス印象派に移っているという「私」の論争です。イタリア絵画の市場はまだ衰えてはいない、その証拠にアメリカの教会から宗教画の注文をたくさん受けていると言い、1900年のパリ万博でフランスの印象派を見たけれども、それはとんでもない芸術だったと先生はなおも主張します。印象派と言えば、日本では雑誌『白樺』がゴッホやセザンヌの紹介につとめていたことは周知のことですが、

むろん有島生馬も、いち早くセザンヌを紹介していたばかりか、『セザンヌ』（アルス）という本も書いています。ここでちょっと絵画の市場という問題を一瞥しておく、それまでの絵画の多くは教会が買ったわけですが、フランス印象派の絵はブルジョアが買うようになる、それが大きな転換期を成していると言われます（フィリップ・フック『印象派はこうして世界を征服した』）。だから、岩井良次に公爵夫人というパトロンがいることも、そのことと深く関わっているわけです。

先生と入れ替わりに、今度は平田という友人が日本から訪ねてきます。ジェノバから南米に行く途中だという彼が、興奮した口調で語るのは、日本のメディアが報道しているという日露戦争の過熱ぶりです。これまで40日間も日本語を喋る機会がなかったという彼は、日露戦争に勝利した日本について得意気に語るが、良次にはそうして語られる日本語が分からない。このとき平田が語ったのは新聞報道が示した文語調の日本語、つまり「天気晴朗ナレドモ波高シ」とか「皇国ノ興廢コノ一戦ニ在リ」とかいう言葉だからです。良次は、そこではじめて「日本人」としてのアイデンティティに直面することになります。

この小説には、そうして世界を遍歴する一人の男を通じて、この時期の「日本」へのパースペクティブが示されています。世界を地理的に「移動」する物語であると同時に、曲芸から芸術へ、イタリア・ルネッサンスから印象派へというように、文化の「越境」を目の当たりにした男の遍歴譚が、「私」を聴き手にして物語られています。遍歴譚は、長い時間と広い空間にまたがっていますが、聴き手の「私」が「いま・ここ」でそれを聴いているというかたちによって、小説の統一感がもたらされています。そもそも、近代において小説というジャンルが隆盛になったことについては、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』が示していたように、小説というジャンルとネイションの類似性という要件があったわけですが、「蝙蝠の如く」という小説は、そうした面においてもじつに興味深いテキストなのです。

ちなみに、創作集『蝙蝠の如く』には「ゴンドラの一夜」という短編小説が1篇収録されていま

す。ヴェネツィアを舞台にした神秘的な物語ですが、『美術新報』の1912年（大正1）8月の「ヴェニス号」に掲載されたものです。平川祐弘氏の『芸術にあらわれたベネチア』（内田老鶴圃）でも挙げられていない文献です。このなかには、高村光太郎の詩「ヴェネツィアの旅人」や、また日本の画家が描いたヴェネツィアの絵も数点あり、カルパッチョの有名な絵「聖女ウルスラの夢」などとともに載っています。

『美術新報』がこのような大々的にヴェネツィア特集を組むというのは、明治期の日本の美術界が、イタリア美術を中心としていたからです。たとえば、日本で第1回の西洋画展覧会が開かれたのは、1889年（明治22）10月19日の上野公園においてですが、その際に出品された国別の絵画数を調べた記事があります。イタリアが34点、フランスが24点、オランダが9点、イギリスが7点、ドイツが4点です。圧倒的にイタリアの作品数が多いことに気づきます。この時代の代表的な美術論である白馬会絵画研究所編『美術講話』（1901）には、イタリア・ルネッサンス論が3編入っていますし、東京美術学校における美術史の講義もイタリア美術が中心であったことは、多くの回想記が伝えているところです。つまり、有島生馬の「蝙蝠の如く」は、そうしたことを含めて、いわば文学と美術をつなぐ文化の「越境」をもよく表象していることになるのです。

II イタリア映画の衝撃

第二の話題は、イタリア映画の日本への衝撃についてです。イタリア映画というと、戦後のネオ・リアリズムを思い浮かべる人が多いと思いますが、明治末期から大正にかけての映画といえばイタリア映画であったことは、余り知られていないかもしれません。それについて語る前に、ぜひ触れておかなければならないことは、「世界文学」の「映像化」という問題です。どういうことかといいますと、日本でもよく知られた「世界文学」の名作を「映画」で観ることが出来る時代がやって来たということなのです。その橋渡しをしたのが「文芸活動写真会」による上映会で、第1回は1912（大正1）年3月10日、丸の内の有楽座で開

かれています。発起人は、馬場孤蝶、生田長江、小山内薫の3人で、彼らがまず「世界文学」の話をしたあとに映画を観るというかたちで、ユーゴー「九十年」、ダヌンチオ「秋夕夢」、ワイルド「サロメ」、フローベル「聖アントニーの誘惑」などが上映されています。次いで、横浜の喜楽座、神田三崎町の東京座でも開かれ、そこではトルストイ「高架索の俘虜」、フローベル「サランボー」、ダヌンチオ「犠牲」などが上映されています。また小山内薫の肝入りになる「泰西名作活動写真会」も、同じ年の7月1日に有楽座で開かれていて、シェイクスピア「オセロ」、トルストイ「アンナ・カレーニナ」などが上映されています。そしてその多くが、イタリア映画であったわけです。

1913年（大正2）にも、イタリア映画が多く輸入されています。題名だけあげておきますが、「セビリアの理髪師」、「フィガロの結婚」、「婢婦馴らし」などです。また1914年（大正3）では、「ポンペイ最後の日」、「アントニーとクレオパトラ」、「生ける屍」などがあり、さらに1915年（大正5）では、「ジャンヌ・ダルク」、「椿姫」へとつづきます。

「文芸映画」というジャンルが誕生したのは、承知のように、1908年（明治41）のフランスの「フィルム・ダール」という運動からですが、この名前からすると「芸術映画」という言い方のほうが正しいかもしれませんが、要は文学者がはじめて映画界に参入した運動であったということです。

日本の新劇運動は、小山内薫、市川左団次の「自由劇場」によって始まったといわれますが、それにならってこの「文芸活動写真会」は、当時「活動写真の自由劇場」とであると評されてもいました。したがって、この「文芸活動写真会」は、映画史の問題であると同時に、新劇史、演劇史の問題でもあるわけです。この時期、演劇と映画の関係はそれほど密接でして、すでに山本喜久男氏の『日本映画における外国映画の影響—比較映画史研究—』（早稲田大学出版部）が伝えていたところですが、ここではイタリア映画との関係に即して、その一部を資料として示してみました。いず

れも1914年（大正3）前後のことになりますが、芸術座の「復活」と日活新派映画の「カチューシャ」をはじめとして、アメリカ映画の「サロメ」と帝国劇場における英国アラン・ウィルキー一座の「サロメ」と芸術座の「サロメ」もそうです。なかでも芸術座の「サロメ」は、さきの「復活」に次いで人気の演目となり、同じく松井須磨子によって以後127回の公演をしたという記録を成した舞台です。それとオスカー・ワイルドの「サロメ」を映画化した日活新派の映画「狂美人」とイタリア映画「サロメ」へとつづきます。まさしく、「サロメ」の饗宴と言っていいいでしょう。さらに、イタリア映画でトルストイの「生ける屍」が輸入されますが、これはやがて芸術座における「生ける屍」の舞台になり、日活新派映画の「生ける屍」になります。このイタリア映画の「生ける屍」では、旅芸人が峠を越える時に主演のマリア・ヤコビーニが歌った歌が評判になりましたが、映画や劇の中で歌を歌うというこのスタイルについては、日本でも「カチューシャ」や「ゴンドラの唄」などが大衆の人気をさらったことでもよく知られています。それから、フランス映画とイタリア映画の2つの「椿姫」と日活新派映画の「椿姫」、ドイツ映画でヴィクトル・ブリュットゲン原作の「憲兵モービウス」と、新派劇「太尉の娘」と新派映画「太尉の娘」の関係など、輸入映画が与えた演劇への影響はつづいています。

今でこそ、文学と演劇と映画のメディア・ミックス現象は珍しくありませんが、それがすでにこの時代に盛んに行われていたのです。こうした文化現象を一つひとつ研究するだけでも、いくつか論文が書けてしまう程ですから、今日おいでの学生さんも興味があったら考えてみてください。

いわゆる世界の名作が、文学として、また映画として入ってくる。このようにいうと、当時の日本がだいたい「世界」に開かれていたようにみえるかもしれませんが、それについて少し考えておくことがあります。いいかえれば、それは「世界文学というイデオロギー」ということになるのですが、ここで日本が文学や映画を通して「世界」の文化とつながろうとした、その背景に何があるのかといいますと、じつは大逆事件なのです。大逆

事件というのは1910年（明治43）に起こった天皇暗殺未遂事件で、社会主義者が大量に検挙されたわけですが、翌年1月には幸徳秋水ら12名が死刑に処せられたという事件です。この事件に対しては、世界中から様々な抗議が寄せられました。事件は未遂であり、そのうえ公平な裁判も行われなかったことへの抗議が殺到したのですが、それを押し切って死刑が行われた。現在では、この事件はでっち上げであったということが分かっていますが、こうした世界を挙げての抗議に対して政府は1911年（明治44）5月、つまり処刑の4ヶ月後に「文芸奨励委員会」というのを設置して16名の委員を選び、世界の文学を日本に受け入れるための手助けをしてもらおうとします。そのなかには、翻訳委員というのがおりまして、たとえばそのうちの一人森鷗外にゲーテの「ファウスト」の翻訳を依頼するということも起こりました。この「ファウスト」の翻訳は鷗外の名訳ともされていますが、しかしその裏側にはこうした日本政府の政策があったことも忘れるわけにはいきません。そしてこの作品は、すぐに劇化されることにもなります。

もとより「世界」の文学は、当然翻訳に付さねばなりません。これに対して映画関係者は、映画がむしろ世界共通の映像言語であると主張しはじめます。すなわち、映画は観るだけで理解できるというわけですが、1917年（大正6）に出た染井三郎の『我輩はフィルムである』という評論集のなかに、そのことが書き込まれています。つまり「目さえあれば映画は誰でも楽しめる」をキャッチフレーズとして、これからの時代は文学より映画であるという、いわば世界＝映画のコスモポリタンとしての性格を高らかに宣言してもいたのです。

では、そうして開かれた「世界＝映画」の中で、イタリア映画は日本にどういった影響をもたらしたのかということが次の問題です。資料に掲げたのは、『活動倶楽部』という映画雑誌の1919年（大正8）10月号に載った「床しき南欧映画を尋ねて」というイタリア映画の名場面集です。日本の各映画館で上映され好評を博した映画の名場面を集めたもので、キャプションにありますように、これ

だけのフィルムを良くぞ集めたと思います。今後イタリアの方々と交流する機会が増えれば、これらの映画と日本の比較研究が、いっそう綿密になることが期待されます。

そのなかで、たまたま手元に資料のある2つの作品を取り上げてみます。1つはローマ・チネス社の「アントニーとクレオパトラ」（エンリコ・ガッツォーニ監督、テリビリ・ゴンザレスとアムレート・ノヴェッリ主演）で、1914年（大正3）3月11日に浅草の電気館で上演されています（のち6月に明治座）。この映画については『アントニーとクレオパトラ写真帖』（1914年5月）という大判のものが浅草の電気館内写真帖出版部から出ていますので、ややくわしく見るができます。その一部を資料として掲げましたが、最初の写真は「万国特別興行権利附、世界的文芸大写真 アントニーとクレオパトラ」という立て看板と、電気館を取り巻く群集の姿で、大変な賑わいの様子がよくうかがえます。次いで、映画の名場面を2つ示してみました。1つは、アントニーの元へオクタビアスよりの使者が来てローマに帰るように要請する場面、また2つ目は、ローマ軍の兵士たちが3方から進撃しているという大迫力の画面です。前者は舞台、後者は野外撮影の場面ですが、いずれも「見る」ことを堪能させるに十分なフィルムのひと駒です。

もう1つの映画は「カピリア」という作品で、1916年（大正5）5月27日に帝国劇場で上映されました。ダヌンチオ原作、ピエロ・フォスコ監督、リディア・クァランタ主演の映画で、トリノにあるイタラ社の制作です。ダヌンチオの演説が第一次世界大戦へのイタリアの参戦を促したということで、フランス政府から褒賞されたというその資金を注ぎ込んだ映画です。この映画についても、第一新聞社から1916年5月にパンフレット『史劇 カピリア』として刊行されています。もっとも、作品のあらすじは、映画雑誌『活動之世界』の6月号に前篇と後篇の梗概がすでに掲載され、また翌月の同誌も「カピリア記念号」で、坪内士行や小笠原長幹らの映画評も掲載されていますが、ことのついでに、物語の内容をざっと話しておきましょう。

舞台は紀元前2世紀で、カピリアというのは、火の神カピリーを象ってつけられた名前です。主人公である豪農の姫カピリアは、5歳の時にエトナ山の大噴火に遭い小船で村を脱出しますが、海賊船に捕えられカルタゴに送られます。カピリアは異教徒であるためカルタゴ大聖堂で生贄として殺されるところを巨漢マチステに助けられますが、彼はハンニバルと戦う為にローマに行ってしまったため、カピリアはソフォニスバ姫に預けられて成長します。やがてマチステが帰って来て、ソフォニスバ姫の元で奴隷のように扱われていたカピリアを発見して、再び彼女を救い出しローマに送り返すという物語です。

この映画「カピリア」をめぐるのは、2つのエピソードを話しておきましょう。1つは、『活動之世界』6月号の広告でも知られるように、撮影費用が200万円であったというこの映画の興行権を、天活会社の小林喜三郎が20万円で落札したことです。そうした大枚を投じてまでなぜ購入したかということ、すでにイギリスやフランスで150日間というロングランになっているこの映画を入手しなければ、東洋における「日本」の位置が危ういからだと言われています。こうした「誇示」を掲げる背景には、もちろん営業という面もあるでしょうが、したがって映画の入場料は「特等5円」という高値（ふだんの入場料は15銭）がつけました。2つめは、その上映の仕方ですが、この映画については当時活動弁士といわれた染井三郎と西村楽天の2人が日本語の説明をつけて上映しました。映画の内容、とりわけ火山の噴火、壮大な神殿、戦争シーンなどの大仕掛けなセットもさることながら、彼らの説明ぶりも人気を呼んだ一つだとされています。この「弁士」という存在は、日本映画史のなかの特徴的な側面の一つですが、日本の芸能史には古くから仏教絵画の絵解きがあり、あるいは講談や落語などの寄席芸におけるライブ・パフォーマンスもあったわけで、「弁士」という存在はその延長としてみることもできます。それはともかく、彼らの奇妙奇天烈な、そして芝居がかった説明ぶりについては、鈴木鼓村という人の『耳の趣味』（佐久良書房）という本に出ていますから、興味のある人はみてく

ださい。

こうして、2つの代表的な作品のあとも、1916年(大正5)にはアンプロジア社の「ヴェニスの鮮血」やイタラ社の「詩人と女」が、また翌年にはダヌンチオ原作の「火」なども輸入されています。映画雑誌には、それらの筋書きが続々示され、またキネマ文庫といって「読むフィルム」つまり映画のフィルムに筋書きをつけた読み物も刊行されていて、それによって「日本語」自体の語り口もさまざまに変化をみせていくのですが、これについては、また次の機会にしましょう。

ここで、イタリア映画の衝撃について、田中純一郎の『日本映画発達史Ⅰ』(中央公論社)や飯島正の『欧米映画史〈下〉』(東京ブック)などを参照しつつ、この時代の映画が演劇その他の表象芸術にどのような影響をもたらしたのかということについて、いくつかまとめておきましょう。

1) イタリア映画の特徴は何といっても野外撮影つまりロケーションによって、映像表現の可能性を拡大させたといわれます。それというのも、撮影所のある場所がそのまま歴史の古跡、古戦場であって、どこを映しても歴史の舞台になるという恵まれた環境にありました。したがって、舞台劇と野外撮影という2つのショットの多様さと、それを編集する技術の巧みさが日本の観客を驚かせたのです。

2) なかでも、紹介した2つの作品は、いずれも大掛かりな野外撮影になるもので、ローマ軍の行進やポエニ戦争のシーンなどにみられるように、何千人ものエキストラを使っただけの「群衆」シーンが日本人の度肝を抜いたとされています。いわば歴史を口実にしながらいざというときの威力をふんだんに発揮していたわけです。

3) また、イタリア映画は女優中心で、彼女たちの表情などが示す「官能性」の表象を賞賛する観客の声がしばしば雑誌に投稿されています。しかし、日本では、たとえば先程触れた日活映画「狂美人」という作品にみられるように、映画といっても歌舞伎劇の延長という形態が依然として続いていて、このサロメを演じていたのはじつは男性(つまり女形)なのです。開場したばかりの帝国劇場には、新たに女優養成所が出来ていました

が、その第1期生であった森律子の回想『女優生活廿年』(実業之日本社)などを見ても分かりますが、彼女たちは「サロメ」映画を何度も見ては、女優としての表情やしぐさを勉強したといえます。それでもなお、居ても立ってもいられないという思いがつのり、1927年(昭和2)にロンドンの映画アカデミーに留学したといっています。

4) さらに、イタリア映画といえば「史劇」ですが、後藤新平が「誰が金鵄勲章を手にするものぞ」(『活動之世界』1916年5月)という文章のなかで、その史劇に比べて日本映画は尾上松之助のチャンバラ劇ではどうしようもないと嘆いています。イギリスの映画は社会劇、フランスの映画は恋愛劇、イタリアの映画は史劇というように、それぞれ特色があるが、では日本の映画の特色は何かというのです。そして、日本にもイタリアなどに劣らない「歴史」ドラマがあるはずだということです。軍人の功ならぬ映画の「金鵄勲章」を手にするのは誰かというわけですが、じつにあからさまな文化的ナショナリズムの鼓吹です。

日本の旧劇映画は、仇討もの、お家騒動ものなど、いわば大衆が好んだ講談ネタの移し替えが大部分であったわけですから、いきなり史劇といっても無理なことですが、それを引き継ぐことになったのが新劇の舞台なのです。いわゆる大正期における創作歴史劇の時代になるのですが、代表作には長田秀雄の「大仏開眼」や中村吉蔵の「井伊大老の死」などがあげられます。「大仏開眼」はいくまでもなく、東大寺大仏殿の開眼を壮大に謳い上げた大歴史劇で、また「井伊大老の死」は幕末・維新期における権力者の意味を問う歴史劇ですが、この2つの戯曲には明らかにイタリアの史劇の影響をみることができます。

5) もっとも、イタリアの史劇が本当に歴史劇なのかというと、それは微妙な問題です。イタリアにおける史劇というのは、主として古代ローマ人の偉大さを謳うこと(映画では、それが俳優の力強い肉体表象となっている)と、ラテン語に遡る言語記憶という2つの要素で成り立っているとされています。それが、高貴さ、気高さの根源にもなっているというわけですが、といえそれは歴史ではなくて神話的な物語というべきでしょう

か。それがもちろん、帝国主義時代の日本における歴史劇／神話劇へと転移することになるのですが、あらためてイタリア映画の「史劇」の影響を考えるべきだと思います。

最後に、イタリア映画のその後についても触れておきましょう。日本の映画市場はやがてアメリカ映画に席卷され、さきに触れた『活動之世界』という雑誌自体、ユニバーサル社に買い取られ、誌面全体がアメリカ映画を紹介する内容になっていきます。「カピリア」という映画に影響を受けたグリフィス監督に「イントレランス」という映画があります。1919年（大正8）3月に帝国劇場で上映され、こちらのほうは入場料10円というとても高い高さでした。またその後の上映では、日本人には分かりにくいという会社の判断で、縮小版が上映されたということなども知られていますが、のち戦後になって完全版が上映されています。「バビロン篇」「中世フランス篇」「ユダヤ篇」「アメリカ篇」からなる壮大な歴史劇・神話劇ですが、ちなみにこの映画にはDVD版がありますから、是非みていただきたいと思います。

Ⅲ 小山内薫の翻案「緑の朝」の波紋

三番目の話題は、小山内薫の戯曲「緑の朝」をめぐってです。これは1918年（大正7）8月に『演藝画報』に掲載されたもので、同月の25日に帝国劇場で菊五郎一座によって上演されています。この芝居はじつはダヌンチオの「春曙夢」（『四季の夢』1897）という作品の翻案でした。すでに大久保雨枝によって『心の花』（1905年1月、2月）という雑誌に翻訳されていますが、小山内は森鷗外訳の「秋夕夢」（『歌舞伎』1909年11月、12月）にいたく感心していましたから、自分もという思いがあったことでしょう。しかし、これが雑誌に掲載されたときは「菊五郎・吉右衛門一座中幕用脚本」とあって、ダヌンチオの名前はなく、鬼太郎の「八月の二軒芝居」（『新演藝』1917年9月）など、いろいろな劇評が出るに及んで、これが「翻案」であることが分かってきたのです。

シェイクスピアをはじめ、西洋演劇の「翻案」は、日本のお家芸ともいべきジャンルですが、

歌舞伎界ではいわゆる「新歌舞伎」の時代となり、ついにはその新作をさまざまな書き手に依頼することになります。小山内薫も菊五郎が市村座に引っ張ってきて座付作者にしたのですが、その第1作がこの「緑の朝」だったのです。ダヌンチオの「春曙夢」は、狂女イサベルラが主人公の恋の悲劇です。伯爵の妻イサベルラがある男と恋に落ちますが、彼女の寝室に忍び込んできた男は彼女の腕のなかで眠っているところを夫の伯爵に殺されてしまい、彼女は朝目覚めると狂女になっていたという話です。さらに彼女の妹ベアトリーチェはキルジニヨという男と恋愛関係にあるのですが、この男はイサベルラを慕っているという複雑な関係にもなっています。小山内はそのイサベルラを一條少将義継嗣に、キルジニヨを左衛門光綱に作り換えています。

小山内の翻案で問題になったのは、まず舞台です。和田英作「俳優を生かす背景」（『新演藝』1917年9月）に詳しく評されていますが、ダヌンチオの原作の舞台背景はエンタシスの柱がある別荘で、庭に2本の木が植わっているという設定です。菩提樹と橙の木です。それは処女と童貞を意味するといわれていますが、小山内の台本では柳と橙になっていて、内容にかかわる象徴性がすでに失われていることになります。ここでの樹木というのは、狂女の「血の記憶」としての「赤」をその視界から払拭して、彼女が「緑」の木々に一体化するように庭師や医師たちが心を尽くしているという設定なわけですから、さらに重要な意味があるわけです。したがって、この小山内の戯曲に対して、いったい演劇における「翻案」とは何かという疑問が呈されるのも自然なことです。

また俳優の衣装も問題になりました。資料に掲げた舞台写真をご覧ください。小山内の指定では尾上菊五郎が着るのは狩衣とされていますが、よく見ると水干という着物になっていて、これでは人物の身分ばかりか時代設定も怪しくなります。さらに舞台の下手に建物があって、橋げたが大きくしつらえられてありますが、これは日本の浮世絵などによくあるように、むしろ江戸の表象といってもいい背景で、ますます取りあわせが妙なことになります。

こうした細部もさることながら、内容自体も一條少将の恋の相手をその奥方が嫉妬して殺してしまうという具合に変えられていて、劇評では酷評が相次ぎ、それに腹を立てた菊五郎が「何故こんな良い芝居が分らないのか」となじったために、新聞記者が怒って一斉に菊五郎批判に転じたという、いわくつきの芝居になりました。菊五郎の舌禍事件としても、有名になった演目の1つです。

読売新聞の記事「不評劇『緑の朝』返り咲物語」(1918年10月24日)にも記されていますが、この不評に懲りたのか、小山内薫は、今度は主人公を原作どおりの女性にして、1918年(大正7)11月6日に明治座で再演します。芸術座と松竹の提携公演で、松井須磨子の狂女イサベルラと2代目市川猿之助の医師という配役になる舞台です。そこで資料として掲げた『演藝画報』12月号の口絵写真ですが、菊五郎のときと比べて扱いが小さくなっています。このときの歌舞伎の1番目の時代物は「根元草摺引」という、いわゆる曽我もので、2番目の世話物が「お艶新助」です。菊五郎のときは、さきに見たように堂々とした扱いだったわけですが、松井須磨子がやるとこういう扱いになる。そういうこともあわせて、日本の演劇状況をみることもできるでしょう。それをあらためていい直してみると、菊五郎の舞台は「翻案」であり、須磨子のそれは「翻訳」ということになります。そして後者は、『伊太利近代古典劇集』(世界戯曲全集刊行会、1928年)に収録されてもいます。まさしく、翻案か、翻訳か、というわけですが、演劇というパフォーマンスにあっては、むしろこれは世界共通の問題でもあります。

ダヌンチオは、長編小説の『死の勝利』などによって、日本においては人気度の高い作家の一人でした。現代では、三島由紀夫の『聖セバスチアンの殉教』(国書刊行会)や筒井康隆の『ダヌンツィオに夢中』(中公文庫)なども知られています。そのダヌンチオが、日本にやって来るという噂が流れ、雑誌『新潮』の1919年(大正8)10月号が「ダヌンチヨ氏来朝の風聞に対して」というアンケートを試みたりしました。小山内の「緑の朝」の再演は、そうした風潮の真ただ中にあったのです。

その小山内の翻案台本ですが、ダヌンチオが聞いたら、あるいは狂女などありふれていて、むしろ男に書き換えられたことに多大な興味を示したかも知れません。演劇における移植とは何か、また演劇がその国の伝統演劇と遭遇したとき、どういう変化をもたらすのか、そのことも含めて文化の越境とは何なのか、また創造的なものの有効性とは何であるか、という問題を私たちに投げ掛けていると思います。

司会：ありがとうございました。10分ほど休憩しまして、3時15分からパネルディスカッションをスタートします。質問はその際にお受けしたいと思います。ありがとうございました。

2009.10.3 シンポジウム・パネルディスカッション

鳥越：これからパネルディスカッションになりますが、パネリストをあらためてご紹介いたします。わたくしの側の方からということにしましょう。まず、ローザ・カーロリ先生です。日本史学がご専門です。ヴェネツィア大学の東アジア学科准教授でいらっしゃいます。ヴェネツィア大学は、ユニヴェルシタ・カ・フォスカリ大学というのが正しい名前なのですが、通称ヴェネツィア大学、その東アジア学科の准教授でいらっしゃいます。そして同じく、アルド・トッリーニ先生です。ヴェネツィア大学の東アジア学科の教授でいらっしゃいます。日本の古典語とそれから仏教がご専門。そして伊坂先生。本学の国際文化交流学科の教授です、そして外国語学部長というたいへんお忙しい立場です。そして日高先生、同じく国際文化交流学科の教授でいらっしゃいます。日高先生は日本文学の御専門、伊坂先生は本来ドイツ哲学が一番の御専門です。このメンバーでやりたいと思いますが、人文学研究所がこの催しの主催をしております、その所長をたまたまやっております関係で、本日はその司会をやっております鳥越と申します。宜しくお願い致します。

それで、ディスカッションで何をやろうかと考えているのですが、まあ、なんとかなるだろうと思っております。せっかくヴェネツィア大学からお二人の先生がお見えになっておまして、じつはご出身は、本当は違うのですが、ヴェネツィアのかたというふうにまあ決めつけて、日本とヴェネツィアの関係というのを冒頭で少しだけ余談として申しあげます。

日本とヴェネツィアには深い関係が昔からありまして、そもそも日本のことをヨーロッパにはじめて紹介してくれた人物ですが、13世紀の終わりにマルコポーロが日本のことをヨーロッパに、ひじょうに魅力的に紹介してくれました。

マルコポーロはヴェネツィアの商人、ヴェネツィア人でした。それから今日の話のなかにオランダの東インド会社ですとか、それからポルトガルの事が出てまいりましたが、彼らがそもそも何故東洋にきたのかというと、じつは東洋からのスパイスの貿易をヴェネツィアがかつて独占をしていて、その独占を打ち破って、元から手に入れた、香料をそまそまの原産地で手に入れたというのが一番のねらいでした。ですからオランダの東インド会社は、ジャワの、今はインドネシアですが、あそこに根拠地を置いておりました。ジャワは香料の産地ですね。それからトッリーニ先生のお話のなかに出てまいりましたあのザビエル、先生は「サビエル」と発音されましたが、「ハビエル」とかいろいろと呼ばれる人です。イエズス会の宣教師ですけれども。この人についての話を読んでみると、日本に来る前にはインドのゴアにいたと書いてあります。その前どこにいたというのは大抵書いてありませんが、たぶんヴェネツィアにいたはずで。ヴェネツィアにインクラビリという病院の跡地が残っております。インクラビリというのはもう病が治らない人たち、不治の病の人たちのための病院、まあ病院というよりむしろホスピスに近いものだと思いますけれど、どうもそこで働いていたらしいのです。それで病人の世話をすることによって長けていたようでして、日本に来てからも病院活動というのをイエズス会は特にやりましたね。ヨーロッパですとイエズス会というのは中等教育、中高あたりの教育をしっかりと担当して、それで社会の中核になる人物を育てたり、それにももちろん宣教活動で有名ですが、日本では、キリシタン時代には病院を営んで、それで貧しい人々を引きつけた、そのそまそまの発想がひょっとするとヴェネツィアのインクラビリにあったのかもしれない。それからイエズス

会の人たちですが、イグナチウス・デ・ロヨラとか、創立メンバーはみんなヴェネツィアで司祭になっておりますね。そんな関係もあります。それから、有島生馬はさきほども話のなかに出てまいりましたように、ヴェネツィアについて書いていますし、ダヌンツィオもちろんヴェネツィアに住んでいましたね。カゼッタ・ロッサ、赤い小さな家という名の、大運河沿いの家に愛人の女性と住んでおりました。そんなぐあいに、さまざまにヴェネツィアが関係をしている。今日、話に出た人物はほとんどみんなヴェネツィアがらみということであります。

さて、今は単なる前置きでして、やはりパネルディスカッションですので、一つくらい統一した話題があってもいいかなと思って、考えたものがあります。これをパネリストの皆さん全員にまずお尋ねしてみて、その後はもう出たとこ勝負というふうにしたいと思っています。

お尋ねしたいのは、それぞれお話し下さった事ごとに、「いわゆるオリエンタリズムの度合いはどれくらいあるのか」という質問をしてみたいと思います。「オリエンタリズム」というと学生さんのなかには知らない人もいるかと思いますが、1970年代の終わりにサイドというパレスチナ出身の学者が『オリエンタリズム』という本を書いてすごく有名になった概念です。ヨーロッパ人は、オリエン特、まあ特に中東ですけども、それを他者として描きだしている。自分たちはそうじゃないものとして描きだしている。自分たちヨーロッパ人はそういうオリエン特の人たちとは違うんだというふうにして、逆に、自分たちのアイデンティティを決めている、「ああじゃないんだ」というように。これは大衆文芸なんかにもちろんでるのですが、一番あぶないのが純粋な学問的著作とされているものですね、意外に、そういうところに「オリエンタリズム」が現れてくるということです。それでは「オリエン特」にどんな特徴があるかという、たとえば、秩序がない、という。それから理性的でない、子供っぽい、幼稚だという。「オリエン特」には、悪いイメージだけでなく、一見良いイメージ、いわゆる、「高貴な野蛮人」というのですけれども、文明に毒

されていない、近代文明に毒されていないと本当に自然な生き方をしているというイメージもあります。こういうふうには、否定的なイメージもありますし、肯定的なイメージもあるのですけれども、それも要するに自分たちと違う、自分たちとは違う存在としてオリエン特の人たちを描きだすということです。『マダム・バタフライ』、『蝶々夫人』ですね、あれを見ていますと、日本の女性というのが、本当に頭が空っぽのかわいい赤ん坊のようだとされている。幼稚で、非理性的。ところで、私が面白いと思っているのは、イタリア、近代のイタリアというのもヨーロッパのなかの「オリエン特」というふうには表象されているところがあつたと思うのです。イタリアを描きだすときにも、イメージとしては「秩序がない」とかなるわけですね、すいません。もう一方には、やはり「高貴な野蛮人」、Noble Savage というのですけれども、そういう描き方もあります。典型的なのは日本の観光パンフレットでして、イタリアというと、恋と食べ物と歌の国と書いてある。アモレ・マンジャーレ・カンターレの国とかといって。そしてツアーにのっかっていくとそういうところばかり見せられますので、本当にそうだと思って帰ってくるのですけれども、実はそうじゃないかもしれませんね。それからヘンリー・ジェームズという昔のアメリカの作家が書いたものをみると1880年くらいのヴェネツィアについて、ヴェネツィアに住む人たちは、住んでいる建物もガタガタになっているし、それから収入がなくてポケットにお金が、ほとんど入っていない、それに勤め先もない。でも日向に寝転がって海辺で水遊びをしたり、楽しげにお話ばかりしているのが、うらやましいとか、そういう書き方をするので、すね。これを読むとやはり Noble Savage だと思うんですよ、イメージとしては。というわけでまあ日本という「オリエン特」と、それからヨーロッパのなかの「オリエン特」としてのイタリアいう、まあ両方にひっかけて何かその「オリエンタリズム」的というんでしょうか、それが、先生方のお話のなかに出てまいりましたことに関係しているかどうか、ちょっとうかがってみたい。ちなみにこのシンポジウムのテーマで、

「表象」というのが何度も出てきましたが、なにかあるものとか、こととか、あるは出来事とかが人間の精神を通して、伝えられていくんですね。精神を通しますので、そこに必ず社会的、文化的、政治的な力が作用したりしまして、出てきたのが「表象」です。まあ突きつめていくと、そもそも本当のものとか本当の事とかはないのかもしれない、人間は精神を持っていますので表象してしまうのです。というようなことを、ちょっと解説をしたうえで、順番をどうしましょうか。じゃあのカーロリ先生よろしいですか？ 先生は、皇太子、1921年の皇太子のイタリア訪問についてイタリアの人たちの受けとめかた、それから特に新聞の報道についてのお話だったのですけれども、そのなかにオリエンタリズム的なものが認められるかどうか、いかがでしょうか。

カーロリ：はい、私が使った資料はイタリアのヴァチカン市国の文書館の資料と、あとは新聞とか雑誌というような資料でした。例えばあの公文書館の資料は、公式の高官や宮廷などの見方などについて分かるように使ったのですけれども、やはりイタリア人が一般的にどんな印象を書いたかどうかを確認するためには、イタリアの新聞とか雑誌とか、そしてそこに出た写真ですね。まあこれによって、どういうふうに、あの戦中時代のイタリア人がどういうふうであったか、どう見ていたかを、たぶん知る事が出来る。それは、アジアというと、一般的なイタリア人は、日本はちゃんとどこにあるか、ちゃんとどんな文化があったかどうか分からないはずですね。私がこの新聞を読みながら、一番印象的だったのは、皇太子と日本人の方々のやり方とかそういった事です。というのは、どこでも彼らはヨーロッパ風の服装をしているし、そこの習慣、そしてすごくエチケットを守る。こういう面ももっているのですけれども、でも一般的に言えば、日本の皇太子と日本人の方々にイタリアの国家についての観念があったなら、これはいつでもあの公文書のものです。ですから皇太子はパラティーノの丘とかボルゲーゼ美術館とかいらしたとき細かい説明を持っている。よく考えてみると、明治時代からの日伊関係と同じですね。何がというと、明治になると外国

からお雇い外国人がたくさん日本に来たんですけれども、イタリアから来たお雇い外国人というのはほとんど文化の人。文化というのは、美術とか芸術とか、たとえばキオッソーネのような、ですからイタリアに対して興味は皇室的な興味よりも文化的な興味があるのです。それはお互いに小さな誤解でした。もちろんあの時代のイタリアは例えば植民地主義のほうが強かったんですけれどもね。ヨーロッパのなかでもイタリアはちょっとね、後進国ですので、植民するのは遅かったんですが。もちろんオリエンタリズムというと、ヨーロッパ中心主義と関係があるのですけれども、ヨーロッパ中心主義は、進歩的な国と後進国との関係とも関係があるのです。でも皇太子は北イタリアの発展した地方へは行かないで、ローマとナポリへ行った。というのは、あんまり発展していなかった地方に行ったんですけれども、これも多分意味があるかもしれないです。

鳥越：ということで。では、またご質問をさし上げるかもしれませんが、トッリーニ先生いかがですか。16世紀、17世紀あたりの……。

トッリーニ：そうですね、まず一言、先生がおっしゃったヨーロッパのなかのオリエンタリズム、非常に面白い事なのですから、私は初めて聞きました。考えた事もなかったものですが、やはりイタリアという国はヨーロッパのなかでは、そうですね、まあオリエントに一番近い国なんじゃないかと。

鳥越：はい、という事です。

トッリーニ：それはなぜかという、北ヨーロッパとアフリカとの間の、何か懸け橋になっているのがイタリアですから、結局、南ヨーロッパにあって、そうですね、ヨーロッパでない文化に一番近い国ですね。イタリアは本当に昔からいろんな民族が入ってきて支配されて、もうイタリア人の民族は本当に混ざっているのですから。特にアラブ系の人に、血が大変混ざっています。どの国でもどの地域でも、どんな小さな国のどんな小さな地域でもその国、その地域にはオリエントがあるんじゃないかという気がします。

それは別として、私の発表のテーマに戻ると、16、17世紀のヨーロッパ人は、それは大航海時代

にあたりますので、初めてヨーロッパ人は外へ行って、アフリカとか、南アメリカとかアジアとかいろいろな違う文化に接していろいろな印象を受けたと思います。このたくさんの違う民族、違う文化のなかで、やはり文化のレベルの高い民族もあれば、文化の低い国もたくさんあったのではないかと思います。例えば、南アメリカとアフリカとアジアの国の違い方は、はっきりと目立ってくると思います。

そのなかでオリエンタリズムというのをどう位置づければいいのかというのも大きな問題です。オリエンタリズムのなかでも、アジアは中近東から日本まで非常に大きい地域を意味しているのですけれども、そのなかでもやはりジャポニズムという言葉も使えるし。私がいろいろな報告とか、宣教師の報告だとか年間報告だとか読むと、印象としては、今朝引用した、サビエル、ハビエルの言葉が一番適切ではないかなと。「今まで会った民族のなかで日本人が一番よかった」。「一番良かった」という事は、さきほど言ったように、宣教師がいろいろな民族に出会って、その中で、アジア人だけじゃなくて、アフリカ人とか南アメリカの民族のなかで、全部比べると日本人が一番よかったと。その「よかった」がどういう意味かというと、まあサビエルの考えではたぶん「キリスト教になりやすい」ということではないか。キリスト教信者になりやすいというのは、文化のレベルがヨーロッパ人とあまり変わらない。キリスト教を布教するときにやはり文化のない人と文化のある人と、全然違いますよ。文化のない人にどうやって聖書を教えればいいのか、たいへん難しいでしょう。ですけれども、だいたいですね、違いはあってもレベルの問題、同じレベルの文化だと、かなり簡単に通じるという事はあると思います。違いがあっても、大きい違いがあってもですね、やはり文化のレベルが同じ程度くらいだったら、かなり通じやすくなるのではないかと思います。さきほど鳥越先生からは「Savage」だとか「野蛮人」の話が出たのですけれども、その当時のヨーロッパ人は、日本人は野蛮人とは決して思っていなかったです。ですから、とても日本の文化を高く評価していました。

今朝、私も伊坂先生の発表を聞きながらいろいろ考えたのですけれども、やはり18世紀になると随分違うのではないかな。まあヨーロッパは啓蒙時代に入って、日本は鎖国時代に入って、差が大きくなりました。そうしたらそのときから、私も、印象にすぎないのですけれども、その16世紀、17世紀前半の、ヨーロッパ人と同じレベル・文化・感覚から、そのあとは日本人が、なんといふかな、文化が閉じこもっていて発展していない。ヨーロッパが発展していて、日本では発展していないと。そういう考えを結構長くもっていました。最近、そうではないとやっとわかってきました。

私が今朝の発表のなかで「日本人の体格、性格」と二つに分けて、御紹介したのですけれども、体格と性格のなかでもオリエンタリズムという考えが出てくるか。例えば今朝の先生の質問の、日本人は白人か、白人でないか。それもやはり関係しているんじゃないかと思います。白人だと認める場合は、やはりヨーロッパ人と同じ、一応民族的にも文化的にもあまり変わらないという印象ですね、ですから体格を描写するときでもそういうオリエンタリズム、野蛮人か、野蛮人でないかとか、それが出てくると思います。ですから私が見たものでは、ヨーロッパ人はその当時の日本文化を高く評価していたが、ただそのあとはキリスト教は禁教になって、いろいろ反発されて多分意見が変わったかもしれないけれども。日本人は、かなり好戦的で、反乱好きとか下剋上が多いとか、残酷だとか、そのような意見が強くなりました。そういう事も出てきたのですけれども、あの時代はあの時代で、信長、秀吉、徳川家康の時代ですから、しかたがないのですけれども。それを別として、日本人はとても賢明、賢い、学問を大切にするとか、頭がいいとか、そう書いています。そういう事が目立ちます。ですからオリエンタリズムといたら、私が思うには、あの当時は、その区別があってもやはりただ文化の違いだけです、レベルの問題ではありません。たとえばルイス・フロイスですね、有名な。彼は、ただ日本文化はヨーロッパ人の目から見れば逆になると書いています。いろんな面でも、日本人は全然ヨーロッパ人

と反対にするとか。それはよく書いてありますけれども、それは文化の違いだけです。だから日本人のやり方が私たちのやりかたと反対ですけれども、それは、それぐらいのオリエンタリズムだと思います。文化の違いのオリエンタリズム。だから、日本は珍しい、文化が非常に珍しいという程度ですね。

鳥越：では続いてあの、伊坂先生。

伊坂：ヨーロッパではオリエンタリズムは、東方への関心というふうに言えると思うんです。ヨーロッパ世界がなにか行き詰ったときに、必ず東方、つまりオリエントに関心が向いてくるという、こういう歴史のパターンがあると思うんですよね。おそらくその最初は、ヨーロッパの三十年戦争の後です。この戦争は1618年から48年という30年間、ドイツだけではなくヨーロッパの、いわゆる西洋というように言われたなかでの宗教戦争もからんで、ヨーロッパ全体が荒廃してしまうのです。完全に国家が荒廃し、そして人々の精神も荒廃してしまう。その後ですね、ケンペルが生まれたのは、その三十年戦争の3年後あたりですので、まだまだその余波が続いているわけです。ケンペルの伯父さんが宗教的な魔女狩りで処刑されてしまうということもあり、ケンペルの少年時代はまだそういう余波が残っている時代でした。だから、言ってみれば神の秩序がガラガラと音を立てて崩壊していった時代で、そのような理不尽な事が起こる。そういった時代に、ケンペルなども当時の非西欧的な東方、オリエントに関心を向けていったわけです。オリエントの中でも極東は一つの神秘的な地域でもあり、そしてまた博物学者たちが関心を向けた未知の地域であったようです。そういうことで東方への関心が、まさにオリエンタリズムであったわけです。

それでケンペルは、私が本当に面白いなと思って興味を持っているのですが、日本の神道に対して非常に関心を持っている。おそらく当時はまだ神道というものが、ヨーロッパではほとんど紹介されていなかったでしょう。ケンペルが日本に来て『古事記』に触れたり、通詞を通して伊勢神宮を知ったりするわけですね。おそらく当時はまだ神道を理解するのは、ヨーロッパ人にとっては難

しいわけですね。日本人の特殊な自然観みたいなものを理解するために、ケンペルは「気(き)」という概念を使います。しかし『古事記』のなかで「気」の概念が表わしているのは、「霊(ひ)」なんです。 「霊」という言葉で『古事記』のなかで最初に言われているのは、神々のなかでも「高皇産霊(タカミムスヒ)」という名前の神です。この神は、伊邪那岐と伊邪那美よりも前で、まだ人格神のように形を取っていない。「タカミムスヒ」という神は、日本の神々を産み出していく一番の大本にあって、「産霊(ムスヒ)」の「産(ムス)」というのは、産み出すという意味があります。それで「ムスヒ」には、「産霊」という漢字が当てられるのですが、産み出す霊的な力みたいなものを「ムスヒ」という神の名前で表しているのですね。その「霊」というものに、ケンペルは「気」という中国哲学の朱子学の用語を当てていると思います。だからキリスト教の神のように自然を創造するのではなくて、自然そのもののなかに産み出す力が備わっているというのが日本人の自然観であるわけです。それが『古事記』のなかの神話の物語に、そういった日本人の自然観が現れているのではないかと。そういう日本の神話にケンペルが関心を持ったというのは、彼自身がヨーロッパのキリスト教に懐疑的になっていたということもあるのではないかと思います。そういう点に一つのオリエンタリズムの原型みたいなものがあつたのかなという気がします。

それから、もう一つオリエンタリズムがヨーロッパのなかで際立ってくるのが、フランス革命前後の時代のなかから出てくるロマン主義の流れです。フランス革命の思想的背景となった啓蒙主義は、理性という原理でもって宇宙とか世界を把握しようとし、近代ヨーロッパの理性というのは、数学的な理性で宇宙はすべて理解できる、宇宙の幾何学的な秩序は基本的に理性によって認識されるんだということですね。この人間の理性の力によって世界を作っていくというのが、啓蒙主義の考え方です。ところが理性を実現しようとしたあのフランス革命の結果は、逆に混乱状態に陥った。フランス革命は最終的には、ルイ王朝を倒して権力者の首をギロチンではねるというよう

な恐怖政治になり、非理性的な部分が露呈してきます。そのように近代の行き着いたところで、またやはりオリエントに目が向けられるのです。啓蒙主義に対してロマン主義の運動が現れてきますが、このロマン主義はオリエントに目を向けます。例えばゲレスというロマン主義者は、チベットに世界の神話の中心があるというような理論を作ったし、ノヴァーリスのように東方のオリエントに神秘的な力を見出そうというような発想も生まれます。このようにロマン主義は、オリエントのなかに非理性的ではあるが、理性より根源的な力というものを見ようとします。つまり人間が理性によって自然を支配するのではなくて、自然そのもののなかに人間を超えた何か産み出す力があるというように考えるわけです。これもまたヨーロッパ思想のもう一つの方向性ですね。ロマン主義者たちはあのスピノザの汎神論に共通して関心を持っていて、そのスピノザの汎神論の一番の核心にあるのは *natura naturans*、つまり産み出す自然という考え方です。このような自然観はオリエント、特に日本の自然信仰とどこかで共通しています。日本人の信仰心は汎神論的ですので、ロマン主義者たちが東方オリエント、つまり東洋に目を向けたというのも、何か分かるような気がします。

このようなロマン主義の流れは、その後のオリエンタリズム、そしてジャポニズムにもつながっていくと思います。ヨーロッパのジャポニズムが注目したのは、日本人が絵に描いた自然の姿、自然の風景ですね。自然のなかに何か一つの美というものを見出す。自然の美は、決して幾何学的な秩序ではなくて、むしろ植物が持っているような曲線的な形、あるいは自然を産み出す力を感じさせるようなものですよね。そういうものに美を見いだしていくジャポニズムの流れは、その後も現代まで続いていくことになります。

鳥越：日高先生、さっきのあの『蝙蝠』の像というのはオリエンタリズムから取っていきうのだという……。

日高：そうですね。オリエンタリズムということについて、今日何か言うということになっていましたので、私はレジュメの最後のところに一つ付

けてありますので、それをちょっと見て下さい。これはあの『カビリア』という映画が紹介されたと同じ雑誌のなかにある紹介記事です。『落人（おちうど）』という映画と『お蝶さん』という映画で、ともにアメリカ映画ですが、その評価が違えるということが、私にとっては大変興味深い。まず『落人』という映画で「原名日本の田園詩」とありますが、そのキャプションを見て頂くとわかるのですが、「襦（おくみ）を左にするは蕃夷の事也、礼儀ある日本人古より未だ蛮俗を学ばず」と書いてあります。これはアメリカが撮ったこの映画のなかに出てくる日本人の描かれ方について、それがまあひどいということですね。レストランのボーイであるとか、自動車の運転手であるとか、ゴミ掃除をするような奴とか、映画にはそういう役しか出てこないという。「おくみ」というのは、着物の右と左を合わせたところをいうわけですが、それを左にするは蕃夷のすることで、日本ではこんなことはしない、といっているわけです。つまり、外国人が日本人を扱うときは、往々にしてこのように間違っただけで表象されるということがあり得るというわけです。しかしそれが問題なのかということが、さらに問題ですね。何故かという、アメリカの映画監督にとっては、この映画は日本人が見るということを前提にして撮ってはいないわけですね。この映画を見るのは、むしろアメリカ人なのです。あるいはもっと広くヨーロッパの人々に対する日本人のイメージ、もう少し言うと、劣位の文化を持っている原住民の女という表象以外のなにものでもないのです。ですから、着物の裾とか、帯の結び方などについて、日本人がいちゃもんをつけたところで、何もはじまらないということなのです。これを見せたいのはアメリカ人なのだ、ということが問題なのです。一方、『お蝶さん』というメリー・ピックフォード出演のこの映画、これは『カビリア』と同じ時期に封切られた映画ですが、それに付けられている文章を見るとよく分かりますが、「今日まで外人によって演ぜられた日本劇の中で、嬢のお蝶さん程われわれの理想に近いものはない」と書かれています。こちらの方は大歓迎というわけなのですが、それは何故かというメリー・ピック

フォードが美しいからです。日本人を演じているのだけれども、演じている彼女が美人だからなのです。しかも、そのあとにつづけて「衣装道具から背景に至るまで、我国流行の粋を採ったもので」云々とも書いてある。日本の文化表象についても間違いがない、というのですね。つまり、この二つの映画に示された二重のアドレス、それが問題なのです。

このことでも分かるとおり、文化の問題というのは、たんなるインタレストという問題ではありません。さっきの話のなかで、遠くへのあこがれも含めて、東方志向をオリエンタリズムという概念によってやや曖昧に、かつ広く解釈しているのですが、それは間違いです。サイドの概念でいえば、オリエンタリズムというのは帝国主義、あるいは植民地支配にからんだ、その政治性をどう考えるかという概念として使われているのです。異なった文化に対して、支配／被支配の関係が様々な表象のなかに生まれるということの分析が「オリエンタリズム」ということでなければならぬでしょう。

もう一つ、さっき言い忘れてしまったのですが、イタリア映画「アントニーとクレオパトラ」の俳優の写真を見ていただきたいのですが、これを日本人が見ると、このアントニーその他のローマ人の衣装がおおよそ裸に近い。しかしその見方を間違うといけけないので、この映画の衣装の根本はどこからきているかという、もちろん古代の彫刻からきているわけです。基本的には、布を身体の上から下に掛ける、あるいは垂らしているだけです。これが舞台でも映画でも、同じローマ人のいわば「表象」ですね。この衣装の表象がギリシャ・ローマの彫刻に基づいていることについては、ヘーゲルの美学のなかに、ちゃんと書いてあります。これは伊坂先生のご専門ですが、ヘーゲルはそれこそが「根本的な自由」であると。また、その「均整ある肉体」そのものが美なのだとね。ローマ人の美德、気高さがそこにあると、だから全部を覆わないのだというのです。同じ雑誌に、イタリア映画の役者のプロマイドがありますが、こちらの方は、みな正装していますね。だから、そのプロマイドと、映画の役柄をあらわすス

チール写真を比べることで、はじめて「表象」という問題が出てくるわけです。

このローマ人の表象に関しては、またロラン・バルトが『神話』のなかの一篇「映画の中のローマ人」で書いています。ジョゼフ・マンキウィッツ監督の『ジュリアス・シーザー』に登場するローマ人の頭髪について論じたものです。彼らの髪が、たとえばカールしている、糸のように垂れている、キチンと梳目が入っているなどと指摘していて、こうした髪へのこだわりがハリウッド映画におけるローマ人の「記号」になっているというのです。そして、ちょっと皮肉に、じゃあローマ人に禿頭はいなかったのかと。つまり、髪とかヒゲとか、それが社会的集団の「表象」になっているわけで、そこにはまた序列とか権威とかいう問題ともリンクしていくわけですね。とりわけ、写真とか、映画とか、芝居もそうなのですが、衣服の問題一つを取っても、そうして見えるものの奥に何が隠されているかを問わなければならないのです。

鳥越：えーと、どうでしょうか、お互い何か質問とか、ありませんでしょうか、先生方。ええ。ちょうど話が盛り上がりそうない雰囲気になってきたので。じゃあ。

トッリーニ：じゃあすいません、先に。また一つつけ加えたい事があるのですが。オリエンタリズムというのは、関係の問題でしょう。西洋と東洋がどういう関係を持っているか、関係づくりの問題ですね。要するに、私たちヨーロッパ人としては何がオリエンタリズムかということ、どの観点から、どの立場から言えば、オリエンタリズムになるのかということです。私たちの立場が変わると、変わってくる。例えばさっき出た、そうですね、啓蒙時代だとか、ロマン主義の時代だとか、全然違いますね。ヨーロッパ人としては、啓蒙時代はやはり秩序、ロマン主義の時代は無秩序となっていますが、ですから啓蒙時代のときにヨーロッパ人がどうやってオリエントを見たかという、やはり秩序の立場から無秩序のオリエントを見ました。それから私たちヨーロッパ人としては、やはりオリエントが劣位の関係にあったのですよね。私たちの秩序が整っていて、オリエン

トは整っていない、無秩序になってしまう。しかしロマン主義になるとヨーロッパ人でも、その無秩序の評価が高くなったのですよ。ですからその時にやはりオリエントの見方が全然変わりました。と私は考えます。如何でしょうか。

鳥越：日高先生、いかがですか。

日高：今日のご発表を聴いたなかで、先生はヨーロッパの人が日本を見た場合を二つに分けられました。宣教師の見た日本と、それから商人その他の人が見た日本と、二つに分けられた。そういうふうに分けて見るのがやはり正しいと思って、お聴きしていたのです。というのは、これもオリエンタリズムにかかわるわけですが、サイドの概念でいえば西洋中心主義ですから、そこから見た東洋ということになるわけです。その際、西洋中心主義の主役といえますか、歴史のなかで西洋中心主義というのをもたらしたのは誰かという、まずは宣教師ですよ。つまり、宣教師という存在は、いってみれば優れた真理、高い精神性というものを持っていて、それを世界に普及しようというわけですね。だから基本的に、彼らの存在自体が優位性を帯びているのです。しかも、宣教師というのは、あらゆる犠牲を厭わないという気高さがあると同時に、それを相手の国の人々、たとえば日本人が彼らの精神を受け入れるか、受け入れないかということはまったく問題にならないのです。それは何故かという、「私たちが真理だから」なのです。だから、そこに異なった民族がいて、異なった文化の伝統があるなんていうことは、まあ無視してもいいのです。これが西洋中心主義を支えた最初の集団としての宣教師でしょう。それとは別にして、先生が「商人」による発見を言いましたが、この分け方も正しいと思います。宣教師のあとは植民地帝国主義になるわけで、つまり資本・市場という問題です。ヨーロッパは、その二つにわたって、西洋中心主義を東洋にもたらしたと思うのです。

鳥越：トッリーニ先生、いかがです？

トッリーニ：ええ、そうですね、賛成します、とても悲劇的なお考えですけども。もう一つそれに関連して言える事は、要するに宣教師は、聖書を布教するための活動をやっていたのです。です

から、人がキリシタンになったら、それは成功だという、その観点から日本人の文化を見たわけですよ。たとえば私は2年前に、西洋人から見た仏教を調べた事があるのですけれども、もちろん宣教師の立場としては、仏教は悪魔の宗教でした。儒教も神道もある程度そうですけども、特に仏教は敵だと思っていました。何故かという、彼らはまずキリシタンで、キリスト教を布教するためですので、仏教は邪魔になるのです。それから宣教師は、これは日高先生にやはり賛成するのですけれども、真理を持ってみなに真理を教える、と信じていました。だからその当時のヨーロッパ人は、自分が真理を持っている、自分が正しいと、他の民族は正しくないと。そういう見方になると、上と下の関係もすぐ作れるのですね。だからヨーロッパ人は真理を持っていて、上の立場になるのですね、だからその立場から下に、真理を教えていた。下は日本で、レベルが低い、となるのですね。文化を評価していても、やはり何というか、真理を持っていないから。無秩序といえば、真理というのは秩序なのですね。秩序が真理です。無秩序は、「混沌」ということですね。やはり無秩序は、はっきりいえば日本人の事ですね。

鳥越：日高先生。

日高：宗教の話で一つ付け加えておきますが、宗教の問題というのは、日本人にとってもなかなか厄介な問題です。例を一つ申しあげますが、これはすでに指摘されていることでもあります（酒井直樹『日本／映像／米国』青土社）、日本の戦後の映画で「ビルマの豎琴」というのがあります。市川崑監督の映画です。これはヴェネツィア映画祭のイタリアカトリック教会賞というのを受賞しています。ヴェネツィア映画祭で日本の映画が受賞したのは「羅生門」が有名ですが、それに次いで、この作品が大きく評価されたのです。では、この映画がどうしてイタリアカトリック教会賞を得たかということを考えるということになります。これはイギリスと日本の両方、多くはイギリス人ですけども、捕虜として使われていた兵士たちが亡くなったときにお墓を作る、そうして水島という男がビルマに残って彼らの供養をするという話ですね。その背景にある思想というのは、

日本人にとっては人間が最後に骨になったら、敵も味方もなく敬わなければならないという考えです。それが世界の共感を呼んだということなのです。それが国家・国民を超えた宗教の精神とつながる、というわけですね。そこで何が問題かというと、そうした共感のウラ側では日本がビルマを占領したという問題がみえなくなってしまうということなのです。この映画に対して反撃したのが、イギリスの映画「戦場にかける橋」ですね。この映画は、同じくビルマを扱っているわけですが、いかにイギリス軍が勇敢に、しかも日本人の虐待にもめげずに戦ったかということを表しています。イギリスでは、クリスマスのときに、必ず家庭で見る映画だといいますね。自分たちの民族の気高さというものを、年に一度はこの映画を見て確認するというのです。だからこの「戦場にかける橋」も、自分たちがビルマを占領したことは描いてないのです。オリエンタリズムという問題は、そうした問題を双方向的に考えないといけませんね。市川崑監督にしても、同じアジア人というより、むしろ日本人としてとらえているから、仏教に仮託した精神性が際立っています。そういうところが、やはり問題ですね。ヴェネツィアからの連想で、この映画のことを思い出したので、ちょっとつけ加えておきたいと思います。

鳥越：どうですか、伊坂先生。

伊坂：オリエンタリズムというのは、確かに支配する側からの一つのイデオロギーみたいなところがありますね。それはヨーロッパ発の一つのイデオロギーだという理解をすれば、啓蒙主義の理性万能の考え方が背景にあります。ヨーロッパの理性でもって無知蒙昧な諸民族の文化を啓蒙し、光を当てて闇の部分明るく照らし出すというのが啓蒙主義の理念ですから。そういった意味で、東方オリエンは理性の力によって啓蒙されなければいけないという、一つの支配－被支配の関係というのがあると思うのです。しかしヨーロッパ文化のある意味の強さというのは、自らのそういったイデオロギーのなかに、それに反するもの、光に対しては闇の部分ヨーロッパ文化そのものが自覚できるということにあります。その強さというのは、理性的認識というものが闇という

ものにも目を向ける可能性を持っているということです。だからロマン主義の運動も、ヨーロッパ文化そのもののなかから生まれてくるわけですね。例えばドイツ・ロマン主義の代表者フリードリヒ・シュレーゲルなどは、もともとヨーロッパのギリシャ・ローマの古典研究から入って、それに対するアンチテーゼとしてロマンティッシュという概念を引きだしてくるわけで、そういう点でヨーロッパ文化の持っている強さというものには感心せざるをえないという気がします。

鳥越：カーロリ先生、はい。

カーロリ：今まで私は考えた事がないのですけれども、みなさんがおっしゃった事を聴きながら、オリエンタリズムの概念というのは、時代によっても特徴が変わるかと、ちょっと考えていましたのですけれども。例えば、トッリーニさんとか、伊坂先生がおっしゃった日本の16、17世紀のオリエンタリズム、たぶん、このオリエンタリズムの特徴は異なった文化のあるところで表れた。そして近代化時代になってからは、あるいは資本主義社会が発展していたときには、発展していないところで表れたという特徴があったかもしれないです。そして今のローカル世界で、たぶん、オリエンタリズムというのは未開発なところかな、たとえば日本だったら、日本のオリエンタは沖縄ですね。ですから沖縄は、なんというか、単純な精神を守っているところになったのですね、最近、この沖縄文化はですね。ですから、オリエンタリズムも、立場によってももちろん変わりますけれども、時代によって変わるのかと。

鳥越：もう少し、いいですか？ たぶん聴衆の方も質問を抱えていらっしゃる。むずむずしているかたもあるかなと。もしご質問おありでしたら、今の流れでなくても結構です。はい。

客席A：大阪大学の伊川といいます。場合によっては質問の時間がなくなってしまうのではないかと感じていましたけれども、本当はこういう場所です。全員の報告者にかかわる大きい質問を考えてはいたのですけれども、それをしてしまうと五時までかかってしまいそうなので、まあ、小さい質問だけ一つ。トッリーニ先生のところでお願いしたいと思います。僕もどうしても、16世紀、

17世紀の歴史をやっていますので、なんといいですか、そういう意味で非常に興味深く聴かせて頂きました。この分類自体については、ちょっと、論じていると長くなってしまうのでしませんけれども、一つだけですね、ハンドアウトの2ページに、ジョバンニ・ピエトロ・マッフェイについての記述があると思います。彼が非常に髪型について詳しく論じていたと思うのですけれども、日本に来ていないですね、彼は。他に僕はあんまりこういう記述を見た事がないのですけれども、他に日本人の髪型について書いているような人がいるのか、あるいはそうでなければ、彼がですね、どこから情報を得たのかという点についてですね、本当はもう一つ皆さんにですね、時代ごとの日本観の変遷みたいな事をお聞きしたいと思ったのですけれど、ちょっとそれは時間の都合で割愛したほうがいいかと思いますので、それだけお願いします。

トリーニ：そうですね、私の発表のなかで「以上の資料を使ってヨーロッパで流された情報」という項目がありますね、そこにピエトロ・マッフェイも入っているのですけれども。という事は、実際に日本人に接したのは宣教師と商人、日本に行った宣教師と商人だけです。彼らは報告だとか書簡だとか本を書いて、その資料は全部ヨーロッパ、だいたいイタリアに送りました。ヴァティカンだとか、ヴェネツィアもそうです。ヴェネツィアではその当時は十冊、二十冊とかそれが出たので。とにかくイタリアに入ってきて、マッフェイさんみたいな人はそれを調べて、読んで、それに基づいて書いた。日本の描写をしたわけですが、実際に見ていないのですけれども。宣教師が、主に宣教師が書いたものに基づいて本を書いたわけですよ。私はこの前に、別の機会で調べたのですけれども、だいたい17世紀に日本の描写を書いた人は日本に行っていない。書いたものを調べると、全部宣教師が書いたものにさかのぼれます。ですけれども、ときどき面白くするために、その宣教師が書いた情報を少し珍しくする、ちょっと大げさにする。そのたくさんの情報のなかで一番珍しいところだけを切り取って、それを書いたのです。何故かという、やはりヨーロッ

パ人から興味を持たれる部分だけを見せたいという事ですね。その書いた本をみんなに読ませたいから。そういうつもりですから、やはり実際に日本国の友人でないかたの本は、やはりかなり偏っています。それもオリエンタリズムの一つだと思うのですけれども。というわけで、やはり日本は、日本の文化は私たちの文化とは違う、珍しい、たいへん不思議だという事が、かなり目立っています。

鳥越：よろしいですか、はい。もうおひとかた、はい。

客席B：すいません、学生さんでもいいですよ。すいません、国際文化交流学科の深澤といいます。今日のお話、非常に面白く聴かせて頂いて。ただ、午後から来ましたので午前のお話を聴いていなくて非常に失礼なのですけれど。今日いろいろお話を聴いていて、発言がですね、そのレベルが違うんですね、そうだと思います。発言がベタな発言のかたとですね、それからそこにある種のアイロニーが込められている発言があって、そのベタな発言とアイロニーのある発言というのがうまく切り結んでいないという印象を受けました。

話はずれますが、昨日ちょっとたまたま授業がなかったので映画を見てきました。『空気人形』という映画です、御存知でしょうか。『空気人間』だったかな。もしよろしかったらぜひ見て下さい。えぐいです、グロです。これ要するにラブドールのお話です。要するにラブドールは物ですね。その物に対して人間たちがですね、勝手な意味づけをする、勝手な欲望を抱く、そういったその人間の勝手さ、まさに表象の恣意性ですね、これを物の側からこう逆に捉えて、ラブドールがやがて心を持ってしまって、ラブドールから見た、人間のこの愚かしさ、醜さ、えげつなさ、みたいなものをとことん描いている映画です。ぜひ見て頂きたいです。

それでですね、これは要するになにかというと、もう問題のレベルがですね、例えばここでは表象としては日本という形で、日本をマスでくくっていますよね、しかし日本にも多様な日本があるわけですね。階級的にもこれだけなにか違

う。あるいは地域的にも違う。あるいは職業においても違うわけですね。そういうところをマスで捉える事自体が、もうすでに問題だと。これはまあ司会者のかたが最初にオリエンタリズムを出してきてしまったのでそこへいってしまったのだけれど。もう、そうではなくていわば「他者」ですよ。私たち個々人が他者をどう表象するかという、その表象を恣意性で見たときにもっとスライドさせていくべきではないか。ここでヨーロッパと東洋とかですね、日本とイタリアと比べているもう水掛論になってしまうような気がしました。

そういうような感想なのですが、そういう発言のなかで、ある発言者の方は、ベタな発言をされるわけですね、それに対して、ある発言者の方は、アイロニーを効かせてですね、あのメタレベルからの発言をされるわけですよ。実はこのアイロニーという概念は、ドイツロマン派から出てくる。先ほどの伊坂先生はですね、まあロマン派の、いわばオリエンタリズムの一つの、なんというか、ファクターとしてあるんだという事をおっしゃっているのだけれども、ロマン派にはアイロニーがあるんですね、その辺のアイロニーというものをですね、ヨーロッパにおけるアイロニー、それをどういった形で例えば表象としての日本とか、あるいは東洋幻想とかですね、まあオリエンタリズムの問題と絡めてもいい、結構ですけど。ちょっと補足的にお考えをお聞かせ頂きたいなと思います。多分アイロニーがあるかないか、ここは非常に重要ではないかと思います。

鳥越：今、どなたに。

客席B：伊坂先生。

伊坂：アイロニー、アイロニーですけども、これはロマン派のなかでもフリードリヒ・シュレーゲルがもっぱら展開した議論です。そのシュレーゲルのアイロニー論をどういうふうに理解するか、それを簡単に言ってしまうと、アイロニー的でなくて、ただのベタな話になりますので、難しいのですけれども。アイロニーについてシュレーゲルが象徴的に言っている言葉で、「自己創造と自己破壊の交替」という言葉があります。そのフリードリヒ・シュレーゲルが言っている自己創造というのは、それまでの古典的な概念で言えば、まさ

に理性的な創造ということになりますが、ところがその自己創造のなかに実は自己破壊、つまり自らを破壊するカオスの力を秘めているということです。アイロニーとは自己創造と自己破壊、いかなれば光と影、その両方を合わせもった概念ですよ。ということは、そのシュレーゲルのアイロニーという概念のなかに、自分たちが作って来たヨーロッパ文化そのもののなかに、理性の創造性とその自己破壊的な力の両面が実は隠されているということです。ヨーロッパ文明そのものが、自己破壊的であることで創造的でもあるのだと、そういうような意味でもあると思うのですよね。これもまたベタな発言になってしまいましたが。

鳥越：どうですか、もうひとりご質問は。ご質問のある方はいらっしゃいますか。はい。

客席C：短く。宣教師の事のお話を聴いてちょっと私も考えてみたのですけれども、確におっしゃられたように、日高先生でいらっしゃいましたか、おっしゃられたようにですね、優位に立って宣教して、真理を持つ者としてのやはり強さを持っていた事は確かだと思いますし、その宣教をする対象の人たちに対する優越感情というのが確かにあった事は否定出来ませんが、その宣教が、例えば日本なら日本の政治、国家権力と、ちょっと言い方は悪いですがごっちゃといえますか、その現地の文化には関心がないみたいな事をちょっとおっしゃられたように思いました。そううかがいでしたが、実際はですね、その宣教師たちはどこにまいりまして、いかにですね、戦略的な意味で、現地の文化、種族をどのようにしてまず引き寄せながら最終的には目的、宣教の目的を達するかという事をやはりものすごく戦略を練ってやってきてですね、現地入りするとですね、現地の種族のなかにですね、溶け込むふりをするといえますか、溶け込んで、やはり現地人を心から愛するためにやったわけなのだと思うのです。それはいろいろな面で、まあ例えば着物を着た聖人、例えば着物を着たマリア像であるとかですね、まあそれは簡単な例なんですけれども。やはり土着の種族の思考、またはですね、土着の、大きくいえば文化をいかに活用するかという意味では、やはり土着の文化を無視したというわけでは

なくて、非常に詳しく関心を持って研究してですね、それで出来ればその利用、こちらに引き寄せてやはり宣教しなければならなかったというふうに、実際にやったように思うのですね。そうなりますとその優越感的なのは私も否定出来ないんですが、やはりそのようにして自分を引き寄せて、自分もこちらのほうに近づいてきながら宣教した場合に、やはり必ずしもですね、劣位の文化を無視しながら上から教えを説くわけにはいかなかった。土地を横断するときにはやはりこう異文化との接触においてですね、優越関係というのはどこかですね、やはり崩れていくといいますか、ある程度溶けていくような側面もあるという事思うのですね。その辺については、いかがなのでしょう。

鳥越：ちょっと日高先生、よろしいですか。

日高：先生のおっしゃったこと、よくわかります。そのとおりだと思うのですが、そうして優越感を持っていたとしても、それぞれの場所でなんらかの変更、変容、変貌というようなものが起こる。ですから、宣教師の人たちがそのまま何かを押しつけたというふうに単純化するの、間違いですね。そこは大事なところで、有体にいえば違った国のものを違った国のところに持っていった場合に、それがどうなるのかという問題としてあるわけですね。今日の私の話に関連して、また例をあげますと、たとえばドイツのブレヒトの演劇をフランスのパリで上演した場合に、いかに変わるかということですね。「肝っ玉お母」でも、フランスでは母の輪郭がだんだん母性的になっていったといいますね。さらに、それを受け入れるときの問題の一つは言語ですね。異なった言語テキストを正しく解釈するには、やはり原語で受け入れざるを得ないという問題も出てくる。それだけでなく、その国にはその国の演劇の伝統というものがありますから、やはり変わってしまう、あるいは変えられてしまう。それで本場ベルリンの劇団がパリにやってきたとき、これぞ本当のドイツの演劇だという評価になったのですが、それじゃあフランス人はブレヒトの演劇をフランス語でやるのが出来ないのか、というとそんなバカなことはいし、それでは文化の交流ということ

も、影響ということもないわけです。文化が国境を越えたとき、どういうことが起こるかということをしっかり考えませんとね、それを今の言葉で文化の多元主義などといっても、何の問題にもならないと私は思うのです。

客席C：私もそこは同感です。

鳥越：えーと、まだご質問もありませんかと思いますが、ぼつぼつ予定をした時間を、ちょっと過ぎてしまうぐらいになりました。まず、今日お話を下さいました先生方に、ここで御礼を申し上げたいと思います。カーロリ先生、トッリーニ先生、伊坂先生、日高先生、本当に有り難うございました。ほとんどの聴衆の方が朝から最後までお聴き下さった様子でありまして、まあたいへん刺激的な、いろいろな、特に学生さんにとってはこれからあと2、3年考え続ける良い材料が出来たのではないかと思います。そういう意味で、最初に申し上げたように、朝から来た人は非常に祝福されるであろうということでもあります。プログラムでは最後に何か私が挨拶する事になっておりますが、何もありません。閉会宣言だけをして、本当によく話を聴いて下さいまして有り難うございました。感謝申し上げます。気をつけてお帰り下さい。有り難うございました。

〈書評〉

日高昭二編 お茶の水書房

『表象としての日本——移動と越境の文化学』

島村 輝（フェリス女学院大学）

21世紀に入ってはや10年目に差し掛かった今日、前世紀を特徴づけた「戦争」と「革命」の歴史の底流にあったものがなんだったのかを問いなおす、新たな立脚点が生み出されつつあるような状況が生まれている。そうした中で、アメリカを中心においた「グローバリゼーション」への反省もあり、「地域」や「交通」の問題は、文化の面においてもとりわけ重要なテーマとなってきたといえよう。

本書はそうした状況の中で、ほかならぬ「日本」という表象を取り上げ、言語と歴史という、隣接する文化の側面から、その意味を検討しようとする、意欲的な試みの成果である。「移動と越境の文化学」という副題は、単にこれが「日本」として表象される地域からの超出という問題に関わるというばかりでなく、それを取り扱う方法上の面においても、専門分野やジャンルの境界を越えて、斬新な視点を見出すというところにあると理解することができる。

それにしても、編者による「はじめに」にも記されているように、こうした時代にあって「日本」というような地域「表象」を取り上げて検討するということは、それ自体として方法的に非常に冒険的な問題をはらんでいるといわなければならない。ひとたび「日本」という言葉を用い、その内容について語ろうとすれば、そこで用いられている「日本」という言葉の内容を充填しつつ、しかもそこで語られている「日本」を「表象」として相対化し、解体する作業を伴わざるを得ないからである。この困難な作業のために、本書では「日本」の文化や伝統を自明なものとする思考をいったん解き放ち、文化表象としての「日本」の歴史

的な文脈を掘り起こすところから始め」る、と語られる必要があったと思われる。対象としては「古代日本語における異国・異域の表象」の考察（第7章 前田禎彦）から、1960～70年代にかけてのイギリス人作家、アンジェラ・カーターの滞日経験を扱った「私を他者化する鏡」（第6章 村井まや子）まで、年代としては1941年生まれから1970年生まれまで、専門領域も世代も異なる研究者たちによって取り組まれたこの作業は、「表象」という問題系のもとに「ゆるやかなコンセプトを共有し」つつ「各自がそれぞれの手つきで対象についての思考を重ねる」という、まさに「思考しつつ解体する」必要に見合った手続きでまとめられたものといえるだろう。

本書の第I部は「越境する言語空間」と題され、主に言語表象の面からとらえられた「日本」について考察された論文が収められている。そこでは生き物としての「ヘイケガニ」が、日本文化に接した外国人たちにどのようにして「日本」を表象する「平家蟹」として位置づけられることになったか（第1章 鈴木彰）、あるいは、「忠臣蔵」というストーリーが外国人たちに紹介され、翻訳、翻案されていく過程で、たとえば「忠義」という概念がどのように理解され、表現されたか、それがまた日本に逆輸入されて受容されるにあたりどのような違和感を生み出したのか（第2章 日高昭二）といった、個別具体的な「表象」の分析が示される。

この第I部では、開国を機に新たに見出された文化的な場所（トポス）としての「日本」と、そこでの「女性」表象に考察を加えた「（蝶々夫人）物語とキリスト教」（第4章 鳥越輝昭）、さらに

多くの外国人表現者たちによって表象化された「日本女性」像の相対化を試みようとしたヨネ・ノグチの作を取り上げた「『マダム』バタフライをこえる試み」(第5章 山口ヨシ子)の2論文が、本書の複眼的な方法を典型的に示していて興味深い。前者ではピエール・ロティの小説『お菊さん』からジョン・ルーサー・ロングの小説『蝶々夫人』、ディヴィッド・ベラスコの戯曲化による『お蝶夫人』、プッチーニのオペラ『蝶々夫人』までを通時的に追い、そこにある変質の過程に「キリスト教圏でのわかりやすさ」という要素がはたらいたことを明らかにしている。一方後者は、そうした受容における、ある部分でステレオタイプ化した「日本女性」像に対しての反発としての『アメリカ日記』を分析する。この両考察を対照してみると、結局のところ異質な文化に受容され、そこで表象される「日本」なるものは、それを受け入れる側の文化の枠組みによって作り上げられていくものであることが改めて実感される。そして実は「日本」人にとっても、近代「日本」国家成立にあたっては同様の事態が起こっていたのではないかということが、新聞「日本」の第1号を読み解くことによって示唆されてもいるのではないだろうか(第3章 復本一郎)。

第Ⅱ部は「生成される歴史の場」というタイトルのもとに、4本の論文が収められている。17世紀末に日本を訪れたドイツ人・ケンペルの遺稿をもとに没後編纂・出版された『日本の歴史と記述』(1777~79年)がヨーロッパ思想界に与えた影響、とりわけカントの「永遠の平和のために」(1795年)への影響を論じた「ケンペル『日本誌』のインパクト」(第8章 井坂青司)、20世紀の日本と歩みをともにした英国人、ジョージ・サンソムの足跡を分析・紹介した「ジョージ・サンソムと日本」(第9章 岡嶋千幸)は、ともに歴史の中に埋もれがちな外国の日本への眼差しを、くっきりと際立たせてくれる。鎖国下にあっても、また明治維新後の「近代化」の過程にあっても、「日本」が常に「世界」との関係で表象されていたことが理解されるのである。最終章、幕末に欧米を興行した「広八一座」についてのモノグラフ(第10章 鈴木修一)は、「世界」に乗り出した「日

本」人の記録として、本書の掉尾から本書全体を逆照射する、興味深い読み物となっている。今後ともさらに分野を多様化して、このような試みが続けられることを期待したい。

『世界の色の記号に関する実証的研究—自然・言語・文化の諸相—』

人間科学部 三星宗雄

1. 概要

今年度（前年度活動報告書発行以降）は4名のメンバーが海外に出かけ調査研究を行った（2010年1月16日現在）。講演会を1回，研究会を2回開催した。また印刷中および投稿中のものを含めて11本の論文が公表された。学会発表を2回行った（受付済のものを含めると3回）。今後3月末日までにさらに4人のメンバーが国内・海外において調査研究を行う予定である。

2. 講演会

- ・2009年7月24日（金）15:00—17:00
- ・17-215室
- ・講演者 吉村耕治（関西外国語大学短期大学部教授）
- ・演題 日英語の色彩表現研究の楽しみ—300名の色名アンケート調査分析結果とともに—

3. 研究会

(1) 第1回

- ・2009年10月2日（金）15:00—17:00
- ・17-215室
- ・報告者
 - ・三星宗雄（神奈川大学人間科学部）
「中国福建沿岸部の色彩と景観」
 - ・畑田明信（神奈川大学人間科学部非常勤務師）
「パリの景観についての報告と最近の研究結果」
 - ・車貞玖（日本大学人文科学研究所研究員）
「韓国と日本における色彩選好と思考ス

タイルの比較」

(2) 第2回

- ・2009年11月27日（金）15:00—18:00
- ・17—215室
- ・報告者
 - ・三星宗雄（神奈川大学人間科学部）
「市民から見た沖縄の色—那覇市民からの聞き取り調査—」
 - ・車貞玖（神奈川大学人文学研究所客員研究員）
「韓国と日本における色彩イメージの比較」
 - ・尹亨仁（神奈川大学外国語学部国際文化交流学科）
「日韓両言語における色彩語の特徴—辞書の見出し語の分析を中心に—」

4. 研究論文

- (1) 車貞玖 차정민・요코다 마사오・미쯔보시 무네오 (2009). 색채선호와 사고스타일의 관련성에 관한 연구 - 한국인, 일본인, 일본체재한국인을 대상으로 -. 한국색채학회논문집 제23권4호. p.51-60. (車貞玖・横田正夫・三星宗雄 (2009) 色彩選好と思考スタイルの関連性に関する研究—韓国人, 日本人, 日本滞在韓国人を対象に一, 韓国色彩学会論文集, 第23巻4号, p.51-60)
- (2) 三星宗雄 (2009) 風景の理解, 神奈川大学人文研究 168, 1-28.
- (3) 畑田明信 (2010) 色見本とデジタルスチルカメラを用いた色言葉が指す色範囲の測定手法の開発, 神奈川大学人文研究 169, 147-164.

- (4) 三星宗雄 (2010) 中国福建沿岸部の色彩と景観, 神奈川大学人文研究 169,1-21.
- (5) 三星宗雄 (2010) ロンドンの色彩, 神奈川大学人文研究 170,1-21.
- (6) 三星宗雄・畑田明信・矢野博 (2010) イメージ上で飛来するバレーボールの回転方向の認知—反応時間による3種類のボールの評価—, 神奈川大学人間科学研究年報 4,5-16.
- (7) 車貞玖・横田正夫・三星宗雄 (2010) 韓国人, 日本人, および日本居住韓国人を対象とした色彩選好と思考スタイルの関連性, 神奈川大学人文学研究所報 43. (印刷中)
- (8) 三星宗雄 (2010) 一般市民から見た沖縄の色—那覇市および近郊における聞き取り調査, 神奈川大学人文学研究所報 43. (印刷中)
- (9) 畑田明信 (2010) 色見本を用いた色言葉が指す色範囲の測定についての研究, 神奈川大学人文学研究所報 43. (印刷中)
- (10) 車貞玖・三星宗雄 한국과 일본에 있어서 색채이미지 비교연구 - 언어로부터 연상되는 색채를 중심으로 -. 한국색채학회논문집 제 24 권 1 호 (投稿中).
- (11) 車貞玖・三星宗雄 (投稿中). 韓国と日本における色彩イメージの比較研究—言語から連想される色彩を中心に—. 韓国色彩学会論文集 第 24 卷 1 号.

5. 学会発表

- (1) 矢野博・三星宗雄・畑田明信 (2009) 「イメージ上で飛来するバレーボールの回転方向の認知 (1) —反応時間における公認ボールの差—」, 第 60 回日本体育学会, 広島大学.
- (2) 三星宗雄・矢野博・畑田明信 (2009) 「イメージ上で飛来するバレーボールの視覚心理学的実験手法の開発—ボールの回転方向の認知における反応時間測定ソフト—」, 第 60 回日本体育学会, 広島大学.
- (3) 車貞玖・三星宗雄 (2010 発表予定) 「韓国と日本における色彩イメージの比較研究—色彩語の色域を中心に—」, 日本色彩学会第 41 回全国大会発表, 名古屋大学.

6. 海外出張報告

(1) 車貞玖

- ・出張期間 2009 年 3 月 20 日～30 日
- ・出張場所 韓国のソウル (保険, コンピューターの部品製造, 貿易, 携帯電話製造, デザイン, 法務, 税務, 不動産関連の会社)
- ・調査の概要 直接訪問, または調査先の代表者へ依頼して行った。ソウル市に居住する社会人 71 名 (男 34 名, 女 37 名, 平均年齢 38.0 歳 [$SD = 4.2$], 30 代:43 名, 40 代:26 名, 50 代:2 名) が参加した。(この調査結果については, 上記研究論文 (1), (7), (10), (11) として公表されている, またはその予定である)

(2) 三星宗雄

- ・出張期間 2009 年 2 月 27 日～3 月 2 日
- ・出張場所 中国福建省廈門を中心とする沿岸部^{*)}
- ・概要:

中国福建省における色彩および景観の調査を行った動機は沖縄 (琉球) との歴史的なつながりにある。当時の琉球王国は大陸 (明, 清) との進貢貿易を通して交易活動を行っていたが, その大陸側の窓口が福建であった。その省都福州が中心地であったが, 残念ながらさまざまな理由から福州までは足を伸ばせず廈門近辺に止まった。

自然景観としては, 沖縄にはありふれている桜と松が見られなかったことが目を引いた。沖縄寒緋桜はソメイヨシノに代表される本土の桜に比べてはるかに鮮やかな色をしているが, 台湾の桜もまたそれに近いという。台湾の対岸に位置する福建にもそれと同じ桜を期待したが, 筆者の目が届く限りほとんど見当たらなかった。

沖縄ではあまりお目にかかれない植栽としてバナナ, 竹と茶があった。よく考えてみると福建は言わずと知れたウーロン茶に代表される茶の一大産地であった。また竹が足場として使われている建設現場も見られた。低地ではバナナが, 標高が高くなるにつれて竹, 茶という順に風景が変わった。

一方沖縄と共通する植栽としてガジュマル (中

国語で榕樹)があった。市内に多くの大木が見られることから福州市は榕城と呼ばれる。廈門市内にも多く見られ、沖縄の都市の雰囲気を感じた。

街並みの色彩という点では、中国においては赤と黄が圧倒的に好まれる色であることは良く知られているが、福建でもやはり赤および黄(金)の色が他の色を圧倒していた。このようなところに、というような場所にも赤色が使われており、その風景はわが国の本土はもちろん、沖縄とも一線を画していた。

それとは対照的に空港内の表示板には鮮やかな青色が用いられており、大変すっきりとした印象であった。公安関係の建物(交番等)にも同じ青色が統一して用いられていることからすると、何らかのレギュレーションに関連した色かも知れない。

* 詳細は三星宗雄(2010)中国福建沿岸部における色彩と景観, 神奈川大学人文研究 169, 1-21, を参照のこと(研究論文(4))。

(3) 畑田明信

- ・出張期間 2009年6月20日~2009年6月27日
- ・出張先: フランス/パリ
- ・出張目的: ヨーロッパ主要都市の景観の観察および視察
- ・活動内容:

上記期間において、フランス・パリに出張を行い、都市景観の視察と写真撮影などを行った。今回、特に視察を行ったのは、凱旋門から続くサンジェルジュ大通りから、コンコルド広場、エッ

フェル塔に至る地域であり、多くの人々が思い描く代表的なパリの景観を納めることができたものと思われる。

本活動の内容については、別途開催された報告会にて報告を行った。本活動において収集された写真などは、希望する共同研究者に提供を行った。

また、本活動において収集した写真画像などは、今後の都市景観の研究などにおいて活用される予定である。

・研究活動における本活動の意義:

フランスの都市においては、1700年代くらいに建設された建造物などが現在でも利用されていることが珍しくなく、近年になって建設された建造物なども、それらの伝統的建造物と調和するようにデザインされていることが少なくない。勿論、近代的あるいはモダンなデザインの建造物も存在はするものの、都市景観そのもののありようが都市や国によって異なることは興味深い。

今後の研究においては、各都市ごとの景観の特徴を評価するための基礎データとして今回の活動において収集された画像データを活用する予定である。

7. 論文の内容の訂正(三星宗雄)

上の論文(4)(三星宗雄(2010)中国福建沿岸部の色彩と景観, 神奈川大学人文研究 169, 1-21)の中で、以前わが国の桜の原産地がチベットだという文献を見たが、その文献が見当たらないと書いたが、今回原種はヒマラヤとの情報を得た(2009年12月5日付読売新聞)。チ



写真1 ヒマラヤザクラ(横浜市青葉区藤が丘, 2009年12月6日撮影)



写真2 同 花びら

ベットはヒマラヤときわめて近い地理関係にあるが、おそらくわが国の桜の原産地はチベットではなく、ヒマラヤとすべきなのであろう。ここに記して訂正したい。

最近横浜市内でヒマラヤザクラが開花したという報道があり、見に行った(写真 1, 2)。この時期の開花は沖縄寒緋桜よりもかなり早い。花の色はソメイヨシノに近いすいピンクである。

8. 研究活動報告(外国語学部 尹 亨仁)

日韓両言語における色名の特徴

一辞書の見出し語の分析を中心に

尹 亨仁(外国語学部国際文化交流学科)

1. はじめに

韓国では1964年に日本工業規格(JIS)に倣って「標準色名」を決めた。そのため、日本の色名の影響を強く受けている。2005年に韓国の「産業資源部技術標準院」は今の時代を「高感性色彩の時代」と位置づけ、39年ぶりに標準色名133語の規格化を試みた。

本稿では、2005年に決まった標準色名133語の特徴およびその133語が韓国の国語辞典にどれくらい反映されているのかを調べ、浮き彫りになった問題点を辞書編纂者の観点から分析し、今後の辞書編纂の参考資料にしたい。

2. 韓国語の色名の特徴

2.1 韓国語および韓日辞典に見られる韓国語の色名

『デイリーコンサイス韓日辞典』(2009)および『東亜新国語辞典』(1989/2004)に見られた韓国語の色名は約111語である(〈表1〉韓国語の色名参照)。

2.1.1 日韓両言語に見られる色名

「褐色」「藍色」「淡黄色」「乳白色」などの漢語系の色名を始め、「栗色」「鼠色」「鉛色」「墨色」などのメタファーによる色名においても両言語は対応の様相を見せている。

2.1.2 韓国語にしか見られない色名

日韓両言語において多くの色名が対応している中で、対応していない、言い換えれば韓国特有の色名とも言える幾つかの語彙が見られた。以下のような色名である。

고동색(古銅色)〔赤褐色〕／미색(米色)〔米の色〕／바다색(-色)〔海の色〕／쑥색(-色)〔ヨモギの色〕／옥색(玉色)〔玉の色〕

2.1.3 標準色名は国語辞典に載っているのか

〈表3〉の「韓国の代表慣用色名(133語)」の一覧を見れば分かるように、133語の中で56語しか国語辞典に載っていない。規準とした『新国語辞典』は2003年に改訂されたものではあるが、「慣用色」という言葉が意味するものからだいぶ開きがあることが分かる。2005年に刊行された『訓民正音国語辞典』の場合も事情はさほど変わらない。『新国語辞典』は2,836ページ、『訓民正音国語辞典』は2,152ページになる中型版の辞書である。にもかかわらず両辞書には「慣用色」の半分も載っていない。『新国語辞典』に「慣用色」は載っていないが、「慣用語」が「일반 대중이 관습적으로 널리 쓰는 말(一般大衆が慣習的に広く使う言葉：訳は筆者)」と記述されていることから「慣用色」は「一般大衆が慣習的に広く使う色」と言えよう。一般大衆に広く認知されているから「慣用色」になったはずだが、国語辞典にはそれが反映されていない。実際韓国のドラマなどから「개나리색[連翹色]」「병아리색[雛色]」「겨자색[芥子色]」などをしばしば耳にする。

¹ 「스노 화이트[スノーホワイト]」→「흰눈색[白雪色]」

「오렌지색[オレンジ色]」→「주황색(朱黄色)」

「차콜 그레이[チャコールグレー]」→「목탄색(木炭色)」

「버프[バフ]」→「가죽색[革色]」に変更されたが、「オレンジ色」「朱黄色」以外は辞書に載っていない。

² 24色入りのクレヨンの場合、外来語由来の色名が1つも入っていない。日本の場合は「レモン色」が入っている。36色入りのクレヨン場合は「レモン色」が唯一外来語由来の色名として入っている。

特に「ラベンダー色」「ライラック色」「レモン色」など外来語由来の色名はほとんどが辞書に載っていない²。外来語由来の色名 39 語のうち、辞書に載っているのは「베이지 (beige) / 세피아 (sepia) / 에메랄드 그린 (emerald green) / 올리브색 (olive 色) / 카민 (carmine) / 카키색 (khaki 色)」の 6 語のみである。ちなみに、「ココア色」「ベビーピンク」「ストロベリー」など日本の慣用色名 105 語の中で外来語由来の色名は 33 語で、「マリーンブルー」を除く 32 語が『大辞林』(2005) に載っている。

3. 日本語の色名の特徴

3.1 日本語および日韓辞典に見られる日本語の色名

『デイリーコンサイス日韓辞典』(2009) および『大辞林』(2005) に見られる日本語の色名は約 159 語である (〈表 2〉日本語の色名参照)。

3.1.1 日韓両言語に見られる色名

韓日辞典と同様、「褐色」「藍色」「淡黄色」「乳白色」などの漢語系の色名を始め、「栗色」「鼠色」「鉛色」「墨色」などのメタファーによる色名においても両言語は対応の様相を見せている。しかし、日本語の場合韓国語にはない、言い換えれば説明を加えないと訳せない色名が数多く見られた。

3.1.2 日本語にしか見られない色名

第二節で取り上げた韓国語の色名とは違って、日本語の場合韓国語が対応しない色名が多く見られた。以下のような色名が挙げられる。

茜色／曙色／浅葱／亜麻色／鉛色／菖蒲／鶯色／蒲色／萱草色／桔梗色／狐色／桑色／紅梅色³／苔色／錆色／小麦色／江戸紫／古代紫／新橋色…

3.1.3 慣用色名は国語辞典に載っているのか

³ 韓国の 24 色入りのクレヨンにも 36 色入りのクレヨンにも「홍매색 (紅梅色)」が入っているが、これは韓国の国語辞典にも慣用色にも入っていない色である。日本の影響も考えられて、日本の 24 色入りのクレヨンを調べたが「紅梅色」は入っていなかった。

⁴ 韓国の慣用色に「남자색」の同義語である「남보라」が載っていて、クレヨン 36 色にも「남보라」が入っている。「남보라」の記述にも「桔梗色」を追加する必要がある。

三星 (2006 : 111) によれば、現在日本の慣用色名は 269 語であるが、本稿では盛田真千子・香川幸子 (1993) に取り上げられた 105 語を用いて分析を行なった。〈表 4〉を見れば分かるように、105 語のうち、『大辞林』に載っていないのは「マリーンブルー」の 1 語のみである。

4 辞書編纂者としての課題

4.1 韓国の標準慣用色を韓日辞典に載せる

従来、日本で刊行された韓日辞典は韓国で出版された韓国語辞典を母体として作られてきた。近年日本語母語話者がよく使う表現、見出し語の後に変則の種類やその活用形を載せるなど、日本語母語話者に配慮した個別の対応が見られるようになった。しかし、基本的には 3.2 で見たように韓国の国語辞典は新語の反映が遅い。特に外来語の場合はより遅い。これには安易に外国語を受け入れないという韓国の言語政策が関わっていると思われるが、そのため、韓日辞典は現段階での言語生活が十分に反映されていないのである。今後、韓日辞典は韓国の辞書に反映されていない新語も載せる必要がある。韓日辞典は韓国語辞典を参考にはするものの、頼りすぎてはいけなしと思われる。

4.2 日本の色名を日韓辞典に載せる

3.3 で見たように日本の色名は韓国のそれと一致しない場合がある。特に「小麦色」「鉛色」「鶯色」「桔梗色」などメタファーとして使われている色名の多くは日韓辞典には反映されていない。

例えば、「桔梗色」は『大辞林』の説明では「桔梗の花の色。藍色を帯びた紫色」になっている。この説明は別の色名に代えると「藍紫色」になる。『大辞林』で「藍紫色」は「藍色を帯びた紫色」になっている。韓国語に「桔梗色」はないが、「남자색 (藍紫色)」はある。しかし、『デイリーコンサイス韓日辞典』を始め、『民衆エッセンス韓日辞典』『ポケットプログレッシブ韓日・韓日辞典』

の「남자색（藍紫色）⁴」の項目を見ると、いずれも「藍紫色」しか載せていない。「鶯色」の場合、日韓辞典では「올리브색〔オリーブ色〕」に訳されていて、『デイリーコンサイス韓日辞典』では「올리브색」の項目に「鶯色；オリーブ色」と記述されているが、『民衆エッセンス韓日辞典』には「オリーブ色」だけである。『ポケットプログレッシブ韓日・日韓辞典』には「올리브색」という見出し語がない。

「小麦色」の場合、『デイリーコンサイス日韓辞典』では「연갈색（軟褐色）」、『小学館日韓辞典』では「薄い褐色」と記述されている。これらはいずれ「연갈색」のことになるが、『デイリーコンサイス韓日辞典』の「연갈색」には「薄い茶色」が、『民衆エッセンス韓日辞典』の「연갈색」には「薄い褐色」が対応していて『ポケットプログレッシブ韓日・日韓辞典』には「연갈색」という見出し語がない。

5. おわりに

ここまで、2005年に決まった韓国の標準色名133語の特徴およびその133語が韓国の国語辞典にどれくらい反映されているのかについて調べた。その結果、133語の中で56語ほどが国語辞典に載っていることが分かった。このような問題点をより細かく分析し、韓国の国語辞典の編集者に働きかけ、今後の韓日辞典の編纂にも参考にしたい。

【参考文献】

〈辞書類〉

- 金星出版社（2004）『訓民正音国語辞典』
李基文監修（1989/2004）『東亜新国語辞典』
斗山東亜
松村明編（2005）『大辞林』（第2版）三省堂
安田吉実・孫洛範共編（1983）『民衆エッセンス韓日辞典』民衆書林
油谷幸利他編（2004）『ポケットプログレッシブ韓日・日韓辞典』小学館
油谷幸利他編（2008）『小学館日韓辞典』小学館
尹亭仁編（2009）『デイリーコンサイス韓日辞典』三省堂
尹亭仁編（2009）『デイリーコンサイス日韓辞典』三省堂

〈図書類〉

- 李（이）은섭（2005）「‘색’과‘빛’계열 합성 명사의 형태 의미론적 고찰」『ソウル大学人文論叢』54:275-308 ソウル大学人文研究院
金仁和（2005）「韓国語の固有派生色彩語の意味」『筑波大学地域研究』25:35-50
三星宗雄（2006）『環境色彩学の基礎』マックローリン出版
盛田真千子・香川幸子「慣用色名の認識について（第3報）性差が与える影響（1993）『第24回日本色彩学会全国大会研究発表要旨』金沢美術工芸大学

〈表1〉韓国語の色名

番号	韓国語	韓国語漢字		日本語1	日本語2	備考
1	갈색	褐色	=	褐色	茶色	
2	검은색	- 色		黒；黒色		
3	고동색	古銅色		赤褐色		
4	구릿빛			あかがね色	赤銅色	
5	국방색	國防色	=	国防色		
6	군청색	群青色	=	群青色		
7	귤색	橘色		みかん色；橙色		

8	금색	金色	=	金色		
9	남색	藍色	=	藍色		
10	남자색	藍紫色	=	藍紫色 (らんししょく)		
11	남청	藍靑	=	藍靑色 (らんせいしょく)		
12	납빛			鉛色		
13	노란색	- 色		黃色		
14	노랑			黄；黃色		
15	녹갈색	綠褐色		枯草色	カーキ色	
16	녹색	綠色	=	緑；綠色		
17	녹황색	綠黃色	=	綠黃色		
18	다갈색	茶褐色	=	茶褐色		
19	다홍색	一紅色		真紅		
20	단색	丹色	=	丹色		
21	담갈색	淡褐色	=	淡褐色	薄茶色	
22	담녹색	淡綠色		淡緑		
23	담청색	淡靑色	?	淡靑色		
24	담홍색	淡紅色	=	淡紅色		
25	담황색	淡黃色	=	淡黃色		
26	도색	桃色	=	桃色	ピンク	
27	동색	銅色	=	銅色	あかがね色	
28	등색	橙色	=	橙色		
29	등황색	橙黃色	=	橙黃色 (とうこうしょく)	橙色	
30	먹빛			墨色		
31	미색	米色		(米の) 薄い黄色		
32	바다색	- 色		(海の) 青と青緑の中間の色		
33	밤색	- 色		栗色；こげ茶色		
34	백색	白色	=	白色		
35	베이지		=	ベージュ		
36	보라 (색)	- (色)		紫色		
37	복숭아빛			桃色	ピンク色	
38	분홍 (색)	粉紅 (色)		ピンク色	薄紅色	

39	붉은색	- 色		赤色		
40	비색	翡色		青磁色		
41	비취색	翡翠色		翡翠		
42	빨간색	- 色		赤		
43	빨강			赤	赤色	
44	산호빛	珊瑚 -		サンゴ色		
45	살색	- 色		肌色		
46	선홍색	鮮紅色	=	鮮紅色		
47	세피아	sepia	=	セピア	黒茶色	
48	순백 (색)	純白 (色)	=	純白		
49	쑥색	- 色		よもぎの色		
50	아이보리	ivory	=	アイボリー		
51	암갈색	暗褐色	=	暗褐色		
52	암녹색	暗緑色	=	暗緑色		
53	암자색	暗紫色	=	暗紫色 (あんししょく)		
54	암적색	暗赤色	=	暗赤色		
55	암회색	暗灰色		暗い灰色		
56	에메랄드그린	emerald green		エメラルドグリーン		
57	연갈색	軟褐色		薄い茶色		
58	연보라	軟 -		薄紫；藤色		
59	연분홍	軟粉紅		薄いピンク色	薄桃色	
60	옥색	玉色		玉 (ぎょく) の要に薄いグリーンがかかった色		
61	올리브색	- 色		鶯色	オリーブ色	
62	울금색	鬱金色	=	鬱金色		
63	유백색	乳白色	=	乳白色		
64	은백색	銀白色	=	銀白色		
65	은색	銀色	=	銀色		
66	은회색	銀灰色		銀色を帯びた灰色		
67	인디고	indigo		インディゴ		
68	장미색	薔薇色	=	薔薇色；淡紅色		
69	장밋빛	薔薇 -		薔薇色；淡紅色		
70	잿빛			灰色		

71	적갈색	赤褐色	=	赤褐色	赤黄色という日本語はない	
72	적동색	赤銅色	=	赤銅色		
73	적색	赤色	=	赤色		
74	적황색	赤黄色	=	赤黄色		
75	주홍 (색)	朱紅 (色)		朱色；緋色		
76	주황 (색)	朱黃 (色)		橙色		
77	쥐색	- 色	=	鼠色		
78	진보라	津 -		濃い紫色		
79	진분홍	津粉紅		濃いピンク		
80	진홍색	眞紅色		深紅；スカーレット		
81	철색	鐵色	=	鉄色		
82	청록	靑綠		靑綠		
83	청백색	靑白色		うっすらと青みがかった白色		
84	청색	靑色	=	靑色		
85	초록 (색)	草綠 (色)		草色；草葉色；綠		
86	치자색	梔子色	=	梔子色		
87	카키색	khaki 色	=	カーキ色		
88	코발트색	cobalt 色	=	コバルト色；コバルトブルー		
89	파란색	- 色		靑；靑色		
90	파랑			靑		
91	포도색	葡萄色	=	葡萄色		
92	푸른색	- 色		靑；靑色		
93	하늘색	- 色		空色		
94	하양			白		
95	호박색	琥珀色	=	琥珀色		
96	홍색	紅色	=	紅色		
97	황갈색	黃褐色	=	黃褐色（おうかつしょく）		
98	황금색	黃金色	=	黃金色		
99	황색	黃色	=	黃色		
100	황적색	黃赤色	=	黃赤色		
101	황토색	黃土色	=	黃土色		
102	회갈색	灰褐色	=	灰褐色（はいかくしょく）		

103	회백색	灰白色	?	灰白色		
104	회색	灰色	=	灰色；グレー		
105	회청색	灰青色		青みを帯びた灰色		
106	회흑색	灰黒色		灰黒色 ???		
107	흑갈색	黒褐色	=	黒褐色（こっかつしょく）		
108	흑색	黒色	=	黒；黒色		
109	흑자색	黒紫色	?	黒紫色		
110	흙색	- 色	=	土色		
111	흰색	- 色		白；白色		

『デイリーコンサイス韓日辞典』（2009）などから。

〈表2〉日本語の色名

番号		日本語	韓国語 1		韓国語 2	辞書 (韓国語)	慣用色	備考
1	あいいろ	藍色	남색 (藍色)					
2	あいぼりー	アイボリー	아이보리					
3	あお	青	파랑					
4	あおいろ	青色	파란색		청색 (青色)			
5	あおだけいろ	青竹色	대나무색			×	○	
6	あか	赤	빨강					
7	あかがねいろ	銅色	구릿빛					
8	あかねいろ	茜色		→		×	×	
9	あけぼのいろ	曙色		→				
10	あさぎ	浅葱		→		×	×	
11	あずきいろ	小豆色	팥색; 팥죽색					
12	あまいろ	亜麻色		→				
13	あめいろ	飴色		→		×	×	
14	あやめ	菖蒲		→		×	×	
15	あんかつしょく	暗褐色	암갈색 (暗褐色)					
16	あんこうしょく	暗紅色	검붉은 색					
17	あんずいろ	杏色	살구색			×	×	

18	あんりよくしょく	暗緑色	암녹색 (暗綠色)					
19	いえろー	イエロー	옐로					
20	いちごいろ	莓色	딸기색			×	○	
21	いんていごぶるー	インディゴブルー	인디고블루			×	○	
22	うぐいすいろ	鶯色		→	올리브색	×	×	
23	うこんいろ	鬱金色	울금색 (鬱金色)			○	×	
24	うすべに	薄紅	연분홍 (軟粉紅)					
25	うすみどり	薄緑	연초록 (軟草綠)					
26	えどむらさき	江戸紫		→		×	×	
27	えびちゃ	葡萄茶	암갈색 (暗褐色)					
28	えめらるどぐりーん	エメラルドグリーン	에메랄드그린			○	○	
29	えんじいろ	臙脂色	연지색 (脂色)					
30	おうかつしょく	黄褐色	황갈색 (黃褐色)					
31	おうどいろ	黄土色	황토색 (黃土色)					
32	おうりよくしょく	黄緑色	황록색 (黃綠色)			○		
33	おちばいろ	落ち葉色	낙엽색 (落葉色)			○		
34	おりーぶいろ	オリーブ色	올리브색					
35	おりーぶぐりーん	オリーブグリーン	올리브그린			×	○	
36	かーきいろ	カーキ色	카키색		국방색 (國防色)			
37	かいはくしょく	灰白色	회백색 (灰白色)			○		
38	かきいろ	柿色	감색					
39	かつしょく	褐色	갈색 (褐色)					
40	かなりあいろ	カナリア色	카나리아색			×	×	
41	かばいろ	蒲色・樺色		→				
42	からしいろ	芥子色	겨자색			×	○	
43	かわいろ	革色		→	가죽색?	×	×	
44	かんぞういろ	萱草色		→		×	×	
45	きいろ	黄色	노랑		노란색			

46	ききょういろ	桔梗色		→	남자색; 남보라	×	×	
47	きつねいろ	狐色		→		×	×	
48	きみどり	黄緑	황록색 (黃綠色)					
49	ぎんいろ	銀色	은색 (銀色)					
50	ぎんかいしょく	銀灰色	은회색 (銀灰色)			○		
51	ぎんはくしょく	銀白色	은백색 (銀白色)					
52	くさいろ	草色	풀색			○	○	
53	くりーむいろ	クリーム色	크림색			×	○	
54	くりいろ	栗色	밤색					
55	ぐりーん	グリーン	그린					
56	くるみいろ	胡桃色	호두색			×	○	
57	ぐれー	グレー	그레이					
58	くろ	黒	검정		검은색			
59	くわいろ	桑色		→		×	×	
60	ぐんじょういろ	群青色	군청색 (群青色)					
61	けいろ	毛色	털빛			○	×	
62	こうばいいろ	紅梅色		→		×		
63	こがねいろ	黄金色	황금색 (黄金色)					
64	こくしょく	黒色	흑색 (黑色)					
65	こくぼうしょく	国防色	국방색 (國防色)					
66	こけいろ	苔色		→				
67	こげちゃ	焦げ茶		→	암갈색 (暗褐色); 짙은 밤색			
68	ここあいろ	ココア色	코코아색			×	○	
69	こだいむらさき	古代紫		→		×	×	
70	こっかつしょく	黒褐色	흑갈색 (黑褐色)					
71	こはくい로	琥珀色	호박색 (琥珀色)			○	○	
72	こばるとぶるー	コバルトブルー	코발트색		군청색 (群青色)			
73	こむぎいろ	小麦色		→	연갈색 (軟褐色)			
74	こんじょう	紺青	감청 (紺靑)					

75	さーもんぴんく	サーモンピンク	새먼 핑크			×	○	
76	さくらいろ	桜色	벚꽃색			×	○	
77	さびいろ	錆色		→				
78	さんごいろ	珊瑚色	산호색		산호빛			
79	しゃくどういろ	赤銅色	적동색 (赤銅色)			○	×	
80	しゅいろ	朱色	주색 (朱色)					
81	しろ	白	하양		흰색			
82	しんじゅいろ	真珠色	진주색 (眞珠色)			×	○	
83	しんばしいろ	新橋色		→				
84	すかいぐれー	スカイグレー		→				
85	すないろ	砂色	모래색			×	○	
86	すの一ほわいと	スノーホワイト	흰눈색			×	○	
87	すみいろ	墨色	먹빛					
88	すみれいろ	堇色		→				
89	せいじいろ	青磁色	비색 (翡色)			○	×	
90	せっかつしょく	赤褐色	적갈색 (赤褐色)			○	○	
91	せぴあ	セ피아	세피아		암갈색 (暗褐色)			日本語 黒茶色
92	せんこうしょく	鮮紅色	선홍색 (鮮紅色)					
93	ぞうげいろ	象牙色	상아색 / 상앗빛			×	○	
94	そらいろ	空色	하늘색			○	○	
95	たいしゃいろ	代赫色		→		×	×	
96	だいだいいろ	橙色	주황색 (朱黃色)		등색 (橙色)			
97	たまごいろ	卵色	계란색 (鷄卵色)			×	○	
98	たんかつしょく	淡褐色	담갈색 (淡褐色)			○		
99	たんこうしょく	淡紅色	담홍색 (淡紅色)					
100	たんこうしょく	淡黄色	담황색 (淡黃色)					
101	たんししょく	淡紫色	담자색 (淡紫色)			○		
102	たんぽぽいろ	蒲公英色	민들레색			×	×	
103	ちゃいろ	茶色	갈색 (褐色)					

104	ちゃかっしょく	茶褐色	다갈색 (茶褐色)					
105	ちゃこーるぐれー	チャコール グレー	진한 회색 (灰色)		목탄색 (木炭 色)			
106	つちいろ	土色	흙색			○	×	
107	つつじいろ	躑躅色	철쭉색			×	×	
108	つゆくさいろ	露草色		→		×	×	
109	てついろ	鉄色	철색 (鐵色)			○	×	
110	とうこうしょく	橙黄色	등황색 (橙黄色)			○		
111	ときいろ	錫色		→		×	×	
112	とびいろ	鳶色		→		×	×	
113	なまりいろ	鉛色	납빛			○	×	
114	なんどいろ	納戸色				×	×	
115	にいろ	丹色	단색 (丹色)		붉은색			
116	にゅうはくしょく	乳白色	유백색 (乳白色)				×	
117	ねーびーぶるー	네ービー브 러	네이비 블루			×	○	
118	ねずみいろ	鼠色	쥐색					
119	のうこん	濃紺	짙은 감색 (紺色)					
120	ぱーぶる	パープル	퍼플					
121	はいいろ	灰色	회색 (灰色)			○		
122	ばいおれっと	バイオレッ ト	보라 (색)			○		
123	はだいろ	肌色	살색			○		
124	はなだいろ	縹色		→		×	×	
125	ばらいろ	薔薇色	장미색 (薔薇色)			○		
126	ひ	緋	주황색 (朱黄色)					緋文字
127	ぴーこっくぐ りーん	ピーcock グリーン	피콕 그린			×	○	
128	ひまわりいろ	向日葵色	해바라기색			×	○	
129	ぴんくいろ	핑크色	핑크		분홍색 (粉紅 色)			
130	ふかみどり	深緑	진한 초록					

131	ふかみどり	深緑	진한 초록 (草綠)					
132	ぶどういろ	葡萄色	포도색 (葡萄色)			○	○	
133	ぶらっく	ブラック	블랙					
134	ぶるー	ブルー	블루					
135	ぶるしゃんぶ るー	プルシアン 블루	프러시안 블루			×	○	
136	베이じゅ	ページュ	베이지					
137	べに	紅	다홍색 (多紅色)					
138	べにいろ	紅色	주홍색 (朱紅色)					
139	ぼたんいろ	牡丹色	모란색			×	×	
140	まゼンた	マゼンタ	마젠타			×	○	
141	まっちゃいろ	抹茶色		→				
142	みかんいろ	蜜柑色	귤색 (橘色)					
143	みずいろ	水色	물색					
144	みどり	緑	녹색 (綠色)		초록 (草綠)			
145	みるくいろ	ミルク色	우유색 (牛乳色)			×	○	
146	むらさき (い ろ)	紫 (色)	보라 (색)					
147	もえぎいろ	萌黄色	연두색 (軟豆色)					
148	もすぐりーん	モスグリー ン	모스 그린					国語辞 典 ×
149	ももいろ	桃色	도색 (桃色)		분홍색 (粉紅 色)			
150	やまぶきいろ	山吹色		→	황매화빛; 황 금빛			
151	らくだいろ	駱駝色	낙타색 (駱駝色)			×	×	
152	りきゅうねずみ	利休鼠		→		×	×	
153	るりいろ	瑠璃色	유리색			×	×	
154	れっど	レッド	레드					
155	れもんいろ	レモン色	레몬색			×	○	
156	れんがいろ	れんがいろ	벽돌색			×	○	
157	ろくしょういろ	緑青色	녹청 (綠靑)			○		
158	わいんれっど	ワインレッ ド	와인레드			×	○	

159	わかくさいろ	若草色		→		×	×	
-----	--------	-----	--	---	--	---	---	--

『デイリーコンサイス日韓辞典』(2009)などから。

〈表 3〉 韓国の代表慣用色名 (133 語)

慣用色名	漢字	辞書	系統色名	日本語	大辞林
가죽 - 색 (프)	一色	×	탁한 노란 주황	革色 (＊)	○
갈 - 색	褐色	○	갈색	茶色；褐色	○
감색	紺色	○	어두운 남색		○
감 - 색	一色	○	진한 주황	柿色	○
개나리 - 색	一色	×	선명한 노랑	れんぎょう色	×
검은 - 색	一色	○	검정	黒；黒色	○
겨자 - 색	一色	×	밝은 황갈색	芥子色	○
계란 - 색	鶏卵色	×	흐린 노란 주황	卵色	○
고동 - 색	古銅色	○	어두운 갈색	古銅色	×
구리 - 색 (구릿빛)	一色	○	갈색	銅 (あかがね) 色；赤銅色	○
국방 - 색	國防色	○	어두운 녹갈색	国防色	○
군청	群靑	○	남색	群靑色	○
귤색	橘色	○	노란 주황	みかん色	○
금발 - 색	金髮色	×	연한 황갈색	ブロンド	○
금색	金色	○	?	金色	○
꽃분홍	一粉紅	×	밝은 자주	花ピンク	×
남보라	藍一	○	남색	藍紫色 (らんししょく)	○
남색	藍色	○	남색	藍色	○
남청	藍靑	○	남색	藍靑色	○
노른자 - 색	一色	×	진한 노랑	黄身色・卵黄色	×
다홍	一紅	○	밝은 빨강	深紅；真っ赤	○
당근 - 색	一色	×	주황	人參色	×
대나무 - 색	一色	×	탁한 초록	靑竹色	○
대추 - 색	一色	×	빨간 갈색	棗色	×
딸기 - 색	一色	×	선명한 빨강	莓色；ストロベリー	○
라벤더 - 색	一色	×	연한 보라	ラベンダー	○
라일락 - 색	一色	×	연한 보라	ライラック	×

레몬 - 색	一色	×	노랑	レモン色	○
로즈핑크		×	분홍	ローズピンク	○
루비 - 색	一色	×	진한 빨강	ルビ色	×
마젠타		×	밝은 자주		○
먹 - 색 (먹빛)	一色	○	검정		○
멜론 - 색	一色	×	연한 녹연두	メロン色	×
모래 - 색	一色	×	회황색	砂色	○
모카 - 색	一色	×	어두운 갈색	モカ色	×
목탄 - 색 (콜그레이)	木炭色	×	검정	チャコールグレイ	○
물 - 색	一色	×	연한 파랑	水色	○
바나나 - 색	一色	×	노랑	バナナ色	×
바다 - 색	一色	○	파랑	海色	×
박하 - 색	薄荷色	×	흰 파랑	薄荷色	×
밤 - 색	一色	○	진한 갈색	栗色	○
백옥 - 색	白玉色	×	흰 초록	白い玉色	×
벚꽃 - 색	一色	×	흰 분홍	桜色	○
베이비 핑크		×	흐린 분홍	ベビーピンク	○
베이지		○	흐린 노랑	ベージュ	○
베이지그레이		×	황회색	ベージュグレイ	×
벽돌 - 색	一色	×	탁한 적갈색	煉瓦色	○
병아리 - 색	一色	×	노랑	ひよこ色	×
보라		○	보라	紫	○
복숭아 - 색 (복숭아빛)	一色	×	연한 분홍	桃色	○
분홍	粉紅	○	분홍	ピンク	○
비둘기 - 색	一色	×	회청색	鳩羽色	×
사과 - 색	沙果色・砂果色	×	진한 빨강	りんご色	×
사파이어 - 색	一色	×	탁한 파랑	サファイア・ブルー	×
산호 - 색 (산호빛)	珊瑚色	○	분홍	珊瑚色	○
살구 - 색 (색)	一色	×	연한 노란 분홍	肌色	○
상록수 - 색	常緑樹色	×	초록		×
상아색 (상아빛)	象牙色	×	흰 노랑	象牙色；アイボリー	○

새면핑크		×	노란 분홍	サーモンピンク	○
석류 - 색	石榴色	×	진한 빨강	ざくろ色	×
선홍	鮮紅	○	밝은 빨강	鮮紅色	○
세룰리안 블루		×	파랑	セルリアンブルー	○
세피아		○	흑갈색	セピア	○
수박 - 색	一色	×	초록	スイカ色	×
스카이 그레이		×	밝은 회청색	スカイグレイ	○
시멘트 - 색	一色	×	회색	セメント色	×
시안		?	밝은 파랑	シアン	○
쭈 - 색	一色	○	탁한 녹색	よもぎ色	×
에메랄드 그린		○	밝은 초록	エメラルドグリーン	○
연두색	軟豆色	○	연두	黄緑	○
연미 - 색	軟米色	×	흰 노랑	?	
연분홍	軟粉紅	○	연한 분홍	?	
연지 - 색	脂色	○	밝은 빨강	胭脂色	○
옥 - 색	玉色	○	흐린 녹색	玉色	×
올리브 그린		×	어두운 녹색	オリーブグリーン	○
올리브 - 색	一色	○	녹갈색	オリーブ色	○
와인레드		×	진한 빨강	ワインレッド	○
우유 - 색	牛乳色	×	노란 하양	牛乳色	×
은 - 색	銀色	○	?	銀色	○
은회 - 색	銀灰色	○	밝은 회색	銀灰色	×
인디고 블루		×	어두운 파랑	インディゴブルー	○
자두 - 색	一色>紫桃	×	진한 빨강	すもも色	×
자주		○	자주	赤紫	○
잔디 - 색	一色	×	진한 연두	芝色	×
장미 - 색	薔薇色	○	진한 빨강	薔薇色；ローズ	○
적갈	赤褐	○	빨간 갈색	赤褐色	○
적황	赤黃	○	진한 주황	赤黄	
점토 - 색	粘土色	×	탁한 갈색	粘土色	×
주 - 색	朱色	○	선명한 빨간 주황	朱色	○

주홍	朱紅	○	빨간 주황	?	
주황 (렌지 색)	朱黃	○	주황	橙色	○
취 - 색	一色	○	어두운 회색	ねずみ色	○
진달래 - 색	一色	×	밝은 자주	?	
진보라	津一	○	진한 보라	深紫	○
진주 - 색	眞珠色	×	분홍빛 하양	眞珠色	○
진홍	眞紅	○	진한 빨강	深紅	○
참다래 (키위) - 색	一色	×	진한 연두	キウイ色	×
청동 - 색	靑銅色	×	탁한 갈색	靑銅色	×
청록	靑綠	○	청록	靑綠 (あおみどり)	○
청포도 - 색	靑葡萄色	×	연두	マスカット色	×
초콜릿 색	一色	×	흑갈색	チョコレート色	○
카네이션 핑크		×	연한 분홍	カーネーションピンク	×
카민		○	빨강	カルミン；カーマイン	○
카키 - 색	一色	○	탁한 황갈색	カーキー色	○
캐러멜 - 색	一色	×	밝은 갈색	キャラメル色	×
커피 - 색	一色	×	탁한 갈색		×
코발트 블루		×	파랑	コバルトブルー	○
코코아 - 색	一色	×	탁한 갈색	ココア色	○
크림 - 색	一色	×	흰 노랑	クリーム色	○
크림슨		×	진한 빨강	クリムソン	○
토마토 - 색	一色	×	빨강	トマト色	×
파스텔블루		×	연한 파랑	パステルブルー	×
파우더블루		×	흐린 파랑	パウダーブルー	×
팥 - 색	一色	×	탁한 빨강	小豆色	○
포도 - 색	葡萄色	○	진한 적자색	ぶどう色	○
포도주 - 색	葡萄酒色	×	진한 적자색		×
풀 - 색	一色	○	진한 연두	草色	○
프러시안 블루		×	진한 파랑	プルシアンブルー	○
피콕 그린		×	청록	ピーコックグリーン	○
하늘 - 색	一色	○	연한 파랑	空色	○
해바라기 - 색	一色	×	진한 노랑	ひまわり色	○

호두 - 색	胡一色> 胡桃色	×	탁한 황갈색	くるみ色	○
호박 - 색 (광물)	琥珀色	○	진한 노란 주황	琥珀色	○
호박 - 색 (채소)	一色 (菜蔬)	×	노란 주황	カボチャ色	×
홍색	紅色	○	밝은 빨강	紅色	○
홍차 - 색	紅茶色	×	진한 빨강	紅茶色	×
황갈 (색)	黃褐 (色)	○	노란 갈색	黃褐色	○
황록	黃綠	○	진한 노란 연두	黃綠	○
황토색	黃土色	○	밝은 황갈색	黃土色	○
회색	灰色	○	회색	灰色	○
흑갈 (색)	黑褐 (色)	○	흑갈색	黑褐色	○
흰눈 - 색 (노우화이트)	一色	×	하양	スノーホワイト	○
흰색 (하얀색)	一色	○	하양	白	○

〈表 4〉日本の慣用色名 (105 語)

番号	色彩名	色彩名	大辞林	韓国語
1	だいだい	橙 (オレンジ)	○	
2	かきいろ	柿色	○	감색
3	はだい	肌色	○	살색 (○) → 살구색 (×)
4	あい	藍色	○	남색
5	やまぶき	山吹色	○	
6	れもん	レモン色	○	레몬색
7	くりーむ	クリーム色	○	크림색
8	しゅ	朱色	○	주색
9	たんぽぽ	たんぽぽ色	○	민들레색
10	ここあ	ココア色	○	코코아색
11	ひまわり	ひまわり色	○	
12	さくら	桜色	○	
13	すみ	墨	○	
14	からし	芥子色	○	
15	ちゃ	茶色 (ブラウン)	○	갈색
16	ちょこれー	チョコレート色	○	

17	わいんれっど	ワインレッド	○	밤색 장미색 (薔薇色)
18	らくだいろ	駱駝色	○	
19	くりいろ	栗色	○	
20	ろーず	ローズ	○	
21	おうどいろ	黄土色 (イエローオーカー)	○	
22	えめらんどぐりーん	エメラルドグリーン	○	
23	こげちゃ	焦げ茶	○	
24	ぴんく	ピンク	○	
25	そらいろ	空色 (スカイブルー)	○	
26	みずいろ	水色	○	
27	みかんいろ	蜜柑色	○	
28	ももいろ	桃色	○	
29	べにいろ	紅色	○	
30	たまごいろ	卵色	○	
31	しこん	紫紺	○	
32	ぐんじょういろ	群青色	○	
33	さびいろ	錆色	○	
34	こむぎいろ	小麦色	○	
35	ねずみいろ	鼠色	○	
36	べびーぴんく	ベビーピンク	○	
37	ピーち	ピーチ	○	
38	さーもんぴんく	サーモンピンク	○	
39	うぐいすいろ	鶯色	○	
40	ぞうげいろ	象牙色 (アイボリー)	○	
41	きんちゃ	金茶	○	
42	あかねいろ	茜色	○	
43	すみれいろ	堇色 (バイオレット)	○	
44	わかくさいろ	若草色	○	
45	くさいろ	草色	○	
46	なすこん	茄子紺	○	진한 암자색 (暗紫色)
47	こん	紺 (ネービーブルー)	○	

48	あずきいろ	小豆色	○	
49	れんがいろ	煉瓦色	○	
50	まりーんぶるー	マリーンブルー	×	
51	こうばいいろ	紅梅色	○	
52	まっちゃいろ	抹茶色	○	
53	すとりべりー	ストロベリー	○	
54	こばるとぶるー	コバルトブルー	○	
55	こけいろ	苔色	○	
56	ろくしょうしょく	緑青色	○	
57	あんずいろ	杏色	○	
58	もえぎいろ	萌黄色	○	
59	えんじいろ	胭脂色	○	
60	こばるとぐりーん	コバルトグリーン	○	
61	あおだけいろ	青竹色	○	
62	えどむらさき	江戸紫	○	
63	えびちゃ	蝦茶（葡萄茶）	○	
64	べびーぶるー	ベビーブルー	○	
65	ぶろんど	ブロンド	○	
66	かつしょく	褐色	○	
67	ぎんねず	銀鼠（シルバーグレー）	○	
68	さんごいろ	珊瑚色	○	
69	てついろ	鉄色	○	
70	べーじゅ	ベージュ	○	
71	はとばいろ	鳩羽色	○	
72	ふじいろ	藤色	○	연한 보라색
73	あやめ	菖蒲	○	푸른빛이 도는 보라색
74	せるりあんぶるー	セルリアンブルー	○	
75	おりーぶぐりーん	オリーブグリーン	○	
76	おりーぶ	オリーブ	○	
77	かーきー	カーキー	○	
78	かなりやいろ	カナリヤ色	○	

79	りきゅうねずみ	利休鼠	○	
80	こだいむらさき	古代紫	○	
81	るりいろ	瑠璃色	○	
82	らんべんだー	ラベンダー	○	
83	せびあ	セピア	○	
84	ぼたんいろ	牡丹色	○	
85	つゆくさいろ	露草色	○	
86	せいじいろ	青磁色	○	
87	かばいろ	樺色・蒲色	○	
88	こはくいろ	琥珀色 (アンバー)	○	
89	ちゃこーるぐれー	チャコールグレー	○	
90	たーこいずぶるー	ターコイズブルー	○	
91	すかーれっと	スカーレット	○	
92	ぴーこっくぐりーん	ピーコックグリーン	○	
93	ときいろ	鴉色	○	
94	ききょういろ	桔梗色	○	남색을 띤 보라색
95	なんどいろ	納戸色	○	
96	らいらっく	ライラック	○	연한 보라색
97	しあん	シアン	○	
98	きなりいろ	生成り色	○	
99	しんばしいろ	新橋色	○	파란빛이 도는 옅은 녹색
100	すおう	蘇芳	○	붉은빛이 도는 보라색
101	あさぎ	浅葱	○	푸른빛이 도는 옅은 녹색
102	もーぶ	モーブ	○	
103	たいしゃいろ	代赫色	○	갈색을 띠는 오렌지색
104	はなだいろ	縹色	○	옅은 남색
105	まぜんた	マゼンタ	○	적자 (赤紫)

『二重プロセス理論に基づく総合的な人間行動の理解とその応用に関する実験的研究』

人間科学部 松本安生

1. 共同研究奨励金グループ名

二重プロセス理論に基づく総合的な人間行動の理解とその応用に関する実験的研究

～学際的学問分野の開拓と現代社会問題解決のための政策分析の実践～

2. 活動内容

①メンバー：

松本安生（人間科学部 人間科学科 准教授）

三星宗雄（人間科学部 教授）

坪井雅史（外国語学部 准教授）

渡辺照洋（経済学部 教授）

柴田直子（法学部 准教授）

②今年度の研究内容

二重プロセス理論に基づく人間行動モデルをもとに、「喫煙リスト」と「温暖化リスク」というタイプが異なる2つのリスク問題を事例として、現代社会における問題解決のための有用な知見を得ることを目的とした以下の実証的研究を行った。

①累積的な喫煙リスクの認知と喫煙行動との関連に関する実証データの収集と分析：昨年度までの大学生を対象とした喫煙リスクの認知と喫煙行動との関連に関する調査結果をもとに、今年度は20代～50代までの幅広い年齢層の一般市民を対象に、喫煙リスクの認知と喫煙行動との関連についてインターネットを通じたアンケート調査を行った。また、幅広い年齢層を対象にしたため、長期の喫煙行動による累積的なリスクの認知についても合わせて調査を行い、その喫煙行動との関

連や年齢及び喫煙歴による影響について分析を行った。これらの調査結果をもとに、喫煙リスクの認知を高めるための普及啓発手法などたばこ規制のための政策提言を3月末までに行う予定である。

②温暖化リスクの認知と温暖化防止行動との関連に関する実証データの収集と分析：昨年度までに、一般市民を対象としたインターネットを通じたアンケート調査を行い、個人の温暖化リスクなどに対する認知と温暖化防止行動との関連について分析を行い、地球温暖化防止のための普及啓発手法に関する提言を行った。今年度はこれらの結果をもとに、横浜市地球温暖化対策事業本部と協力して、横浜市金沢区をモデル地域とした区民アンケート調査を3月末までに行う予定である。このアンケート調査は無作為抽出した区民5000人を対象とした大規模なアンケート調査であり、温暖化リスクや横浜市の地球温暖化対策などに対する認知と温暖化対策への取り組みなどについての実態を把握し、モデル地域における有効な普及啓発手法に関する提言を行う予定である。

以上

『植民地近代性の国際比較——アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験——』

人間科学部 永野善子

1. 研究の目的

本研究は、近年、内外の歴史学・思想史研究で注目されている「植民地近代性」の概念を軸にして、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験に対して新たな視角から接近することをその目的とする。

「植民地近代性」の概念は、植民地的要因が植民地時代に限定されて存在するのではなく、植民地以後にも残滓として各社会の底辺を形づくっている点に着目する。つまり、植民地時代に外部から導入され、あるいは新たに創造された諸要因が、独立後に各社会における自律的要素として自己展開し、その社会の中核的構造をかたちづけているという現実を直視する。したがって、この概念のもとでは、19世紀後半以降における非西欧地域の近代化過程を「西欧／アジア」、「帝国主義／民族独立運動」、「宗主国／植民地」、「支配者／被支配者」の二分法で分断するのではなく、それぞれの国々や人々が抱えてきた共通の問題や異なる課題について、歴史的・空間的座標軸の差異を超えて吟味することが求められる。この意味で、この概念は、非西欧地域で展開された植民地化や近代化の諸相に対して、より深淵な分析を与える可能性をもっている。ただし、これは新しい概念ゆえに、その概念規定が定まっているとはいえない。

本研究は、こうした現状を踏まえて、「植民地近代性」が現れている領域として、「帝国」、「植民地主義」、「ナショナリズム」、「国民国家」、「脱植民地化」、「エスニシティ」の6つの課題を取り上げ、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの諸地

域を対象として、以下の6つを課題として共同研究を行う。そのうえで、「植民地近代性」の概念の新たな構築をめざすものである。

2. 各メンバーの研究テーマ

- 永野善子（人間科学部）
「アメリカ帝国とアジア」
- 小馬 徹（人間科学部）
「イギリス帝国とアフリカ」
- 後藤政子（外国語学部）
「ラテンアメリカとナショナリズム」
- 尹 健次（外国語学部）
「韓国および在日の思想と植民地近代性」
- 村井寛志（外国語学部）
「イギリス植民地と華人社会」
- 泉水英計（経営学部）
「沖縄の脱植民地化論」
- 高城 玲（経営学部）
「東南アジア社会と国民国家」
- 藤村是清（本学非常勤講師）
「華人社会とエスニシティ」
- 菅原 昭（本学非常勤講師）
「タイの国民国家形成と小農的世界」
- 岡田泰平（本学非常勤講師）
「アメリカ植民地とナショナリズム」
- 中林伸浩（松蔭横浜大学）
「植民地主義とアフリカ」

3. 本年度の研究活動について

本共同研究の参加メンバーは各自のテーマにしたがって、海外・国内における資料・聴き取り調査を実施するかたわら、以下2回の研究会を開催

した。

(注記：本報告は、共同研究グループ「植民地近代性の国際比較」の活動報告をかねる)。

<第1回研究会>

日時：6月27日(土) 午後4-6時

場所：本学17号館401号室

講師：岡田泰平氏(神奈川大非常勤講師)

報告論題：「植民地近代化論と公教育の制度的発展」

<第2回研究会>

日時：11月25日(水) 午後4-6時

場所：本学17号館401号室

講師：梅崎かほり氏(慶応義塾大学・神奈川大学非常勤講師)

論題：「記憶と創造—アフロ系ボリビア人の文化復興運動」

4. 2011年シンガポール・ワークショップにむけての準備

本共同研究グループは最終年次の2011年度に国立シンガポール大学人文社会科学部の協力をえて、同大学で公開ワークショップを開催し、その成果を英語で発表する準備を行っている。その準備のための会合を2009年9月25日に開催した。国立シンガポール大学人文社会科学部東南アジア研究学科の関係者が他大学におけるシンポジウム参加のため来日した。その機会を得て、同研究学科の学科長と教授のお二人と本研究グループのメンバー3名が会談した。その結果、2011年11月末に2日間の日程でワークショップを開催することで合意した。本学からは5-6名の参加を予定している。

5. 2010年度の予定

引き続きメンバー各自が海外・国内における資料・聴き取り調査を実施するかたわら、学内で数回の研究会を開催する。また年度末には箱根において合宿セミナーを開催する。海外からのゲストスピーカーを含め3人の研究者を講師として招き、植民地近代性を軸としてアジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験の多様な様相についての考察を深めることを目的とする。

『戦後、とくに GHQ 占領期における在日華僑、在日朝鮮人の生活空間を明らかにする―横浜市・神奈川県内の動きを中心に』 09 年～11 年

外国語学部 大里浩秋

○申請時の研究目的

- (1) 戦後直後から現在に至る日本華僑、とくに横浜在住華僑に関する資料の発掘・収集に努め、従来収集した資料と今回収集する資料を合わせて分析することで、彼らがたどった道のりを整理するとともに、その特徴を明らかにしたい。
- (2) 同時に、戦後直後から 1950 年代初、GHQ 占領期の在日朝鮮人が発行していた新聞や雑誌を分析することで、当時の彼らの生活空間が如何なるものであったかを神奈川県内の動きを中心に明らかにしたい。
- (3) 以上のことは、従来の研究では資料の制約もあってほぼ手つかずの状況にあったが、最近本学図書館が購入したプランゲ文庫を利用することによって、また在日華僑についてはさらに、台湾と中国にある資料を利用することで研究を進展させる目途が立った。この機を逃さずに戦後早い時期の在日華僑、在日朝鮮人が置かれた状況を明らかにし、そうすることで、彼らが現在置かれている状況を比較考察する基礎を固める。

○参加メンバーは、最初の登録では大里浩秋（代表）、貴志俊彦、孫安石、村井寛志、東郷佳朗、尹健次、小林聡明の 7 名だったが、まもなく小熊誠、泉水英計の参加を得て、9 名となった。

○09 年度開いた研究会

1. 6 月 22 日第 1 回

- ・初顔合わせして、各自の関心、これから取り組むことを出し合う。
- ・在日華僑、在日朝鮮人の他、沖縄出身者の戦後についても調べることを確認した。

- ・グループの略称を「プランゲ文庫と東アジア研究会」とすることを確認した。

2. 10 月 19 日第 2 回

- ・小林聡明さん報告「在日朝鮮人雑誌に見る検閲の実態―『民主朝鮮』を中心に」
- ・泉水英計さん報告「極東の『フロンティア』―米国人歴史家が語る冷戦期の琉球と台湾」

3. 1 月 27 日第 3 回

- ・陳来幸さん（兵庫県立大学教授）報告「戦後華僑に関する研究の現状」

共同研究グループ活動報告（2009 年度）

日中関係史

09 年度の活動は、とくに 2 学期は人文学研究叢書発行の準備に追われてしまい、低調に終わった。反省ばかりしても仕方がないが、10 年度を期そうと思う。

研究・講演会

1. 5 月 18 日、于臣（横浜国立大学人間科学部講師）講演
「実業家から見る“義・利・公・私”観念」
2. 5 月 25 日、今井美樹・藤枝貴子 二胡とアルパ演奏会
3. 6 月 8 日、島本雅喜（厚生労働省事務補佐官）講演
「中国残留日本人」から考える一支援の現場から」

人文学研究叢書発行準備

数年来、共同研究奨励助成を得、非文字資料研究センターの活動の一環として取り組んできた「中国・朝鮮における旧日本租界」研究の成果を 1 冊にまとめる作業を行った。中国、韓国の研究者の寄稿を得て、『中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産』と題する本が 3 月初御茶の水書房から公刊される。

（大里浩秋）

文化のかたち

活動内容：

メンバー各自で自身の研究対象においての調査・考察・講演活動等を進めていった。

また、7 月 24 日には、関西外国語大学短期大学部の吉村耕治教授をお招きし「日英の言語文化研究の楽しみ ―現代の文化交流を視野に入れて―」のテーマで講演会を開催した。また、2010 年 2 月 8 日には、台湾の中国文化大学助理教授であ

る塚本善也氏に「ロシア・台湾・日本の文化交流をめぐって」のテーマで講演会を開催した。

来年度以降は、各自の成果報告を活発に行い、叢書『文化のかたち』第二弾を具体的に検討して行くつもりである。

（堤 正典）

西洋文化の受容 ――思想と言語――

1. テーマ：近代日本における西洋文化受容の総合研究
2. 代表者：鈴木修一
3. 活動内容：5 年間をかけて読み続けてきた『明六雑誌』の成果を、本研究所叢書 20 号『明六雑誌』とその周辺――思想と言語』として出版した。（2004 年度）

その後、新たに近代初期の洋学資料を読む計画をもっているが、本年度は休会という状態であった。

（鈴木修一）

各国地方史の比較的研究

今年度は下記講演会を行った。

1. 研究テーマ：世界史を、国家、民族、文明というレベルで考察するのではなく、地方史のレベルから見直すこと。
2. 代表：村井寛志
3. 活動内容：

これまで、主に中国史研究者と他分野の研究者の交流を中心に、年に数回の研究会を行ってきた。本年度は下記講演会を開催した。

【講演会】「中国残留日本人」から考える一支援の現場から一」

【講演者】 島本雅喜氏（厚生労働省事務補佐員（通訳））

【日時】 2009 年 6 月 8 日

（村井寛志）

東アジア比較文化研究会

研究会開催予定

日 時：2月18日（木）16：30～

発表者：深澤 徹

「きつねたちは、どこからきて、どこへ
いくのか ―変換装置としての『三国
相伝』―」

活動内容

休眠状態からの脱却をはかるべく、上記の研究
会を開催した。

（山口建治）

色彩と文化

当研究グループは、2007年度奨励共同研究助成
金を得（課題名「世界の色の記号に関する実証的
研究―自然・言語・文化の諸相―」）、活動の本拠
をそちらに移した。テーマもメンバーもほぼ重
なっているため、「色彩と文化」の研究活動報告
については割愛する。2010年度出版予定。

（人間科学部 三星宗雄）

言語変異研究

1. 研究内容：言語と社会の関係に関する総合的
な研究、今年度は主に多言語社会の言語教育と
言語政策を中心に活動を行った。

2. 代表：彭国躍

3. 講演会：

テーマ：「シンガポールにおける中国語教育と
言語政策」

講演者：シンガポール南洋工科大学助教授 徐
峰氏

日 時 と 場 所：11月30日 15：00～16：00
20号館 317B

（彭 国躍）

ジェンダー・ポリティクスのゆくえ

今年度は主に本共同研究グループのこれまでの

活動の成果をまとめて研究書として出版するた
めの準備を行った。神奈川大学人文学研究叢書と
して出版する準備が現在順調に進められており、
『ジェンダー・ポリティクスを読む 表象と実践
のあいだ (*Reading Gender Politics: Between Repre-
sentation and Practice*)』というタイトルで2010年
3月に御茶の水書房より出版される予定である。

叢書の内容について討議するために以下の研究
会を開催した。

第1回研究会

開催日：2009年3月23日（月）

会場：20号館英語英文学科共同研究室

発表者1：山口ヨシ子（外国語学部教授）

演題：「女性改革者たちの社会福祉ネットワー
ク アダムズ『ハルハウスの二十年』」

発表者2：村井まや子（外国語学部准教授）

演題：「やなぎみわ『フェアリーテール 老少
女綺譚』 フェミニストおとぎ話研究の
視点から」

第2回研究会

開催日：2009年7月6日（月）

会場：20号館英語英文学科共同研究室

発表者：笠間千浪（人間科学部教授）

演題：「英語圏における日本社会研究につい
て：ジェンダー／セクシュアリティ研究
を中心に」

（村井まや子）

コミュニケーション研究会

この研究会の活動は、神奈川大学共同研究奨励
助成研究グループ『二重プロセス理論に基づく総
合的な人間行動の理解とその応用に関する実験的
研究』の活動と重複するため、そちらをご参照下
さい。

（松本安生）

ブランゲ文庫研究会

本学図書館が所蔵するブランゲ文庫新聞・雑誌

コレクションの共同研究を目指す本研究会は、4月初旬、プランゲ文庫の資料の利用のために新規導入されたコンピュータ関連の説明を受けたほか、以下、3回の研究会を開催した。

第1回 6月22日

【報告】

1. 神奈川大学学内研究助成の採択について
2. 今後の研究会運営について
3. プランゲ文庫とGHQ・SCAPIN文書の活用について（小林聡明）
4. 2009年10月、例会と講演会の開催について

第2回 10月19日

【報告】

1. 研究会運営について
2. 個別報告

「在日朝鮮人雑誌への検閲実態—『民主朝鮮』を中心に」小林聡明（日本学術振興会特別研究員）

「極東の『フロンティア』—米国人歴史家が語る冷戦期の琉球と台湾」泉水英計（神奈川大学経営学部）

第3回 2010年1月27日

1. 研究会運営について
2. 個別報告

「戦後の在日華僑とプランゲ文庫との関連を中心に（仮）」陳来幸（兵庫県立大学経済学部）

（孫 安石）

表象文化研究会

第1回研究会

日時 2009年7月29日（水）16：00～18：00

場所 17-216 人文学研究所

発表者 ① 鳥越輝昭

「ディエゴ・ヴァレーリとヴェネツィア表象史」

② 日高昭二

「交錯する表象—生田長江『円光』をめぐる絵画・小説・演劇—」

第2回研究会

2010年3月に開催予定

（山口ヨシ子）

活字文化研究会

本研究会は、日本語の活字文化普及促進のための人文社会学的視点からの新しい政策的提言を目指している。このための知見を得るため、今年度は国内外における日本語学習者の視点から日本語の活字文化に対する調査研究を行った。具体的には、海外日系人協会との協力のもとで、ブラジルやパラグアイなどの南米諸国の日系人日本語学校における日本語書籍の活用とその効果把握のための調査研究を開始した。また、国際ロータリーとの協力のもとでタイ、インドネシア、台湾、ベトナムなどのアジア諸国の日本語学習機関においても同様に日本語書籍の活用とその効果把握のための調査を開始した。なお、これらの調査で活用している日本語書籍については、産学連携事業に基づく協力のもとでブックオフコーポレーション㈱よりご提供いただいた。

（松本安生）

モダリティ研究プロジェクト

（1）研究会

開催日：2009年11月4日（水）

発表者：辻子美保子（神奈川大学外国語学部教授）

“Case Licensing in Japanese: Similarities and Differences between Clauses and Nominals”

会場：神奈川大学横浜キャンパス 20-312A

（2）「モダリティ・プロジェクト」ワークショップ 2009

—モダリティと統語論—

開催日：2009年12月5日（土）

会場：神奈川大学横浜キャンパス 20-204

発表者：長谷川信子（神田外語大学大学院）

言語科学研究科教授)

「語用論的機能と統語構造：日
本語の CP 領域現象から」

岸本秀樹 (神戸大学大学院人文
学研究科教授)

“Topicalization and Clause Pe-
riphery in Japanese”

上田由紀子(秋田大学教育文化学
部准教授)

「情報構造と統語論の接点：CP
領域の機能」

寺崎英樹 (神奈川大学外国語学
部特任教授)

「スペイン語における推量のモ
ダリティ表現」

佐藤裕美(神奈川大学外国語学部
准教授)

「条件節の時制, モダリティと
話者」

(神奈川大学共同研究奨励助成プロジェクト「統語論及び語用論的アプローチによるモダリティの対照研究」の中核グループとして参加。研究成果の発表と今後の研究の指針について外部の研究者との有益な意見交換の機会であった。)

(佐藤裕美)

新購入主要文献解題

『國譯禪宗叢書』（第1輯第1～12巻）（第2輯第1～10巻）

昭和49年 国民文庫刊行会編 第一書房出版

彭 国躍

本叢書は、宋代から明代（約12～17世紀）の間に書かれた中国の禪宗語録と室町時代に書かれた日本漢文による禪宗語録をまとめた原語と和訳本である。この叢書は、中国と日本の間の宗教、思想、文化の交流史を研究する場合においてだけでなく、日本の漢文受容という言語接触研究においても、現代中国語の成立という言語史研究においても重要な文献である。中国において10世紀以降は、文語体「文言」と口語体「白話」の併存が続いていたが、早期の口語体の文献は現代中国語の語彙や文法の形成プロセスの記述研究にとって貴重な資料となる。この叢書は日中文化交流史研究、言語接触研究、中国語通時論研究などの基礎資料として活用されることを期待している。

『雲南民族口伝非物質遺産総目提要』全六冊

同上編纂委員会 雲南教育出版社 2008年6月

山口建治

本書は、2002年から5年間をかけて行った現地調査により、蒐集された雲南の傣・蔵・彝・納西・白・壮・哈尼・苗など26の少数民族の「口伝非物質文化遺産」（口頭伝承の無形文化財）23,000余種を3つの巻で収録する。《神話伝説巻》は、創世神話5,100余種を、《民間故事巻》は、幻想故事5,200余種を、《史詩歌謡巻》は、情歌10,000余種をそれぞれ掲載する。

この書の出版意義は、雲南各民族の歴史文化研究の深化発展に資すること、目録学の内容を豊かにし広げたこと、口伝非物質文化遺産の伝承普及の促進に資すること、民族の団結、調和社会建設役立つことなどであるという。

新購入主要文献解題

長崎盛輝著 「譜説 かさねの色目配彩考 上・下巻, 解説」(京都書院)

大部なもので、図書というよりは「置物」に近い。限定500部中、34番という記載がある。まずこのような高価な図書の購入を承認して下さった研究所の鳥越輝昭所長および常任委員の方々に謝意を表したい。今年度少なくとも1人の学生がこれを用いて卒論を完成させた。ゼミの性格上今後継続して学生が利用することになろう。また解題者も手元に置いて日々鑑賞しているところである。

「かさねの色目」とは「重色目」または「襲色目」と記されるが、前者は袷仕立の衣の表裏の袷を重ね合わせた色を指し、後者は装束としてその衣を何枚も重ね着してその表にあらわれる衣色の配列を指す(同書 解説)。「色目」は「色のパターン」,「配彩」は「配色」といった意味である。平安朝以来わが国で発達してきた独特の配色の考え方である。

本書では上巻に196種の重の色目が、下巻に98種の襲の色目が収録され、それぞれ多くの代表的な色譜が解説と共に添えられている。文字通り見るだけでも飽きない色彩の配色美術館である。色彩に関しては、江戸前期の儒者木下順庵が、「色ノ文字ニナリテハ、詩人文人ノ言ハ何ノ益ニ立タズ(中略)、色バカリハ言ウヲ以テハ伝フベカラズ。是レ此色ト見スルヨリ外ナシ・・・」と記したごとく(同書 解説)、まずは見ること、体験することである。

しかしその色目を表わす言葉もすばらしい。季節的に重の色目の「梅」の項を見ると、梅、一重梅(ひとえうめ)、梅重(うめがさね)、裏梅(うらうめ)、白梅、紅梅、紅梅匂(こうばいのおい)、苔紅梅(つばみこうばい)、裏陪紅梅(うらまさりこうばい)、雪下紅梅があり、それぞれ異なった色目が配されている。

一輪の梅の花からこれだけの色彩の組み合わせを連想することは、果たして現代の私たちの感性からして可能なのだろうかと思う。千年前の人々の、自然の移ろいに敏感に反応し、その感性を研ぎすました情景にただただ思いを馳せるのみである。

(人間科学部 三星宗雄)

所員の自著紹介

小林 潔 (外国語学部国際文化交流学科)

Sekiguchi-Grammatik und die Linguistik von heute.

Kennosuke Ezawa, Kiyooki Sato, Harald Weydt (Hrsg.).

Stauffenburg Linguistik, Band 50. Tübingen: Stauffenburg Verlag. Nov., 2009. 142 Seiten.

ISBN 978-3-86057-188-0

関口存男 (1894-1958) のドイツ語文法論に関する研究論文集。ドイツ語及び英語の論考 13 本を収録。2007 年 3 月 22-23 日開催のシンポジウム「関口文法と現代言語学」(主催: 浜松医科大学総合人間科学講座佐藤清昭研究室・東西言語文化研究協会 (ベルリン), 於浜松医科大学) での日独の報告者の加筆修正稿 10 本及び寄稿 3 本の他, 2002 年のコセリウ姫路講演, 関口の略伝・書誌・文例集項目を収める。論文の部は, 1. 世界の言語研究の中での関口文法 (4 本); 2. 関口文法の特徴 (6 本); 3. 関口文法応用の方法論的・教育学的考察 (2 本) の 3 部と日本語言語学テキストの翻訳論 (1 本) からなる。テーマは, 認知言語学, 言語規範研究, 冠詞・前置詞研究, コーパス言語学など, いずれも現代の言語学・応用言語学と関わるものである。

小林は第 3 部に „Sekiguchi-Grammatik und die didaktische Grammatik des Russischen in Japan. [関口文法と日本に於けるロシア語教育文法] “ を掲載, 日本のロシア語学者への関口文法の影響とロシア語教育での応用可能性を論じた。

『留学生派遣から見た近代日中関係史』

大里浩秋・孫安石 編

御茶の水書房 09 年 2 月刊。

日中関係史の研究会や科研費を得て行ってきた共同研究の数年来の成果をまとめて 1 冊にしたもので, 08 年度の科研費出版助成を得て出版することが出来た。

本書は, 題名につけたごとく, 日中相互の留学生派遣の実態を通して近代の日中関係史がいかなるものであったのかを考え, 明らかにすべく努めた作品である。論文篇と資料篇に分けているので, その順に内容を要約する。

論文篇は日本人の中国留学に関する 3 篇と, 中国人の日本留学に関する 6 篇から構成されている。近代以降日本人が中国に留学し始めるのは, 明治初年のことで, 陸軍が中国語の習得と中国事情調査のために若者を派遣しているが, 当時の留学は, 今と違って学校に入って勉強するのではなく, 個人的に中国人教師を探して中国語を学び, あとは独力で中国を歩き回って調査したことをもって留学と称しているのである。その辺の事情に始まって大正, 昭和と外務省や銀行など各種団体が留学生を派遣する状況や, 留学生個人の体験を概括的に述べているのが桑兵論文である。孫安石と大里浩秋の論文は, 前者が明治・大正期を中心に述べているのに対して, 後者は昭和期を扱っているという違いがあるものの, いずれも外務省が中国に留学生を派遣した事情と個別留学生の動きを明らかにするものであり, 次第に緊迫の度を増す対中関係に役立つ外交人材を育てるべく苦心する外務省の派遣内容の変化を追うことができる。

残る中国人日本留学に関わる 6 篇は, 川崎真美論文が明治期を扱い, 孫安石論文が明治から昭和までを扱う以外は 1930 年代から 45 年までの時

期を扱っている。川崎論文は、清末に中国からの留学生派遣が開始される直前における、いわば清朝が派遣を考える契機となったとみなされている駐清公使矢野文雄の提案をめぐる日中政府双方の反応を明らかにしている。孫論文は、学校で勉強するという形ではない役所や工場での専門知識や技術を習得することを目的とした留学の実例を紹介している。あとの4篇は、1930年代から45年までの日本留学をいくつかの地域における派遣の実態から明らかにしたものであり、そのうち劉振生論文は「満州国」からの、祁建民論文は内蒙古からの派遣状況を紹介しており、川島真論文は華北、三好章論文は維新政府、ついで汪兆銘政権が置かれた南京からの派遣状況を紹介している。この4篇はいずれも、日本が「満州」から中国全土へと軍事的、外交的攻勢を強めた時期に日本側の主導下に展開された留学派遣の実態を明らかにしている点で共通するものがある。

以上論文篇に収める9篇に言及した。日本人の中国留学については、従来は個別留学生に言及した文章はいくつかあるものの、総体的な歴史の流れとして明らかにする研究がなかった点で、今回の3篇は一石を投じたことになる。また、1930年代から45年までの日本留学に関する研究が皆無に等しい状況にあったのを、今回の諸論文がそれぞれの地域からの派遣の事情を明らかにすることができた点で、本書が今後の留学生研究に与える影響は少なくないであろう。

次に資料篇について一言する。中華民国国史館「教育部留日事務档案」は、国史館に大量に所蔵されている中国人日本留学関係の原資料を表の形で要領よく紹介したものである。「同仁会と『同仁』」および「日華学会と『日華学報』」は、中国人留学生の受け入れに関わった日本側団体とそこで長年にわたって発行されていた機関誌の目次を整理して紹介したもので、全冊揃った形で保存している図書館が無い現状においては、内容を確認する点で貴重である。さらに「『留東学報』目次」は、1930年代半ば日本留学中の中国人が発行した同人誌で、日中戦争が起こる直前における留学生の問題関心を知ることができ、『中国留日同学会季刊』は、日中戦争勃発後に汪兆銘政権の周辺に

いる日本留学体験者によって組織された団体の機関誌で、『留東学報』に集まった留学生とは立場を異にして当時の日本の中国への関わりには反対しない内容で構成されている。いずれも今後この研究を進める上での貴重な資料となろう。

本書は、先に公刊した『中国人日本留学史研究の現段階』（御茶の水書房、2002年）の続編として準備されたものである。前作の不足を補い、今後の研究への問題提起となる内容を盛ることが出来たと自負している。（大里浩秋記）

人文学研究所共同研究グループ一覧

2009年7月

	名 称	研究テーマ	活 動 計 画	代表者	メンバー	人数	叢書
1	日中関係史	近代以降、現在までの日中関係の諸問題	1. 日・中双方の留学に関する調査研究 2. 中国・韓国における旧日本租界に関する調査研究 3. 在日華僑に関する調査研究 4. メンバー各自の関心に基づく研究会の開催 5. 学外研究者の講演会の開催（2～3回） 6. 今年度、叢書の準備をし、出版する。	大里	大里・中島（三）・松本（安）・日高・山口（建）・鈴木（陽）・彭・孫・村井（寛）・〔営〕貴志・〔非〕吉川（良）・楊（中）・梁・呉・〔学外〕小林（一）・季・川島・並木・木山・田畑・三好	21	2009年出版
2	文化のかたち （Culture as Gestalt）	21世紀の新千年にふさわしい総合的な文化や文明の把握をめざして、新しい『知の地平』を切り開く。	2005年に叢書『文化のかたち 言語・思想・くらし』を刊行したが、第二弾を出版するを目的として活動する。すでに第二弾の企画がいくつかメンバーから出ているので（日本とロシアの文化の様々な側面における交流や両者の文化比較をテーマとする、など）、研究報告等の研究活動を行っていく中で調整しながら、叢書の具体的な内容についてまとめていく。また、研究報告会の他にも、メンバーにおいて計画が整えられれば、シンポジウムなども開催したいと考えてるので、検討していきたい。	堤	水野・岩本・羽佐田・小馬・鈴木（修）・堤・石井（美）・細田・駒走・マコウミ・小林・〔非〕八島・〔非〕米重・〔学外〕湯田・〔学外〕赤坂・〔学外〕中本・〔学外〕佐藤（江）・〔学外〕大須賀	18	2010年検討中
3	西洋文化の受容—思想と言語—	日本の近代化に際しての、ヨーロッパ及びアメリカ文化の受容	『明六雑誌とその周辺』を刊行後、共同研究グループとしての活動はしばらくブランクが続いているが、各自の個別的活動は、『表象としての日本』に再統合されたり、新学科「国際文化交流学科」の授業に向けてなされている。しかし本年度は、再び共同研究としてテーマを再考の上、定期的に活動を始めたいと思う。	鈴木（修）	鈴木（修）・伊坂・岡島・中島（三）・佐藤（夏）・孫・〔法〕吉井・〔経〕池上・〔学外〕高野・〔学外〕岡野（哲）・〔学外〕浅山	11	2003年出版
4	各国地方史の比較史的研究—新編中国地方志叢書を中心として—	世界史を現存する国家、民族、文明ではなく、地方史という地域史的観点から見直すことを目的とする。	人文学研究所は、中華人民共和国地方志叢書を、大量に所蔵し、又現在も継続購入している。この貴重な蔵書を本学の中国研究者を中心に、読み、調べ、分析する。その為の研究会を開催し、世界各地域の研究者にも参加してもらい、現在の国家、民族、文明に収斂しない文化の多様性を再発見する作業を行う。	村井（寛）	孫・大里・岡島・村井（寛）・〔経〕柳沢・〔営〕廣田・貴志・〔学外〕佐々木・〔学外〕谷川・〔学外〕小林（一）・〔非〕吉田・〔職員〕額賀	12	
5	東アジア比較文化研究会	日本、中国、朝鮮等の言語、文学、歴史、民俗などの伝承文化の比較研究	7月初旬、中国の伝統演劇崑劇の演出家を招き講演会を開催する。 年に2～3回の研究会、講演会を開催する。	山口（健）	山口（建）・福田・日高・大里・彭・鈴木（陽）・孫・小馬・前田（楨）・尹（亭）・深澤（徹）・〔経〕佐野・〔営〕廣田	13	未定
6	色彩と文化	世界の色の記号に関する実証的研究	1. 原則、月1回の研究会を開く。 2. 年、数回の講演会を開催する。 3. 比較言語学、色名の知覚的ゆらぎ、ジェンダー、景観、色彩と文化、色彩と自然との関わりについて実験、調査する。	三星	三星・新木・小林・堤・八久保・彭・矢野・尹（亭）・〔営〕加藤（薫）・〔工〕山本・〔非〕畑田・〔学外〕車・〔学外〕行廣	14	2010年予定
7	神々のコスモロジー	世界と日本の宗教のに関して、様々な分野の研究者がその世界観、教義、意識等、具体的なあり方を考察し、宗教や神々意義を再検討する。	夏休みまでに数回の研究会を開催する。 来年春までに原稿執筆を予定しているが…。	寺沢	寺沢・小馬・鈴木（彰）・山口（建）・尹（亭）・新木・〔営〕新垣・〔学外〕湯田	8	2010年検討中
8	言語変異研究	1. 地域文化と言語変異 2. 言語政策と言語変異 3. 言語教育と言語変異	1. テーマに即した文献資料の収集 2. 研究調査 3. 講演会、研究会の開催	彭	彭・松村・加藤・〔非〕山村・陶琳・宮本	6	

	名 称	研究テーマ	活 動 計 画	代表者	メンバー	人数	叢書
9	ジェンダー・ポリ ティクスのかくえ	ジェンダー・ポリティクスにかかわ る諸問題についての学際的・国際的研 究	今年度は叢書の出版に向けて例会、研究会を数回予定している ほか、アメリカから研究者を招いて講演会を開催する準備を進 めている。叢書はメンバー 6 名に加えてアメリカと台湾の研究 者 2 名が執筆する。	村井 (ま)	入江・河上・山口 (ヨ)・笠間・村井 (ま)・金 (貞)・〔法〕井上	7	2009 年 出版
10	コミュニケーション 研究会	多面的な人間の意義と行動の理解及 びそれを基にしたコミュニケーション の方法論についての研究	共同研究奨励助成「二重プロセス理論に基づく総合的な人間行 動の理解とその応用に関する実験研究」に基づく調査・研究の 実施	松本	松本・三星・坪井・古屋・富谷・〔非〕杉本・ 〔非〕大高	7	無
11	植民地近代性の国際 比較	「植民地近代性」の概念を軸として、 日本、アジア、アフリカ、ラテンア メリカ諸国の政治・社会・文化・歴 史の比較研究を行う。	年 2～3 回の研究会を開催する。	永野	永野・小馬・笠間・後藤・村井 (寛)・尹 (健)・〔経〕的場・〔営〕泉水・〔営〕高城・ 〔非〕藤村・〔非〕藤音原	11	
12	ブランゲ文庫研究	神奈川大学図書館が所蔵するブラン ゲ文庫の研究をおこなう	昨年 (2008 年) には私立大学補助金申請が採択され、ブランゲ 文庫の新聞コレクションが図書館に納入された。また、図書館 でも同資料の利用のため PC の導入を決定した。2009 年度は同 資料の読み込みをかけて 3～4 回の研究会を開きたい。	孫	寺沢・大里・貴志・孫・村井 (寛)・尹 (健)・ 鈴木 (修)・〔学外〕川島・小林・呉	10	無
13	表象文化研究	表象文化研究は、以下 3 つの領域に わたって展開する。 1. 文字、図像、絵画、演劇、映像な ど、再現＝表象としての美学的な 探求。 2. ジェンダー、植民地など、代表＝ 表象としての文化政治学的な探求 3. 表象を軸とした、都市、身体、メ ディアなど、幅広い文化学上の探 求。	1. 研究発表の開催 今年度は、年間 3～4 回を予定している。 2. 講演会の開催 今年度は、1～2 回程度の講演会を予定している。 3. 研究会と講演会を積み重ね、数年後に人文研究所叢書を出版 する。	山口 (ヨ)	伊坂・岡島・小松原・鈴木 (修)・鈴木 (陽)・ 鳥越・日高・平井・村井 (寛)・村井 (ま)・山 口 (ヨ)・〔学外〕アルド・トッリニ	12	検討中
14	活字文化の研究	1. 活字を通じた、日本語教育と異文 文化理解 2. 活字文化普及のための教育、啓発 手法 3. 活字文化普及が与える社会、経済 的影響	1. 研究テーマに即した調査、研究を行う。 2. 研究会を開催する。	松本	松本・新木・高木・坪井・間山・尹 (亭)・駒 走・小松原・〔非〕和美・木村	10	無
15	モダリティ研究プロ ジェクト	統語論的及び語用論アプローチによ るモダリティの対象研究	・命題内容を指示する「話者」の態度としてモダリティ減少を 捉える。 ・日・英・中・西・仏・露・伊の 7 言語のそれぞれに、またこ れらの言語を横断的に、モダリティ現象がどのように観察さ れるかについての対照研究。 ・統語論、語用論の 2 つのアプローチを横断して、モダリティ 現象がどのように捉えられるかを考察する。 ・各言語教育において、モダリティ現象がどのように扱われて きたかを検証し、どのように教えられるべきかを考察する。	佐藤	武内・彭・堤・西野・辻子・岩畑・尹 (亭)・富 谷・佐藤・小林	10	

〔名〕名誉教授 〔非〕非常勤講師 〔学外〕学外研究者